

盛岡市内遺跡群

— 平成 20・21 年度発掘調査報告書 —

大館町遺跡	第 81・82 次
大新町遺跡	第 80 次
繫 V 遺跡	第 35 次
山王山遺跡	第 12 次
新堰端遺跡	第 11 次
西鹿渡遺跡	第 23 次

2011. 3

盛岡市教育委員会

序 言

盛岡市は、北上平野を縦断する北上川と、その東西に位置する奥羽山脈と北上山地から流れ出る雫石川・中津川との合流点に位置し、雄大な岩手山や姫神山を望む約30万人の人口を抱える岩手県の県都です。北東北の拠点都市として緑豊かな環境と高度都市機能の調和したまちづくりを目指しています。

市内には旧石器時代から江戸時代まで、およそ780箇所の遺跡が存在します。その中には、国・県・市指定の史跡として保存・活用が図られているものもありますが、各種開発等によって姿を変え、消滅していく遺跡があることも事実であります。

盛岡市では、文化財保護の立場から、国の補助を受け市内各地の個人住宅建設にともなう調査を継続的に実施しており、当市の歴史を紐解く上で、大変貴重な成果をあげております。

本書は、平成20・21年度に実施した市内遺跡群の発掘調査の報告書であります。大館町遺跡では縄文時代中期の集落内の墓坑群が確認されています。また、新堰端遺跡では志波城跡の一町溝が発見されるなど、貴重な成果が得られています。市民の皆様の地域理解の一助として、また学術的な研究資料として広く活用いただけましたら幸いと存じます。

最後に事業の実施や調査・報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただいた地権者ならびに多くの市民の皆様、ご指導やご助言くださった文化庁記念物課、岩手県教育委員会生涯学習文化課をはじめ関係機関の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成23年3月

盛岡市教育委員会
教育長 八巻 恒雄

例 言

- 1 本書は、「盛岡市内遺跡群 ―平成 20・21 年度発掘調査報告書―」である。
- 2 本書の執筆は神原雄一郎，佐々木亮二，佐々木紀子が行い，遺跡の学び館職員と協議して編集した。
- 3 遺構平面位置は，日本測地系 平面直角座標 X 系を座標変換した調査座標で表示した。
大館町遺跡 X -32,000 ・ Y +24,500 大新町遺跡 X -32,000 ・ Y +24,500
繫 V 遺跡 X -36,000 ・ Y +16,000 山王山遺跡 X -33,500 ・ Y +28,500
新堰端遺跡 X -35,000 ・ Y +23,700 西鹿渡遺跡 X -37,400 ・ Y +28,600
- 4 高さは標高値をそのまま使用している。
- 5 土層図は堆積のしかたを重視し，線の太さを使い分けた。土層注記は層理ごとに本文でふれ，個々の層位については割愛した。層相の観察にあたっては『新版標準土色帖』（1994 小山正忠・竹原秀雄）を参考にした。

- 6 遺構記号は次のとおりとした（大館町・大新町・繫 V・山王山・西鹿渡遺跡）。

遺 構	記 号	遺 構	記 号	遺 構	記 号
竪穴住居跡	RA	土 坑	RD	炉跡	RF
掘立柱建物跡	RB	竪 穴	RE	溝	RG

- 7 新堰端遺跡の遺構記号は次のとおりとした。

遺 構	記 号
溝跡	SD

- 8 調査体制 ―平成 22 年度―

教育長	八巻恒雄
教育部長	佐藤義見
教育次長	萬 明夫
歴史文化課長	亀山助正（遺跡の学び館長兼務）
主 幹	千田和文（遺跡の学び館長補佐兼務）
課長補佐	袖上 寛（文化財・史跡担当）
文化財主査	室野秀文，菊池幸裕，津嶋知弘，神原雄一郎
文化財主任	権頭祐子，今野公顕，花井正香，佐々木亮二
主 任	江本淳史
主 事	寺島幸子，佐々木俊一，明地幹子
文化財調査員	鈴木賢治，佐々木紀子，吉田里和，小西治子，渡邊久美子，米澤 綾
学芸調査員	佐々木逸人，相馬容子（～6月），大平佳澄（7月～）

[発掘調査・室内整理作業]

阿部正幸, 天沼芳子, 泉山紀代子, 伊藤敬子, 及川京子, 長内理恵, 加藤久栄, 嘉糠和男, 川村久美子, 工藤エキ, 工藤則子, 熊谷あさ子, 熊谷國子, 小松愛子, 齊藤静子, 佐々木由子, 佐藤和子, 佐藤公一, 佐藤美智子, 澤野むつ子, 白岩千佳, 竹花栄子, 谷藤貴子, 田村祐一, 千葉ふさ子, 千葉留里子, 中村 昇, 中村弘美, 袴田英治, 橋本良子, 樋口泰子, 日野杉節子, 平賀眞利子, 福田香乃, 藤田友子, 細田幸美, 藤村睦美, 藤原亮子, 松政里奈, 武蔵照子, 村上幸子, 村上美香, 女鹿麗子, 山下摩由美

[地権者・調査協力]

高橋茂夫, 斎藤 保, 姉帯卓也, 鈴木 哲, 角 淳史, 角 綾, 富榮義明, 岩手県教育委員会

9 発掘調査にともなう出土遺物および諸記録は, 盛岡市遺跡の学び館で保管している。

○遺物の表現について

- (1) 土器……土器の区分は, 縄文土器・土師器・あかやき土器・須恵器に大別した。
 - a 縄文時代早期, 前期初頭に属する土器の実測図・拓本の縮小率は1/2とし, その他は1/3とした。
 - b 挿図の土器の配列は器種・器形・文様モチーフ及び施文技法でまとめた。
 - c 縄文土器で稜線・沈線は実線・破線で表し, 陰影は表現していない。
 - d 土師器の黒色処理や彩色されたものは, 網目(スクリーントーン)で表現した。
- (2) 石器
 - a 剥片石器の縮小率は1/2, 礫石器は1/3とした。
 - b 石器の展開順序は, 基本的に左側に表面(背面), 中央に右側面, 右側に裏面(腹面・主要剥離面)を配列し, 必要に応じて側縁・縦断面・横断面を付け加えた。
 - c 挿図の配列は出土層位順に配列し, さらに器種ごとにまとめ, 配列した。
 - d 剥片石器の摩擦痕は網目(スクリーントーン)で示し, 礫石器の自然面はドットで示した。
- (3) 土製品・石製品
 - a いずれも縮小率を1/2とした。
 - b 挿図の配列は出土した層位順とし, さらに器種ごとにまとめて配列した。
- (4) 挿図中の記号番号は, 遺物の出土地点及び出土層位を表している。

(例) G 6 - A 20 III a 層 (例) 1号墓 A層 → 1号墓A層より出土

↓	↓	↓
※1	※2	※3

 - ※1 大グリッド……遺跡の全体を50mメッシュで区切り設定した。北西隅を起点に西から東にA・B・C……のアルファベット, 北から南には1・2・3……のアラビア数字を付し, A6, C12など, 両方の組み合わせでグリッド名を表した。
 - ※2 小グリッド……大グリッドの中をさらに2mメッシュで区切り, 北西隅を起点として西から東にA~Yのアルファベット, 北から南に1~25のアラビア数字を付し, グリッド名は両方の組み合わせで表した。
 - ※3 遺物の出土層位を示す。

○遺構の表現について

各遺構の平面図で, 複数の遺構を同一図面に表示する場合, 説明する遺構は実線で表し, 重複遺構は一点鎖線で表し, 掘込面に層位差のある重複遺構は二点鎖線で表した。

土層図は堆積のしかたを重視し, 線の太さを使い分けた。層相の観察にあたっては『新版標準土色帖』(1994 小山正忠・竹原秀雄)を参考にした。

目 次

例 言

目 次

表目次

挿図目次

写真図版目次

I	平成20・21年度発掘調査概要	1
II	大館町遺跡第81・82次調査, 大新町遺跡第80次調査	5
III	繫V遺跡第35次調査	44
IV	山王山遺跡第12次調査	54
V	新堰端遺跡第11次調査	65
VI	西鹿渡遺跡第23次調査	69

表 目 次

第1表	平成20年度盛岡市内遺跡群発掘調査事業調査遺跡一覧	1
第2表	平成21年度盛岡市内遺跡群発掘調査事業調査遺跡一覧	1
第3表	山王山遺跡調査成果一覧	54
第4表	新堰端遺跡調査成果一覧	66
第5表	西鹿渡遺跡調査成果一覧	70

挿 図 目 次

第1図	調査遺跡分布図	2
第2図	大館遺跡群全体図	7.8
第3図	大館町遺跡第81次調査区全体図	11
第4図	R A 2241 竪穴住居跡	13
第5図	R A 2241 竪穴住居跡出土遺物(1)	15
第6図	R A 2241 竪穴住居跡出土遺物(2)	16
第7図	R A 2241 竪穴住居跡出土遺物(3)	17
第8図	R A 2241 竪穴住居跡出土遺物(4)	18
第9図	R A 2242 竪穴住居跡出土遺物	19
第10図	R D6650・6651・6652・6653土坑	21
第11図	R D6650・6651・6652・6653土坑, 遺構検出面出土遺物(1)	24
第12図	遺構検出面出土遺物(2)	25
第13図	遺構検出面出土遺物(3)	26
第14図	遺構検出面出土遺物(4)	27

第15図	遺構検出面出土遺物(5)	28
第16図	遺構検出面出土遺物(6)	29
第17図	遺構検出面出土遺物(7)	30
第18図	遺構検出面出土遺物(8)	31
第19図	R G 1001溝跡壁面出土遺物	32
第20図	大館町遺跡第82次調査区全体図	33
第21図	R F 2244・2245炉跡, R D 6654・6660・6655・6656・6657土坑, グリットピット	35
第22図	R D 6658・6659・6661・6662・6663・6664土坑	37
第23図	R F 2244・2245炉跡, R D 6654・6655・6656土坑出土遺物	39
第24図	R D 6657・6660・6663土坑出土遺物	40
第25図	R D 6664土坑出土遺物	41
第26図	大新町遺跡第80次調査区全体図, R D 6649土坑	42
第27図	繫V遺跡全体図	45
第28図	繫V遺跡第35次調査区全体図	46
第29図	遺物包含層出土遺物(1)	48
第30図	遺物包含層出土遺物(2)	49
第31図	遺物包含層出土遺物(3)	50
第32図	遺物包含層出土遺物(4)	51
第33図	遺物包含層出土遺物(5)	52
第34図	山王山遺跡全体図	55
第35図	山王山遺跡第12次調査区全体図	57
第36図	R A 501竪穴住居跡	59
第37図	R A 502竪穴住居跡	60
第38図	R A 503竪穴住居跡	61
第39図	R A 501竪穴住居跡出土遺物	62
第40図	R A 501・502・503竪穴住居跡, 遺物包含層出土遺物	63
第41図	新堰端遺跡全体図	65
第42図	新堰端遺跡第11次調査区全体図, S D 001大溝跡	67
第43図	S D 001大溝跡出土遺物	68
第44図	西鹿渡遺跡全体図	71
第45図	西鹿渡遺跡第23次調査区全体図	72
第46図	R E 003竪穴跡, R D 030・031・032土坑	73

写真図版目次

- 第1図版 大館町遺跡第81次調査（調査区検出前全景，検出状況全景）
- 第2図版 大館町遺跡第81次調査（R A 2241 竪穴住居跡，R D 6652 土坑）
- 第3図版 大館町遺跡第81次調査（R D 6650 土坑上面土器検出状況，R D 6651 土坑上面石棒出土状況）
- 第4図版 大館町遺跡第81次調査（R A 2241 竪穴住居跡出土遺物1，R A 2241 竪穴住居跡出土遺物2）
- 第5図版 大館町遺跡第81次調査（R A 2241 竪穴住居跡出土遺物3，R A 2241 竪穴住居跡出土遺物4）
- 第6図版 大館町遺跡第81次調査（R A 2241 竪穴住居跡出土遺物5，R A 2241 竪穴住居跡出土遺物6）
- 第7図版 大館町遺跡第81次調査（R A 2241 竪穴住居跡出土遺物7，R A 2242 竪穴住居跡出土遺物1）
- 第8図版 大館町遺跡第81次調査（R A 2242 竪穴住居跡出土遺物2，R A 2242 竪穴住居跡出土遺物3）
- 第9図版 大館町遺跡第81次調査（R D 6650 土坑出土遺物，R D 6652 土坑出土遺物）
- 第10図版 大館町遺跡第82次調査（調査区全景，R F 2245 炉跡）
- 第11図版 大館町遺跡第82次調査 R F 2244・2245 炉跡出土遺物，大新町遺跡第80次調査区全景
- 第12図版 繫V遺跡第35次調査（調査区全景，遺物包含層断面）
- 第13図版 繫V遺跡第35次調査（遺物包含層出土遺物1，遺物包含層出土遺物2）
- 第14図版 繫V遺跡第35次調査（遺物包含層出土遺物3，遺物包含層出土遺物4）
- 第15図版 繫V遺跡第35次調査（遺物包含層出土遺物5，遺物包含層出土遺物6）
- 第16図版 山王山遺跡第12次調査（調査区北西部全景，R A 501 竪穴住居跡）
- 第17図版 新堰端遺跡第11次調査（調査区全景，S D 001 大溝跡出土遺物）
- 第18図版 西鹿渡遺跡第23次調査（調査区全景，R D 030 土坑）

I. 平成 20・21 年度発掘調査の概要

1. 平成 20 年度事業の概要

市内の遺跡 盛岡市内には、現在 780 箇所の遺跡が周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されている。近年では周知の遺跡内における大規模公共事業（区画整理、道路等）、各種民間開発、個人住宅建築等の土地開発にともなう事前の発掘調査や試掘調査を毎年 80 件前後実施している。平成 20 年度は発掘調査・試掘調査（公共事業・各種民間開発・個人住宅等）をあわせて 33 件実施した。

発掘調査 平成 20 年度の国庫補助事業（盛岡市内遺跡群発掘調査事業）で実施した発掘調査は、本調査が大館町遺跡第 81・82 次調査、大新町遺跡第 80 次調査、繫 V 遺跡第 35 次調査、山王山遺跡第 12 次調査、志波城跡第 101 次調査の 5 件。試掘調査が二又遺跡第 7 次調査の 1 件である。

遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査原因
大館町遺跡（第 81 次）	盛岡市大新町 212	08.06.10 08.11.28	330㎡	史跡現状変更 （範囲確認調査）
大館町遺跡（第 82 次）	盛岡市大新町 10 - 13, 10 - 12 の一部	08.10.15 08.10.31	62㎡	個人住宅建築
大新町遺跡（第 80 次）	盛岡市大新町 17 - 15	08.06.02 08.06.04	32㎡	個人住宅建築
繫 V 遺跡（第 35 次）	盛岡市繫字館市 75 - 1	08.05.13 08.05.28	16㎡	個人住宅擁壁工事
山王山遺跡（第 12 次）	盛岡市山王町 64 - 1	08.07.15 08.09.03	163㎡	個人住宅建築
志波城跡（第 101 次）	盛岡市下太田宮田 14 - 2	08.09.08 08.09.19	126㎡	史跡現状変更 （個人住宅建築）
二又遺跡（第 7 次）	盛岡市下飯岡 1 地割 40 - 1	08.04.15	73㎡	個人住宅建築

第 1 表 平成 20 年度 盛岡市内遺跡群発掘調査事業調査遺跡

2. 平成 21 年度事業の概要

発掘調査 平成 21 年度は、発掘調査・試掘調査をあわせて 30 件実施した。このうち国庫補助事業（盛岡市内遺跡群発掘調査事業）で実施した発掘調査は、本調査が新堰端遺跡第 11 次調査、西鹿渡遺跡第 23 次調査の 2 件。試掘調査が稲荷町遺跡第 26 次調査、二又遺跡第 8 次調査の 2 件である。

遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査原因
新堰端遺跡（第 11 次）	盛岡市下太田新堰端 2 - 9	09.08.19 09.08.31	233㎡	個人住宅建築
西鹿渡遺跡（第 23 次）	盛岡市三本柳第 2 地割 16 - 35	09.06.01 09.06.12	79㎡	個人住宅建築
稲荷町遺跡（第 26 次）	盛岡市大館町 328	09.10.28	80㎡	アパート建築
二又遺跡（第 8 次）	盛岡市下飯岡 1 - 34	09.10.26	118㎡	個人住宅建築

第 2 表 平成 21 年度 盛岡市内遺跡群発掘調査事業調査遺跡

奥羽山脈 奥羽山脈は北上山地に比べると比較的新しい新第三紀からなる非火山地域と、第四紀に形成された新規火山地域に区別される。岩手山はこの新規火山地域に含まれる。奥羽山脈より東流する雫石川は、雫石盆地を形成し盛岡市北の浦付近において急激に流路が狭められ、北上平野に流れ込む。雫石川北岸および南岸ではその地質が大きく異なる。

雫石川北岸には、岩手山起源の大石渡岩屑なだれ堆積物を基盤とした火山灰砂台地（滝沢台地）が広がっている。その範囲は盛岡市北部から滝沢村北部まで広範囲に及んでいる。

雫石川南岸は、雫石川の流路転換によって運ばれた土砂で形成された沖積段丘が広がっている。その規模は東西約8.0km、南北3.5kmで、段丘上からは主に古代から江戸時代にかけての遺跡が多数確認されている。現在は宅地造成や圃場整備が進み、旧地形を留めているところは少ないが、航空写真などを見ると旧河道の流路が残された水田や古い住宅街の区割り等で確認できる。

4. 歴史的環境

旧石器時代 旧石器時代の遺跡は、市街地から北東へ約11kmの玉山区藪川字外山に小石川遺跡が所在する。山間部の小河川に臨む台地上にあり、後期旧石器時代の遺跡で木葉形尖頭器や石核、剥片、台石などが出土している。また、対岸には細石刃や石核の採集された大橋遺跡がある。

縄文時代 滝沢台地上に立地する大新町遺跡・大館町遺跡・安倍館遺跡からは、草創期の「爪形文土器」が出土している。滝沢台地上には後続する縄文時代早期の遺跡が数多く存在し、前述の3遺跡以外にも大館堤・館坂・前九年・宿田遺跡などで早期初頭～末葉の土器が出土している。

縄文時代前期は日本列島全体で温暖化が進み、遺跡数が増加し大規模な集落が出現する時期である。しかし、盛岡周辺に限っては北上山地内に散見するのみで遺跡の数は少ない。これは、約6,000年前に起こった岩手山の山体崩壊による自然災害の影響が関連していると考えられている。

縄文時代中期になると遺跡数は爆発的に増加する。雫石川南岸の沖積平野を除く、広い地域に分布する。繫V・大館町・柿ノ木平・川目C遺跡など、主要河川の流域に大規模な拠点集落が営まれるようになる。

後期から晩期には、集落の規模は小さくなり、遺跡数も減少する。柿ノ木平遺跡や大葛遺跡では後期初頭の集落が、萩内遺跡や湯壺遺跡では後期から晩期の集落が確認されている。また、宇登遺跡・上平遺跡では晩期の遺物包含層、手代森遺跡では晩期の集落と遺物包含層が確認されている。

弥生～古墳 弥生時代の遺跡数は少ないが、浅岸地区の向田遺跡、堰根遺跡で前期（砂沢式期）や終末期（赤穴式期）の土器を伴う竪穴住居跡が確認されている。古墳時代の集落遺跡は現在のところ確認されていないが、永福寺山遺跡や薬師社脇遺跡で4～5世紀の土坑墓群が検出されている。永福寺山遺跡では後北C2-D式土器と4世紀の土師器が共伴し、薬師社脇遺跡では5世紀の土師器壺、甕、鉢、鉄鏃等の鉄器、管玉等の玉類が埋納されていた。

古 代 古墳時代終末から奈良時代にかけて、雫石川南岸等沖積面の遺跡が飛躍的に増加する。7世紀中ごろには上田蝦夷森古墳群、8世紀代には太田蝦夷森古墳群、高館古墳群などの終末期古墳が築造され、野古A遺跡、台太郎遺跡、百目木遺跡などで安定した集落が形成される。

平安時代になると、803年に陸奥国最北端の城柵志波城が造営される。志波城は陸奥北部地域の経営拠点であると同時に、北方地域との結節点でもあったが、雫石川の水害を理由に、813年～814年に徳丹城（矢巾町）へ移転している。その後9世紀中ごろより、陸奥北部の経営は鎮守府胆沢城に集約されていく。志波城東側の林崎遺跡、大宮北遺跡、小幅遺跡では、集落の中に官衙的な建物群が存在している。同様の建物跡は堰根遺跡でも確認されており、在地の有力者が律令体制を背景に台頭する様子うかがえる。この時期の集落は沖積面だけではなく、上猪去・猪去館・新道Ⅱ遺跡など、山麓台地や丘陵の斜面部にも拡がりをみせる。

10世紀後半から12世紀までの遺跡はひじょうに少ないが、大新町遺跡や上堂頭遺跡では10世紀後半頃の掘立柱建物跡や竪穴、高松神社裏遺跡では溝状の遺構から土師器杯・甕・小皿によって構成される一括資料が出土している。

12世紀の村落や屋敷、居館の遺構は堰根遺跡や稲荷町遺跡で確認されている。また、平泉藤原氏の影響下にあったと考えられる宗教遺跡も多数存在する。12世紀以降、街道筋や山頂などに経塚が築かれるようになり、内村遺跡では経塚に埋納したとみられる常滑の大甕が出土しているほか、湯壺経塚からは常滑の三筋文壺、一本松経塚からは渥美の壺が発見されている。大宮遺跡では大溝から12世紀～13世紀のかわらけが出土している。

中世 鎌倉時代から室町時代については、台太郎遺跡で居館と村落跡、墓域等が確認されている。戦国期の盛岡周辺は、南部氏、斯波氏などの衝突が激しかった地域であるが、市内に数多く分布する城館跡の多くは、室町時代から戦国時代のものと考えられている。これらの城館跡は丘陵や山頂など見晴らしのいい場所だけでなく、平野部の微高地などにも多数築かれている。現在の盛岡城の場所には南部氏の家臣であった福士氏が築いた北館（慶善館）、南館（淡路館）からなる不来方城が存在した。

近世 現在の城下の町並みの形成は、その南部氏の盛岡城築城から始まる。

九戸合戦終結後の天正19年（1591）、南部信直は帰還する豊臣軍の軍監浅野長政から不来方城において、この不来方の地に新城を築くよう、積極的に奨められている（『祐清私記』）。信直の居城三戸城は、周囲を山に囲まれて堅固な構えではあるが、広い田畑もなく、決して豊かな土地ではないこと、対して不来方の地は前方に田畑が広がり、背後には大河が流れ、周囲の山河、街道に至るまで利に適った場所であるからことから、是非この地に新城を築くべきであると説かれた。慶長3年（1598）より盛岡城の築城は始まり、寛永10年（1633）に一応の完成をみる。

その後、石垣補修に係る発掘調査により、盛岡城は1～5期の変遷を経て現在に至っていることが判明している。

盛岡城は当初の基本的縄張りに浅野長政が関わり、実際の築城工事には前田利家の家臣内堀伊豆頼式が奉行並として参画していたことから、戦国期の北奥地域の城館とは大きく異なり、総石垣の豊臣系城郭として国内最北の事例となっている。

Ⅱ. 大館町遺跡（第81・82次調査） 大新町遺跡（第80次調査）

1. 遺跡の環境

(1) 遺跡の概要

遺跡の位置 大館町・大新町遺跡は、盛岡市の中心部より北西へ約3.5kmの盛岡市大新町・大館町・北天昌寺地内に位置する。遺跡中央部は現在、岩手県指定史跡として保存されているが、周辺部は近年の開発による宅地化が進んでいる。遺跡の範囲は東西約220m、南北約250mと推定され、標高は132～137mである。

地形・地質 滝沢台地の南東部は北上川に沿って南へ舌状に張り出しており、諸葛川、木賊川、巢子川などで開析され、幾筋もの埋没谷が入りこんでいる。大館町遺跡はその滝沢台地南縁の緩斜面に立地している。周辺には大新町・大館堤・小屋塚遺跡など縄文時代早期～中期を中心とした遺跡が分布し、各遺跡は埋没谷や旧河道などによって画されている。

滝沢台地上部は厚い火山灰で覆われており、下層より外山火山灰、洪民火山灰、分火山灰が堆積する。大館町・大新町遺跡で遺構・遺物が確認されるのは、最上部の堆積物となる分火山灰層中からであり、主に岩手山・秋田駒ヶ岳に噴出起源をもつ火山灰で構成される。

分火山灰層は、下層の十和田起源による八戸火山灰（層厚1～2cm）から表土直下までの堆積土を総称している。大館町・大新町遺跡では第Ⅰ層（表土下に堆積する黒色土）・Ⅱ層（黒色・黒褐色土主体―生出スコリア含）・Ⅲ層（暗褐色土主体）・Ⅳ層（黒褐色土主体―赤褐色スコリア含）・Ⅴ層（暗褐色土主体）・Ⅵ層（褐色土主体―上位より柳沢軽石・小岩井軽石・八戸火山灰）の6層に大別され、遺構・遺物が確認されているのは、Ⅵ層上部（縄文時代草創期）より上位の層からである。

周辺の遺跡 大館町遺跡を始め、滝沢台地には数多くの遺跡が立地している。台地南縁（盛岡市）には西より大館堤遺跡（縄文時代早期～中期・弥生時代・古代）、大館町遺跡（縄文時代早期～中期・弥生時代・古代）、大新町遺跡（縄文時代草創期～後期・古代）、小屋塚遺跡（縄文時代早期～後期・古代）、前九年Ⅰ遺跡（縄文時代早期～中期・古代）、前九年Ⅱ遺跡（縄文時代中期・古代）、宿田遺跡（縄文時代早期・続縄文時代（5世紀）・古代）、館坂遺跡（旧石器時代？・縄文時代早期）、安倍館遺跡（縄文時代草創期～中期・続縄文時代・中世）など旧石器から中世にかけての遺跡が分布し、台地縁辺下に発達する沖積段丘面には稻荷町遺跡（古代末～中世・近世）、里館遺跡（中世）などの比較的新しい時代の遺跡が立地する（大館遺跡群）。

滝沢台地西縁には雫石川の支流である諸葛川が、台地に沿うように南流し、盛岡市中屋敷付近で雫石川と合流する。盛岡市に隣接する滝沢村室小路・穴口地区は諸葛川によって開析された滝沢台地西縁部にあり、大館遺跡群同様に数多くの遺跡が確認されている（室小路遺跡群）。

(2). 過去の調査

過去の調査 古くから大館町遺跡は土器・石器が出土することで知られており、昭和31年には岩手大学草間俊一教授によって初めて学術調査が行われ(草間俊一 1958「先史期」『盛岡市史』第1分冊1)、多量の縄文時代の遺物が層位ごとに出土することが確認された。また、昭和39年には土器の変遷を明らかにするための調査が実施されている。出土した土器は大館1類(前期初頭)・2類(円筒下層D式類似土器)・3類(円筒上層A式類似土器)・4類(円筒上層B式類似土器)・5類(大木7a式)・6類(円筒上層C式類似土器)・7類(大木8a-2式)に細分され、特に7類とされた土器は大館町遺跡を特色付ける土器としている(草間俊一 1958『盛岡市史』第1分冊1)。

その後も岩手大学板橋源教授および同大学考古学研究会により、宅地造成に伴う発掘調査が昭和48・50・51年に行われ、その結果30棟以上の縄文時代中期の竪穴住居跡が重複して検出された(昭和51(1976)年調査については、岩手大学考古学研究会1978『大館町遺跡』)。これらの調査により、大館町遺跡は長期にわたる大規模な集落遺跡であることが確認された。

盛岡市教育委員会による発掘調査は、昭和55年の遺跡範囲確認および宅地造成に伴う第1次調査以降、現在まで82次にわたり実施されている。これまでの調査で縄文時代草創期～前期の遺物、中期前葉から後葉、大木8a・8b式期を主体とした竪穴住居群をはじめ、遺跡北西から南西にかけては前期末葉から中期中葉の密度の濃い遺物包含層が確認されている。また、昭和55年度の第1次調査で検出されたRA102竪穴住居跡より大木8b式土器が層位を異にして出土しており、上層(B層)より隆沈線による渦巻文等を特色とする土器群(大木8b-2式)が、下層(D層)より口縁部に隆沈線による文様帯を持ち体部に沈線による文様を施す土器群(大木8b-1式)が出土するなど土器編年を考える上で重要な成果が得られている。

これまでに検出された遺構数は竪穴住居跡402棟、竪穴20棟、掘立柱建物跡15棟、土坑549基、配石5基である。集落の主体と考えられる地区の調査が行われていないため、集落全体の遺構数は明確でないが、最終的に竪穴住居跡は500棟を超える大規模な集落と考えられている。

これらの成果から大館町遺跡は北上川上流域における拠点的な集落であり、その重要性から平成12年度に岩手県指定史跡に指定されている。

2. 調査成果

(1) 平成20年度の調査

平成20年度は、範囲確認調査として第81次調査を、個人住宅建築に伴い第82次調査を実施した。

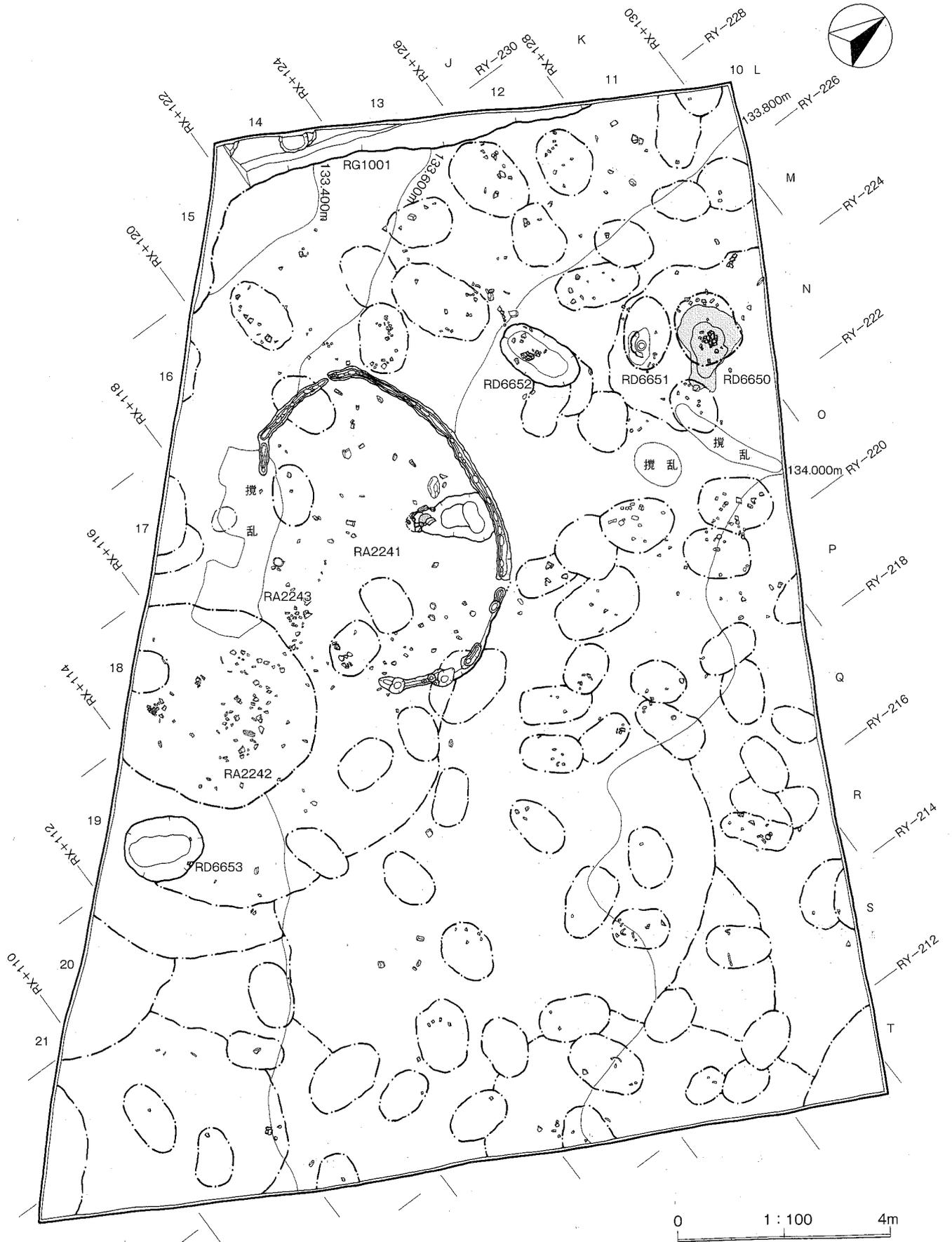
第81次 第81次調査区は遺跡西部の遺構分布状況を把握するため、検出作業を中心に実施した。縄文時代中期の竪穴住居跡3棟と土坑80基、時期不明の溝跡1条を検出し、遺構の性格を確認するため竪穴住居跡1棟(RA2241)、土坑2基(RD6652・6653)を精査した。石棒が埋設された土坑(RD6651)については埋設部分の深さを確認し埋め戻した。調査期間は平成20年6月10日～11月28日、調査面積は330㎡である。

第82次 第82次調査区は遺跡北西部に位置する。確認した遺構は、縄文時代の陥し穴状遺構6基、貯蔵穴5基、土器埋設炉2基である。土器埋設炉は貯蔵穴を人為的に途中まで埋めてから、その内部に構築されていた。調査期間は平成20年10月15日～10月31日、調査面積は62㎡である。



第2図 大館遺跡群一全体図 (1 : 1000)

0 1 : 1000 50m 7・8



第3図 大館町遺跡第81次調査区全体図

3. 第81次調査内容

(1) 縄文時代の遺構と遺物

遺 構 縄文時代の遺構は竪穴住居跡3棟（R A 2241～2243）、土坑80基（精査及び部分確認はR D 6650～6653）が検出された。R A 2241 竪穴住居跡は耕作等の攪乱により壁面の大部分が失われ、併せて住居跡下部の遺構分布状況を確認する必要性から精査を実施することとした。R A 2242 竪穴住居跡については検出状況を本書に掲載したが、R A 2243 竪穴住居跡については平面形と重複関係を把握することができず、全体図に位置を示すのみとした。

土坑はR A 2241 竪穴住居跡（大木9式中段階）に切られ、R A 2242～2243 竪穴住居跡を切るように検出されたことから大木9式古段階以前の土坑群であることが考えられる。また、R D 6650～6652からは大木8b式中段階～新段階の土器が出土していることや、付近から大木9式古段階の土器が散見されたことから、土坑群は中期後葉の大木8b式段階から9式古段階にかけての構築と考えることができよう。

R A 2241 竪穴住居跡（第3図）

時 期 中期末葉（大木9式併行） **平面形** 楕円形 **重複関係** 床面下より土坑を検出

規 模 長軸上端6.22 m、短軸上端4.42 m以上、深さ0.21 m。

掘 込 面 削平 **検 出 面** I a層（耕作土）直下

埋 土 自然堆積によるもので、層相によりA～E層に大別される。

A層—暗褐色土を主体とし、スコリア粒を含む褐色土の混入量で3層に細分される。

B層—暗褐色土を主体とし、小塊状の褐色土、粒状の焼土を含む。

C層—黒褐色土を主体とし、粒～小塊状の暗褐色土を多量に含む層である。

D層—黒褐色土を主体として粒状の褐色土を少量含む、壁際の崩壊土である。

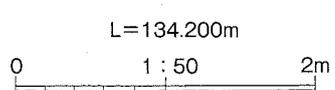
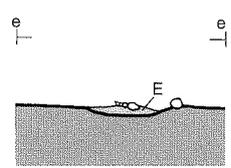
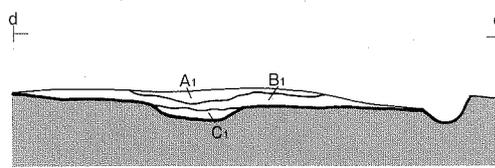
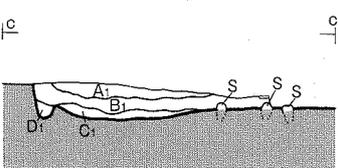
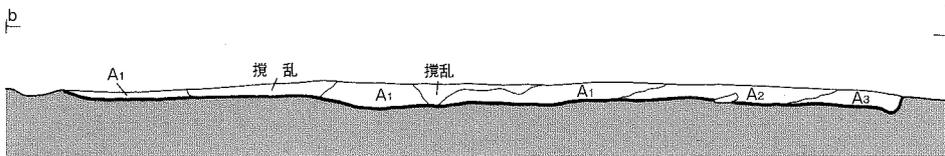
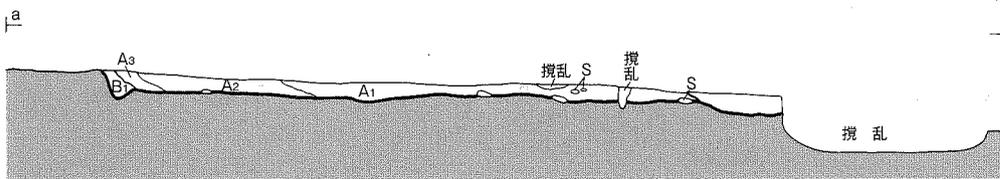
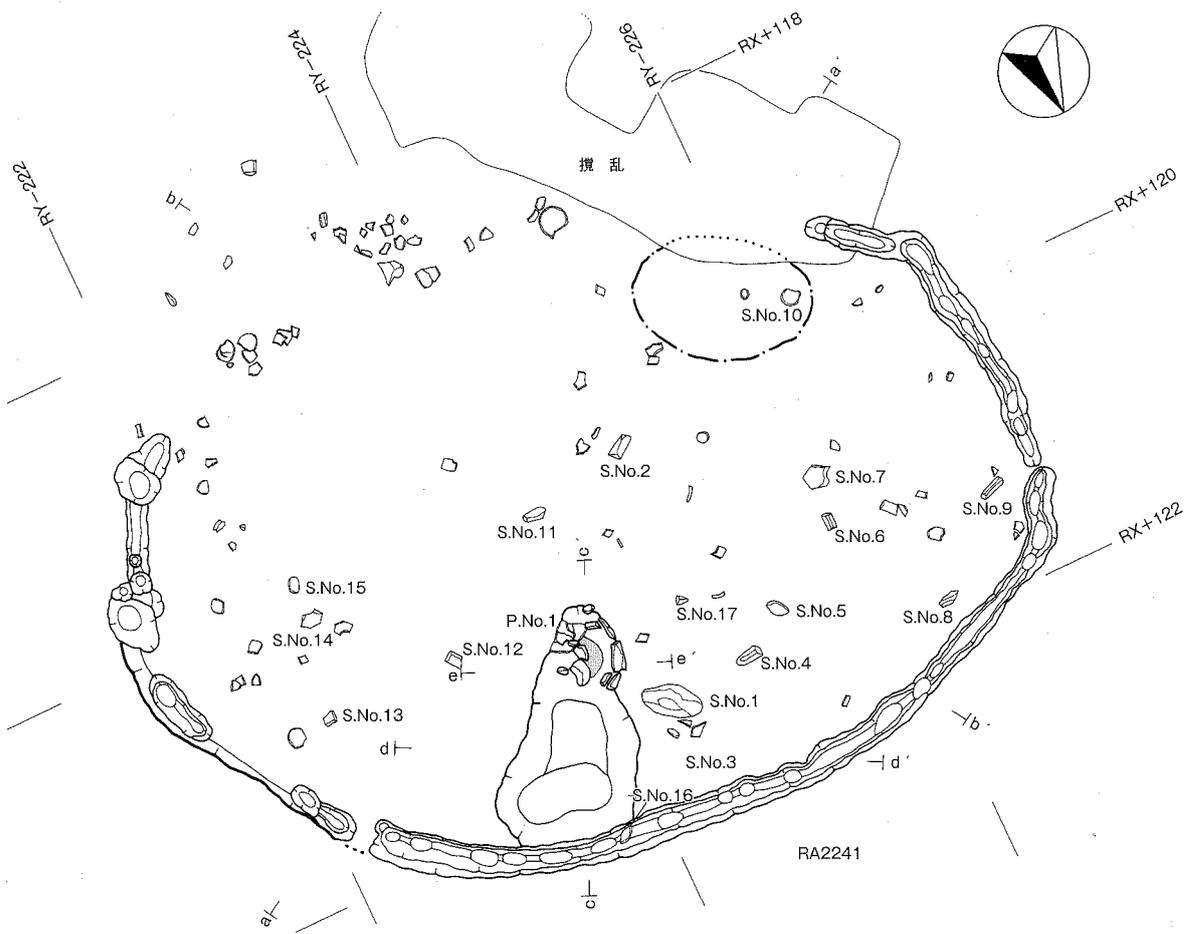
E層—赤褐色を呈する焼土層で、炉の埋土である。

炉の状態 住居の短軸線上、北壁寄りに複式炉を検出している。規模は長軸1.55 m、短軸0.92 mで、燃燒部西側の炉石が残存する。

壁の状態 外傾して立ち上がる。残存する箇所では深さは0.18 mをはかる。 **床面の状態** ほぼ平坦

周 溝 南辺部以外で周溝が確認されている。周溝最大幅0.25 m、床面からの深さは0.10 mをはかる。

土 器（第6図1～20） 1は口縁部が波状を呈する深鉢で、口縁下から体部下半にかけて沈線による逆U字文が施される。2は隆沈線による渦巻文が施されるキャリパー形深鉢の口縁部である。3・4は口縁部がラッパ状に外反する深鉢で、3には隆沈線による渦巻文、4には小渦巻文が縦位に連結する文様が描かれる。5は波頂部に渦巻文が施されるキャリパー形深鉢の口縁部である。6は口縁部に無文帯を持つ深鉢口縁部である。7は口縁部がラッパ状に外反する深鉢で、体部には隆沈線による渦巻文が施される。8は隆沈線による渦巻文と円文が施される深鉢体部片である。9は突起部に小渦巻文が施される深鉢口縁部片である。10は口唇下に隆沈線による渦巻文と楕円文が施されるキャリパー形深鉢の口縁部片である。11・12は口縁部がラッパ状に外反する小



第4図 RA 2241 豎穴住居跡

形深鉢で、11は隆沈線による渦巻文・懸垂文を施す深鉢体部～底部にかけて残存する個体である。12は簡略された渦巻文と懸垂文が施される。13は口縁部がラッパ状に外反する深鉢口縁部片である。口唇下の無文帯下には沈線による有棘渦巻文が施される。14～17は隆沈線による渦巻文が施される深鉢体部片である。18は把手状の突起を持つ深鉢口縁部片である。19は渦巻状の装飾突起を持つ深鉢口縁部片である。20はキャリパー形深鉢の頸部で下位に横位平行沈線が3条施される。

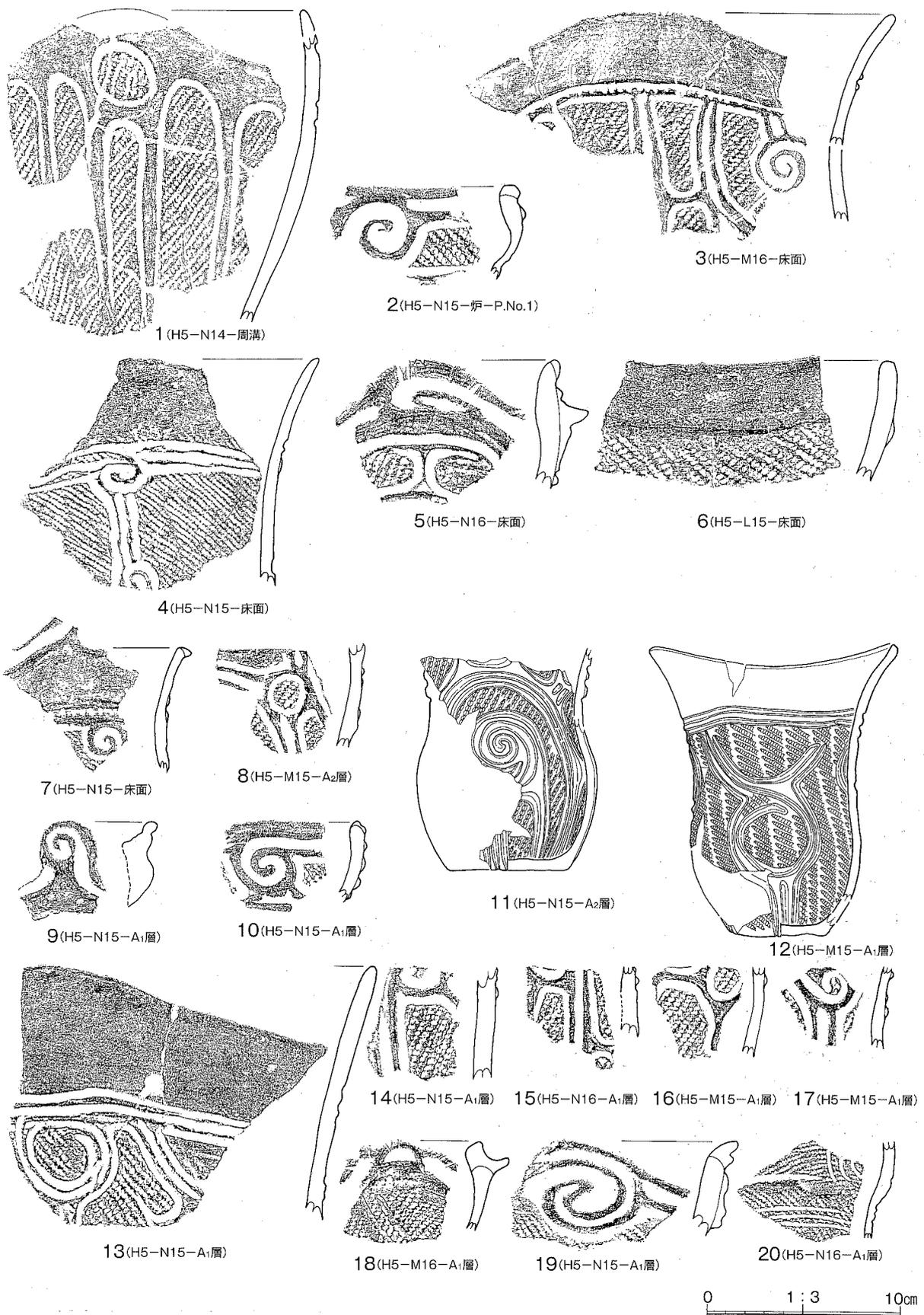
石器 (第6図1～第8図22) 1・2は有茎石鏃で、1は黒曜石、2は頁岩製である。3は頁岩製の石錐で両側縁は摩滅する。4は小形の石篋または両面加工の削器で、中央付近で破損する。5は剥片端部に微細な加工を施して機能部分を表出させた石錐で、先端部には使用による刃こぼれがみられる。6は背面両側縁・腹面左側縁に連続剥離が施される削器である。7は頁岩製の削器で、背面右側縁、腹面右側縁に刃部調整が施される。8は頁岩製の削器で、背面右側縁、腹面右側縁に刃部調整が施される。9・10は剥片縁辺に部分的な剥離を施す削器と考えられる製品で、石材は9・10ともに頁岩である。11は縁辺に微細な剥離痕がみられる剥片で、石材は頁岩である。12～15は剥片下端に刃部調整が施される搔器で、14の刃部は摩滅する。石材は全て頁岩である。16は自然面を残す石核である。17は溶岩質安山岩製の石皿である。18・19は砂質凝灰岩製の敲打磨石で、側縁に磨面を持つ。20は砂質凝灰岩製の敲石である。21は砂岩製の敲打痕が残る石斧である。22は凝灰岩製の石棒で、両端は破損する。

RA 2242 竪穴住居跡 (第3図)

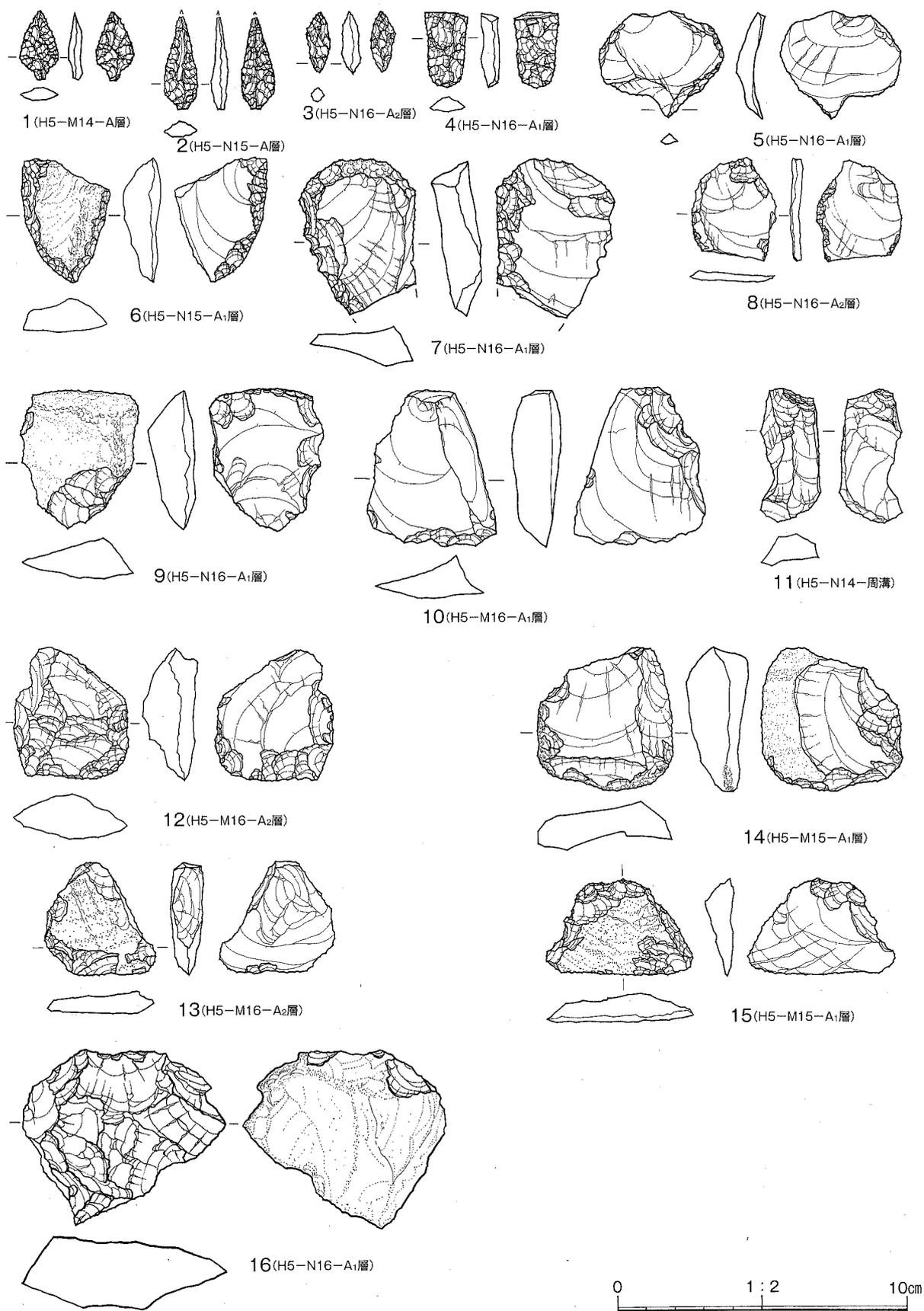
時期 不明 **平面形** 不明 (部分的な検出のみ) **重複関係** 土坑に切られる (検出のみ)。
検出面 Ia層 (耕作土) 直下で検出された。全体のプランは確認されなかったが、西壁の一部が確認された。プラン周辺は全て遺構埋土で、検出面出土の遺物についても住居跡の時期を特定できるものではない。

土器 (第9図1～19) 1は波頂部に孔が施される口縁部がラッパ状に外反する深鉢で、体部には隆沈線による渦巻文が施される。2は沈線による渦巻文が施される深鉢体部片である。3は突起部に小渦巻文が施される深鉢口縁部片で、口縁下には隆沈線による渦巻文が施される。4は隆沈線による渦巻文が施される深鉢体部片である。5～9は隆沈線による渦巻文が施される深鉢体部片で、10～12は隆沈線による懸垂文が施される体部下半から底部にかけての部位である。13は口縁部がラッパ状に外反する深鉢で、沈線による3条の横位平行沈線と懸垂文が施される。14は沈線による横位平行沈線と懸垂文が施される深鉢体部片で、懸垂文は波状となる。15は深鉢体部～底部にかけての部位で、直線状と波状の懸垂文が交互に施される。16は渦巻文を起点とした逆U字状文を施す深鉢で、17・18は逆U字状文と楕円文を施す深鉢口縁部片である。19は浅鉢またはキャリパー形深鉢の口縁部で、隆線による渦巻文・楕円文が施され、楕円文内部は短沈線が充填されている。

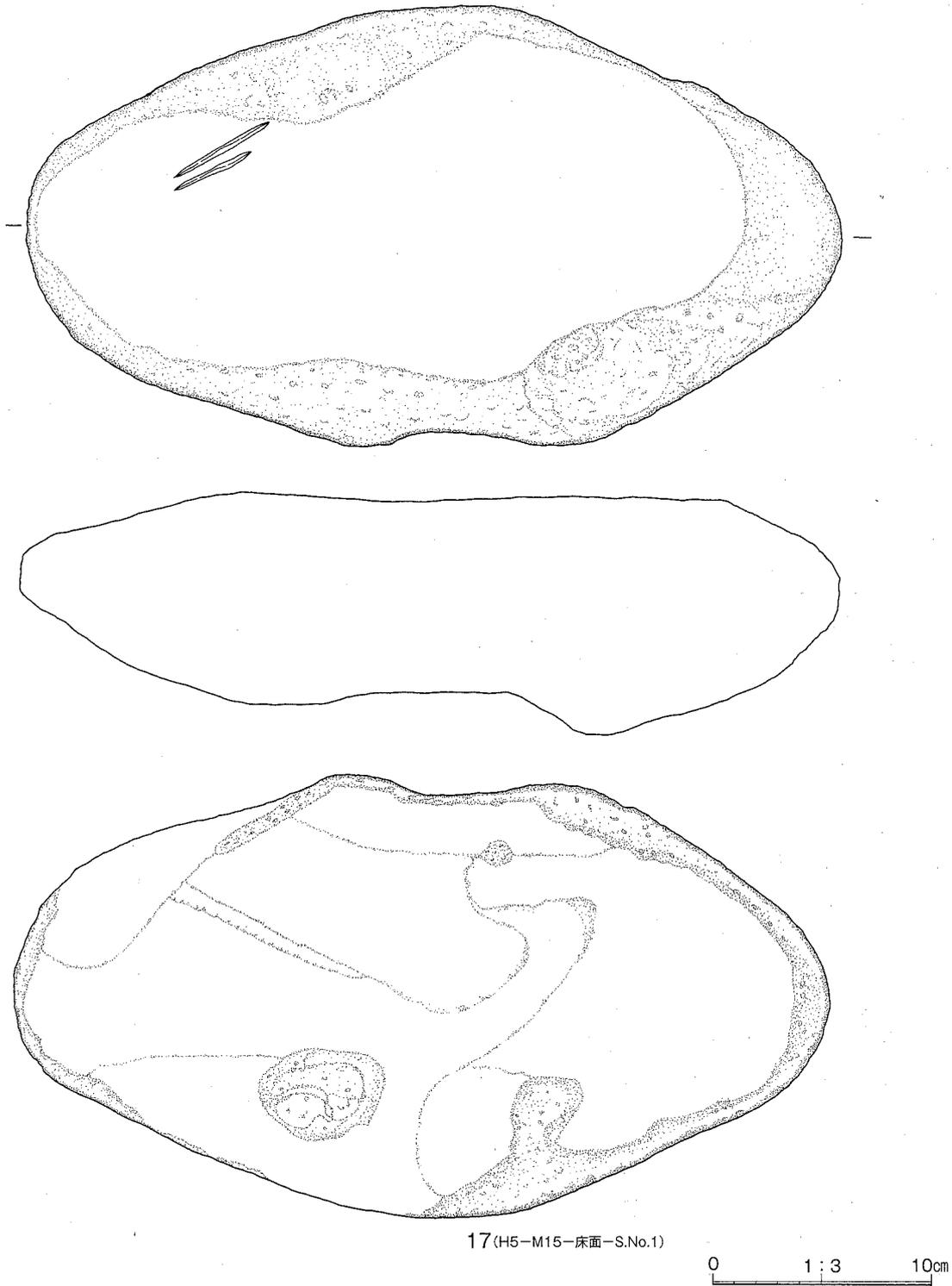
土製品・石器 (第10図20～23) 20はてづくね状の土製品で、器面には整形段階の指頭圧痕が残る。21は鐸形土製品で、器面には細い沈線による幾何学状の文様が描かれる。22は孔のある錘状の土製品で、表面には細かい刺突が施される。23はくびれを持つ石鏃様の石製品で、石材は頁岩である。



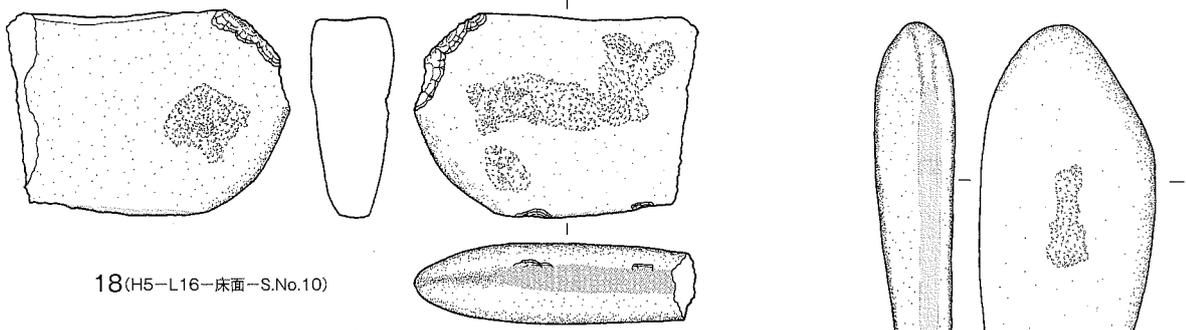
第5圖 R A 2241 豎穴住居跡出土遺物 (1)



第6図 RA 2241 豎穴住居跡出土遺物 (2)

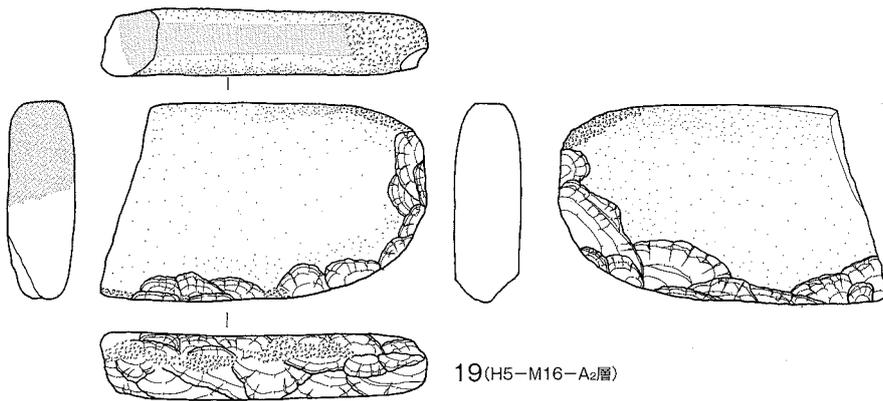


第7図 RA 2241 豎穴住居跡出土遺物 (3)

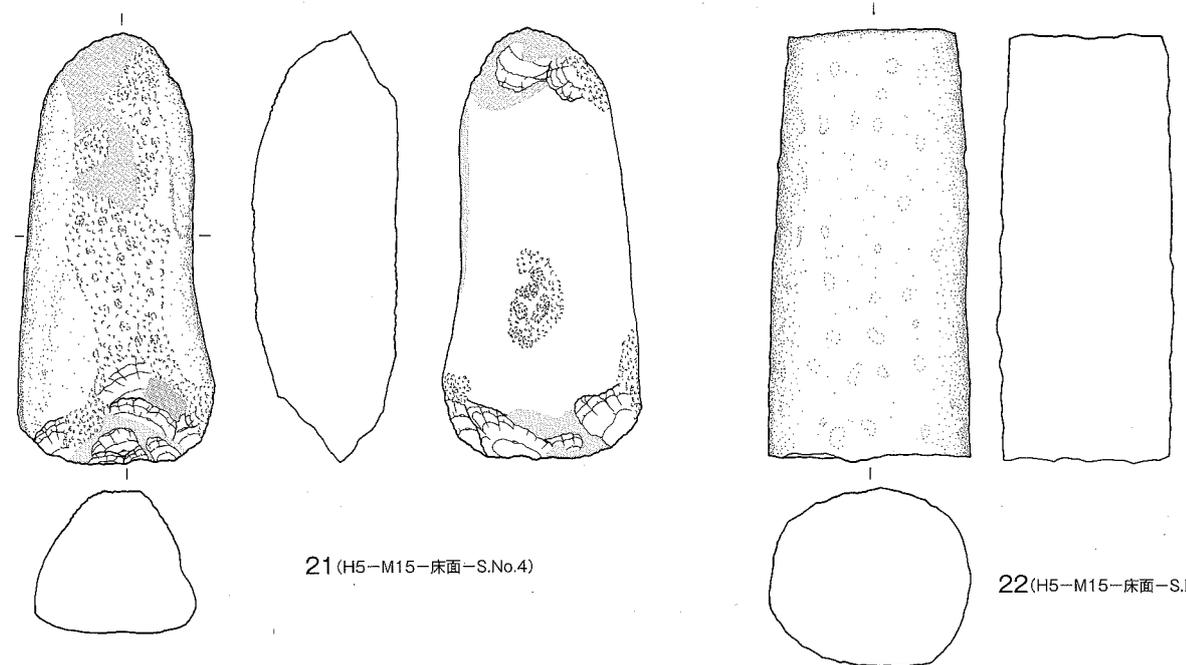


18(H5-L16-床面-S.No.10)

20(H5-M15-床面-S.No.5)



19(H5-M16-A2層)

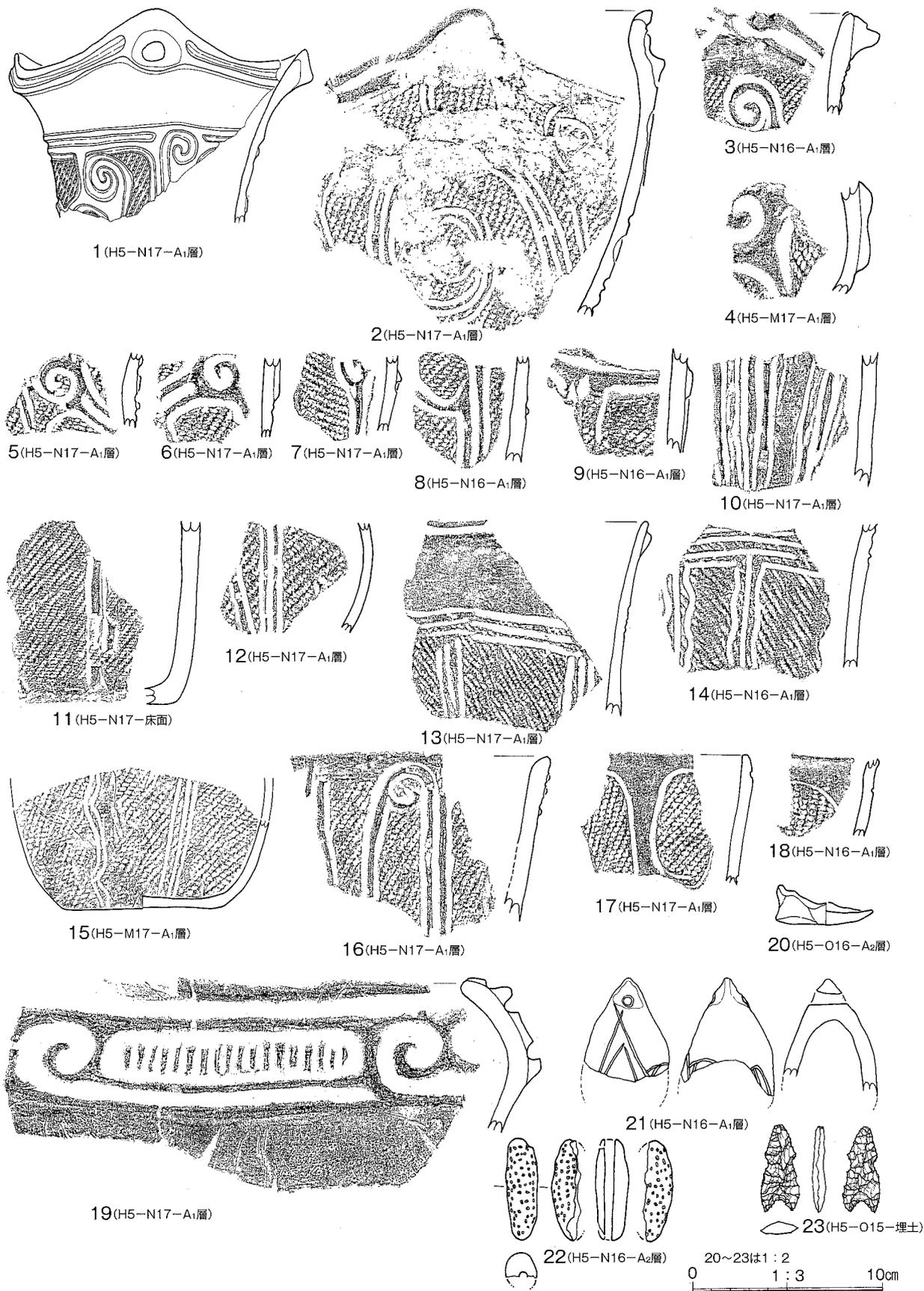


21(H5-M15-床面-S.No.4)

22(H5-M15-床面-S.No.2)

0 1:3 10cm

第8図 RA 2241 竪穴住居跡出土遺物 (4)



第9図 RA 2242 豎穴住居跡出土遺物

R D 6650 土坑 (第 10 図)

時 期 中期後葉 (大木 8 b - 3 式併行) 平面形 不整楕円形
重複関係 中期竪穴住居跡を切る 掘込面 不明 検出面 I a 層直下
規 模 長軸上端 1.32 m・短軸上端 1.10 m 埋 土 土坑埋土は黒褐色土と暗褐色土の混合
土で、土坑検出面付近に多量の焼土が拡がる。焼土より小形深鉢が出土している (第 11 図 6)。
遺 物 (第 11 図 6) 6 は 3 単位の孔のある大突起と小突起で口縁部が装飾される小形深鉢である。体
部には隆沈線による大渦巻文が施され、大渦巻文を中心に小渦巻文・懸垂文が連結して施文される。

R D 6651 土坑 (第 10 図)

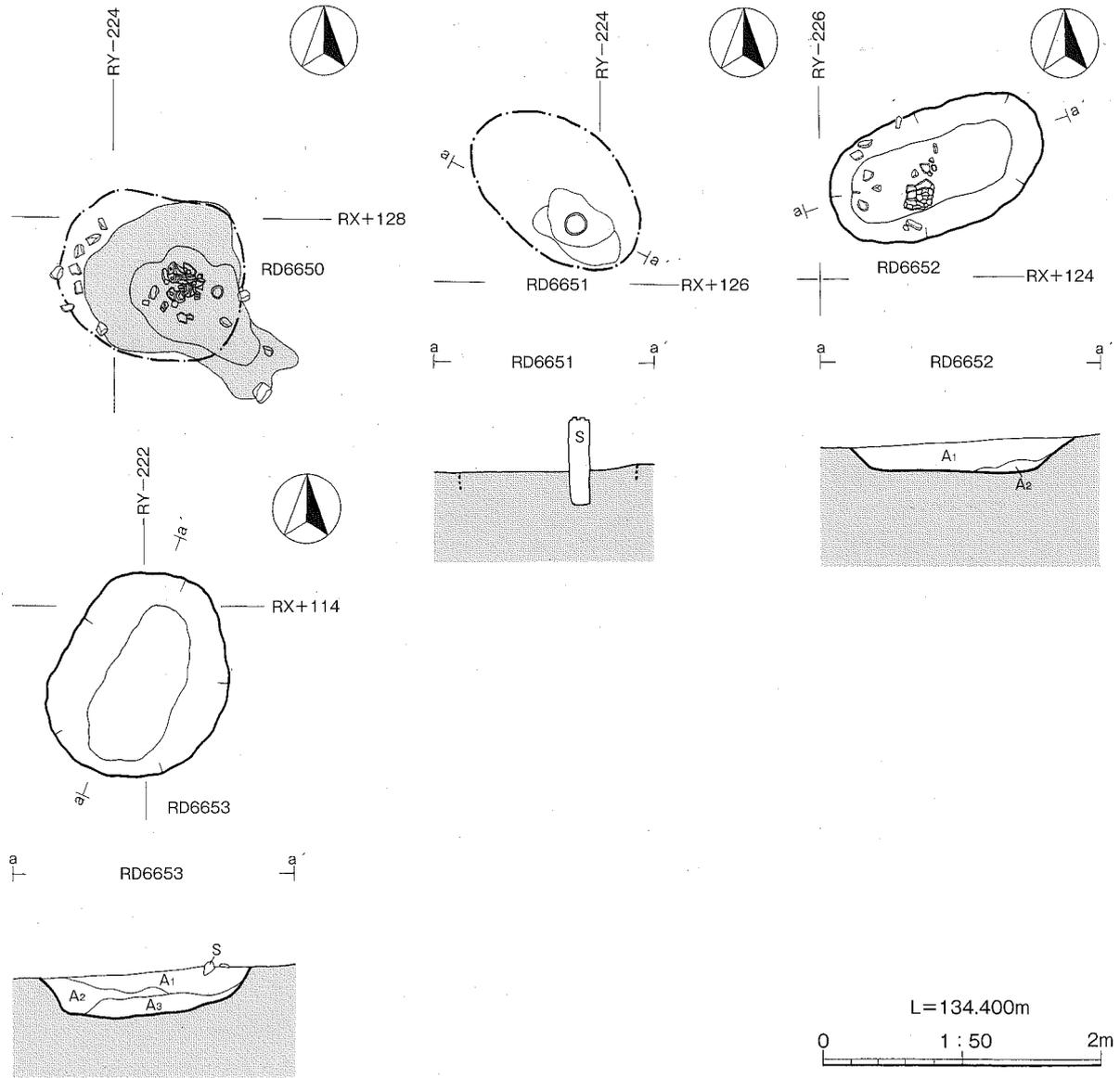
時 期 中期後葉 (大木 8 b - 3 式併行) 平面形 楕円形
重複関係 中期竪穴住居跡を切る 掘込面 不明 検出面 I a 層直下
規 模 長軸上端 1.39 m・短軸上端 0.89 m 埋 土 土坑埋土は黒褐色土と暗褐色土の混合
土で、土坑長軸線上 (南東部) に石棒が直立する。石棒の掘り方は確認されなかった。
遺 物 (第 11 図 1・2) 1・2 は同一個体の深鉢体部で、隆沈線による渦巻文が施される。

R D 6652 土坑 (第 10 図)

時 期 中期後葉 (大木 8 b - 3 式併行?) 平面形 楕円形 重複関係 縄文時代の土坑を切る。
掘込面 削平 検出面 I a 層直下 規 模 長軸上端 1.54 m・下端 1.21 m, 短軸上端 0.84
m・下端 0.41m
埋 土 A 層は黒褐色土を主体に、暗褐色土の混入の割合で細別される。埋土は全体的に硬くしまり、
A 1 層は黒褐色土を主体に小塊状の暗褐色土を少量含む。A 2 層は塊状の暗褐色土と黒褐色土の
混合土である。
壁の状態 緩やかに外傾して立ち上がる。深さは 0.23 m をはかる。 遺物出土状況 底面より小形深
鉢が横倒しの状態で出土した (第 11 図 4)。
遺 物 (第 11 図 3・4) 3 は隆沈線による渦巻文が施される深鉢体部片である。4 は口縁部に 4 単位
の突起を持つ小形深鉢である。突起部には隆線による小渦巻文が施され、体部には 2 条 1 組の隆
線による平行線、懸垂文が施される。

R D 6653 土坑 (第 10 図)

時 期 中期中～後葉 平面形 不整楕円形 重複関係 縄文時代中期の竪穴住居跡を切る。
掘込面 削平 検出面 I a 層直下
規 模 長軸上端 1.51 m・下端 1.18 m, 短軸上端 1.20 m・下端 0.51 m
埋 土 A 層は黒褐色土を主体とする層で、A 1 層は粒～塊状の褐色土を少量含む。A 2 層は黒褐色土
と暗褐色土の混合土で、粒～塊状の褐色土を少量含む。A 3 層は硬くしまる黒褐色土である。
壁の状態 外傾して立ち上がる。深さは 0.30 m をはかる。
遺 物 (第 11 図 5) 5 はキャリパー形深鉢口縁部で、沈線による波状文が施される。



第 10 图 R D 6650·6651·6652·6653 土坑

(2) 縄文時代の遺構検出面及び遺構外出土の遺物について

遺構検出面 第81次発掘調査区の表土（I a層）下全面より、遺構及び遺構埋土と思われる土色の違いが確認された。縄文時代の遺構は竪穴住居跡3棟（R A 2241～2243）、土坑80基（精査及び部分確認はR D 6650～6653）が検出された。R A 2241 竪穴住居跡は耕作等の攪乱により壁面の大部分が失われ、併せて住居跡下部の遺構分布状況を確認する必要性から精査を実施した。R A 2242 竪穴住居跡については検出状況を本書に掲載したが、R A 2243 竪穴住居跡については平面形と重複関係を把握することができず、全体図に遺構番号と位置を示すのみとした。

土坑はR A 2241 竪穴住居跡（大木9式中段階）に切られ、R A 2242・2243 竪穴住居跡を切るように検出されたことから大木9式古段階以前の土坑群であることが考えられる。また、R D 6650～6652 土坑からは大木8b-2～3式の土器が出土していることや、付近から大木9式古段階の土器が散見されたことから、土坑群は中期後葉の大木8b式でも新しい段階の構築と考えることができよう。

土器（第11図7～第16図108） 7・8・10は口縁部がラップ状に外反する深鉢で、7・8の体部には隆沈線による渦巻文が施され、10は沈線で渦巻文を施す。9は体部上半が膨らみ、頸部が窄まる深鉢である。器面には沈線によるパネル状の区画文が施される。11・12は深鉢体部下半から底部にかけての部位で、11は沈線、12は隆沈線による渦巻文が施される。13は原体圧痕による蕨状の文様が施される深鉢体部片である。色調は赤褐色を呈し、胎土には白色の砂粒を含むなど他の土器とは異なる特徴を持つ。14は小波状口縁を持つ深鉢で、口縁下には刺突文が横位に施される。15・16は区画内に縦位の平行沈線を充填施文する深鉢口縁部片である。16には鋸歯状沈線が施される。17は隆帯を持ち、器壁が直線状になる深鉢口縁部である。口縁下には横位平行沈線と鋸歯状沈線が交互に施される。18は口縁下に波状の隆線文が横位に施される。19・20は口縁下に短沈線と横位の絡条体圧痕を施す深鉢口縁部片である。21は原体圧痕による平行線状文と鋸歯文が施される。22は口縁部が直線的に開くキャリパー形深鉢の口縁部で、沈線による襷状の文様が施される。23・24はキャリパー形深鉢の口縁部で、隆線による曲線文が施される。25は孔のある弁状の装飾突起部である。26～31はキャリパー形深鉢口縁部片で、装飾突起を持つものである。32は口縁部が内湾する深鉢口縁部片で、口縁下には沈線による横位平行線状文と鋸歯文が施される。33～37はキャリパー形深鉢の口縁部から頸部にかけての部位で、33は沈線による波状文と渦巻文、34～37には隆沈線による波状文・円文などの文様が施される。38は隆線によるクランク状の文様を施す深鉢体部片である。39は突起を持つ深鉢口縁部で、口縁には原体圧痕を施す隆帯を巡らし、口縁下には沈線による襷状の文様が施される。40は小突起を持つ深鉢口縁部で、小突起の下位には隆線による渦巻文が施される。41・42は沈線による横位平行線と波状文が施される深鉢である。43は口縁部がラップ状に外反する深鉢で、体部には沈線による懸垂文が施される。44は沈線による有棘のある渦巻文が、45は懸垂文が施される深鉢体部片である。46～48は横位の平行線から直角に垂下する隆沈線が施される深鉢である。49は隆沈線による大渦巻文・有棘文・懸垂文が施される。50～53は隆沈線が施される深鉢体部片である。54は隆線による波状文・横位平行線状文を施すキャリパー形深鉢、55は口縁部が内湾する深鉢口縁部片で、隆線による横位平行線状文・小渦巻文が施される。56～64はキャリパー形深鉢の口縁部で、隆線・隆沈線による渦巻文・円文（56）が施される。65～67は口縁部が外反する深鉢口縁部で、65の突起部には渦巻文、66は円形の孔が施される。68は口縁部が内湾する深鉢口縁部で、口縁下に渦巻文が施される。69・70・75は浅鉢で、69・70は口縁部、75は頸部である。隆線・隆沈線による渦

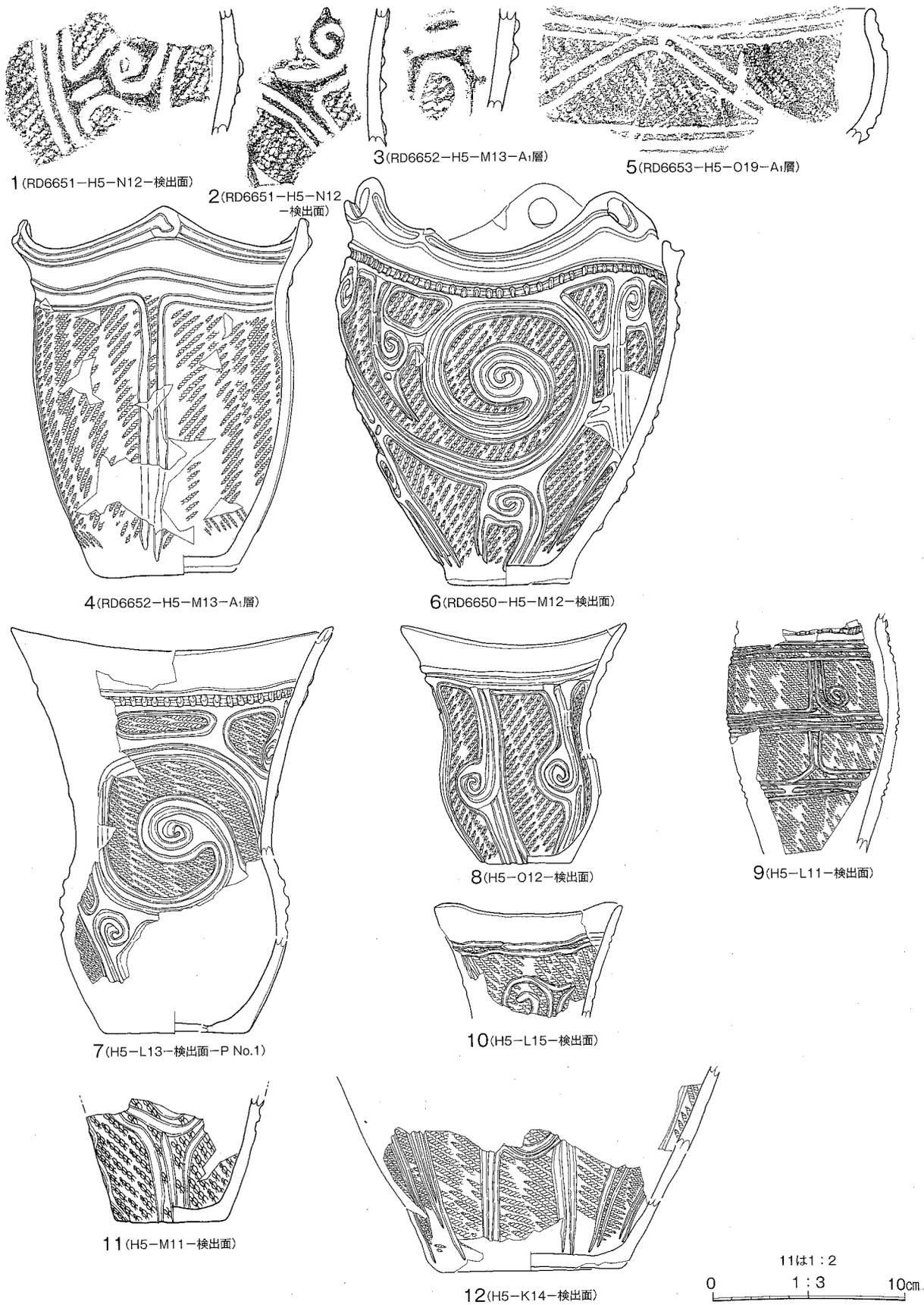
卷文が施される。71～74は隆沈線による渦巻文が施される深鉢体部片である。76～84は口縁部がラッパ状に外反する深鉢で、76～81は口縁部、82～84は体部片である。76・77・79・82～84は隆沈線による渦巻文・懸垂文が、78・80・81は沈線による渦巻文・懸垂文が施される。85は口縁部が内湾する深鉢口縁部で、隆沈線による大渦巻文・小渦巻文が施される。86～94は渦巻文が「の」字状に簡略化される時期の深鉢で、大渦巻文が消失するなど大木9式の範疇にある土器である。95は沈線による「の」字状文が施される深鉢口縁部である。96・97は鰓状突起を持つ深鉢である。98・99は逆U字状文を施す深鉢口縁部で、文様内に縄文が充填施文される。100は玉抱文を施す鉢の口縁部である。

101～108はRA 2241～2243 竪穴住居跡などが重複する地区の検出面より出土した土器である。101は口縁部に隆沈線による渦巻文・楕円区画文が施され、頸部より下位には沈線による曲線・渦巻文が施される。102は口縁部に渦巻文を施す深鉢口縁部で、下位には隆沈線による逆U字状文が施される。103～105は隆沈線による懸垂文が施される深鉢体部下半から底部にかけての部位である。106・107は口縁部が内湾する深鉢で、器面には単節縄文が縦位に施される。108はボタン状貼付文と沈線による幾何学文が施される深鉢である。

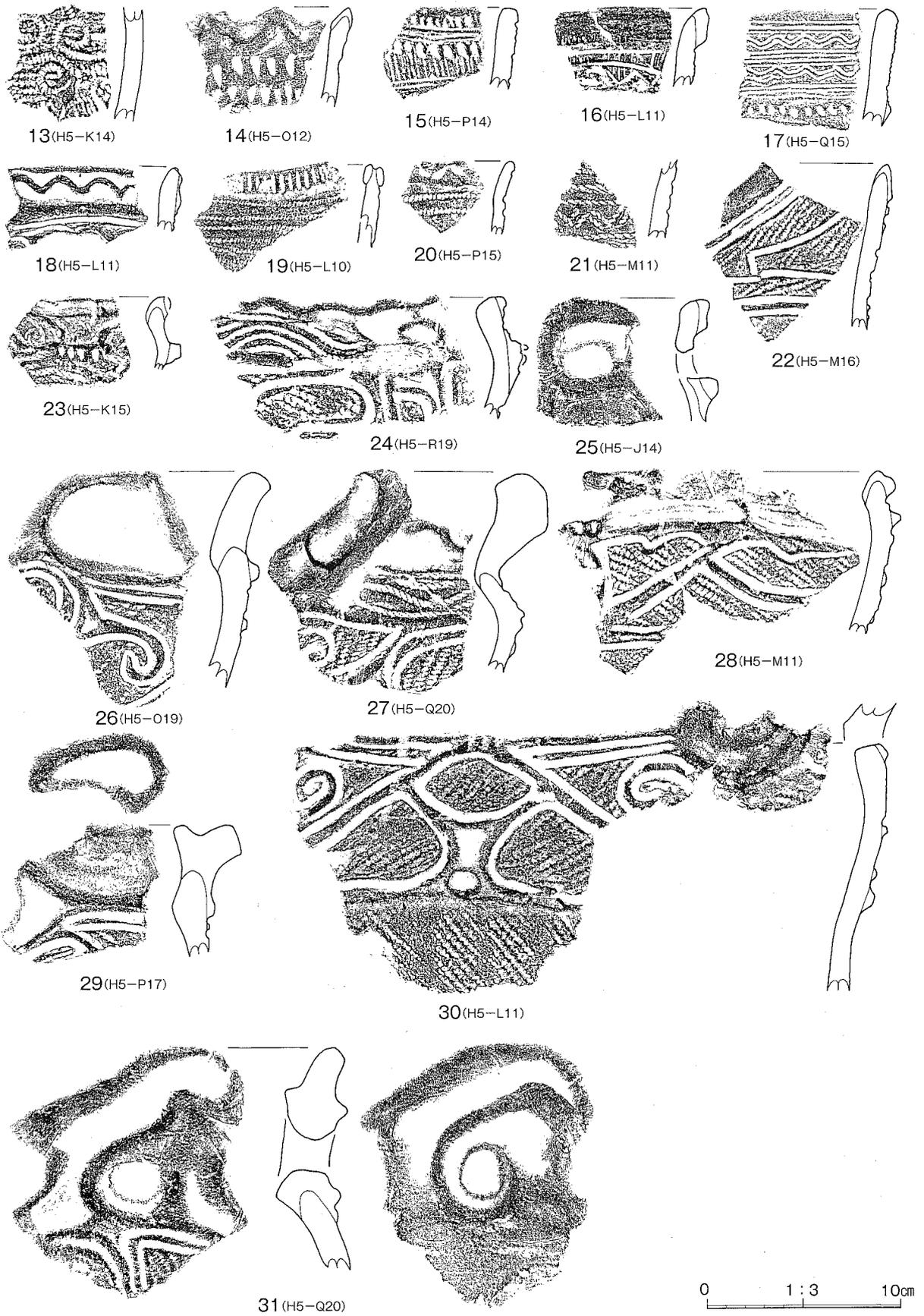
石器 (第17図1～20) 1～7は凹基無茎の石鏃である。1～5は頁岩製、6は鉄石英製、7は珪岩製である。8～10は有茎の石鏃である。8は珪岩製、9・10は頁岩製である。11は頁岩製の石錐で、錐部には入念な調整剥離が施される。12は鉄石英製の石匙である。背面・腹面に剥片面を残す。13は粘板岩製の石匙または石製品である。剥離面を残し、部分的に入念な剥離を施すことにより形状を作出させる。14は頁岩製の縦形石匙で、つまみ部および背面左側縁に入念な剥離が施される。15は背面全周縁に調整剥離を施す頁岩製の削器で、先端部は彫刀面様の剥離がみられる。16は両面全周縁に入念な剥離を施す頁岩製の削器である。17は背面両側縁に微細剥離を施す削器である。18は頁岩製の削器で、剥片に自然面を残す。19は頁岩製の敲石で、側縁に敲打痕を顕著に残す。20は側面に磨面を残す敲打磨石で、全面に敲打痕が残される。断面形状は三角形を呈し、石材は砂質凝灰岩である。

土製品・石製品 (第18図21～35) 21～23はミニチュア土器で、21は高台を持ち、口唇部に円形刺突を施す。22は無文の鉢形を呈し、23は単節縄文を縦位に施すものである。24は、4箇所のある土製円盤で、25は裏面に擦痕を残すものである。26は貫通する孔を持つ土玉である。27は三脚の土製品で、28は3箇所に孔がある三角形の土製品である。29は側縁に溝を巡らす環状土製品である。30・31は土器片を再加工した円盤である。32・33は板状土偶で、32は胴部、33は頭部肩部の一部が残る。34は軽石製の石冠様の石製品で、側面に孔を穿つ。35は流紋岩製の石製品で、光沢を持つ平坦な磨面、溝状の擦痕が残されることから砥石の可能性もある。

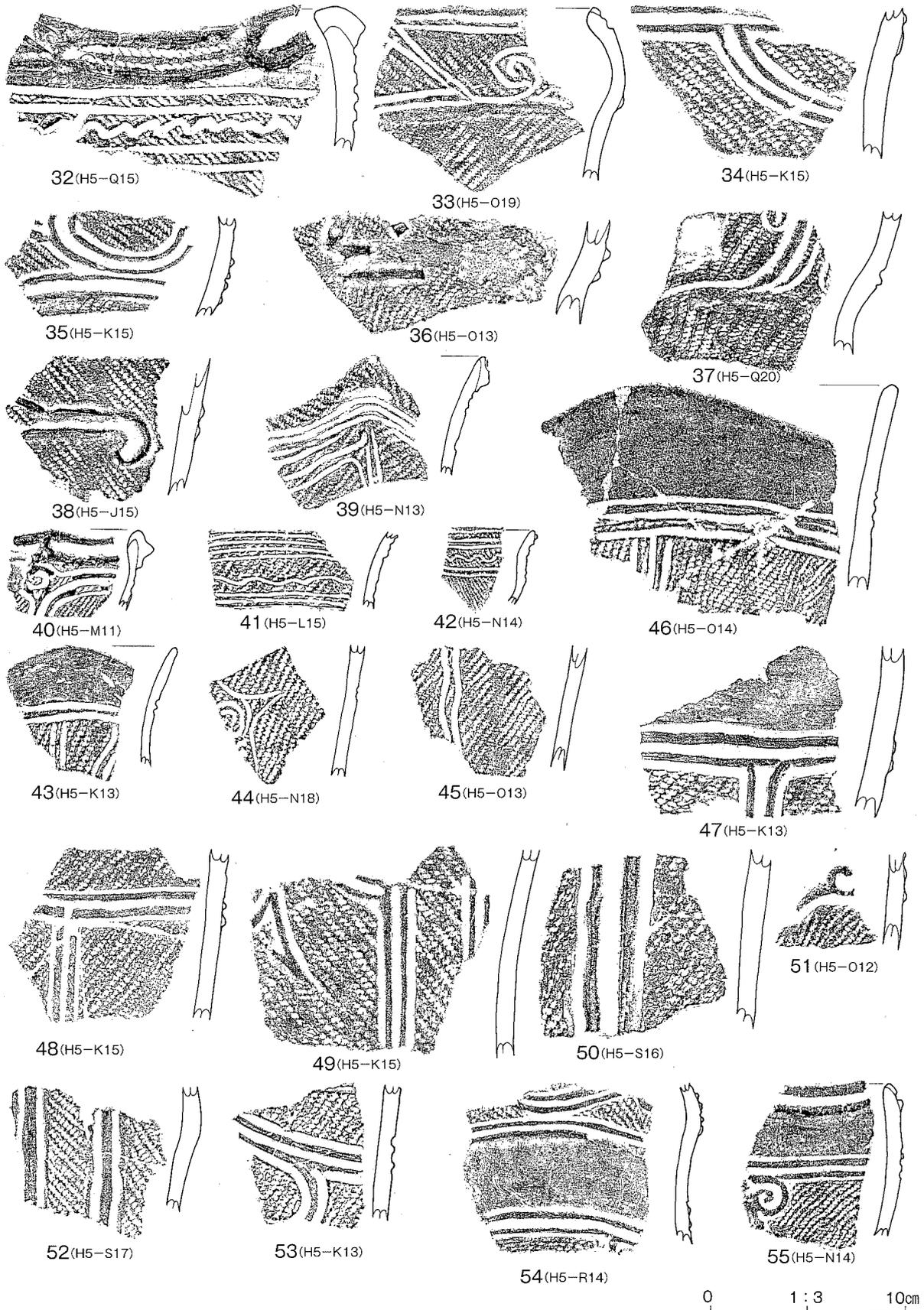
RG 1001 溝跡壁面出土遺物 (第19図1～9) RG 1001 溝跡は古代以降(近現代?)の溝跡と考えられるが、溝壁面に重複関係が把握できない遺構埋土が観察され、壁面からは縄文時代前～中期の遺物が多量に出土した。1は突起のある深鉢口縁部片で、口縁は肥大し縦位に絡条体が押捺される。口縁下には円形の貼付文が施され、頸部には2条の隆帯が巡らされる。2は口縁部が内湾する深鉢口縁部片で、口縁下には沈線による鋸歯状文が施される。3・4は波状口縁を呈する深鉢で、口縁下には隆沈線を起点とした懸垂文が施される。3の隆線は赤色の顔料が練り込まれ、器体と異なる色調を際立たせる。5・6は深鉢底部で、隆沈線による懸垂文が施される。7は沈線による渦巻文・懸垂文が施される深鉢体部下半～底部の部位である。8は鉄石英製の石鏃で、基部は欠損するものである。9は頁岩製のノミ様の機能を持つ石器である。原石端部に交差する剥離面を持ち、刃部は再生が繰り返されている。刃部に直行する擦痕があり、丸く摩滅する。



第 11 図 R D 6650・6651・6652・6653 土坑，遺構検出面出土遺物（1）



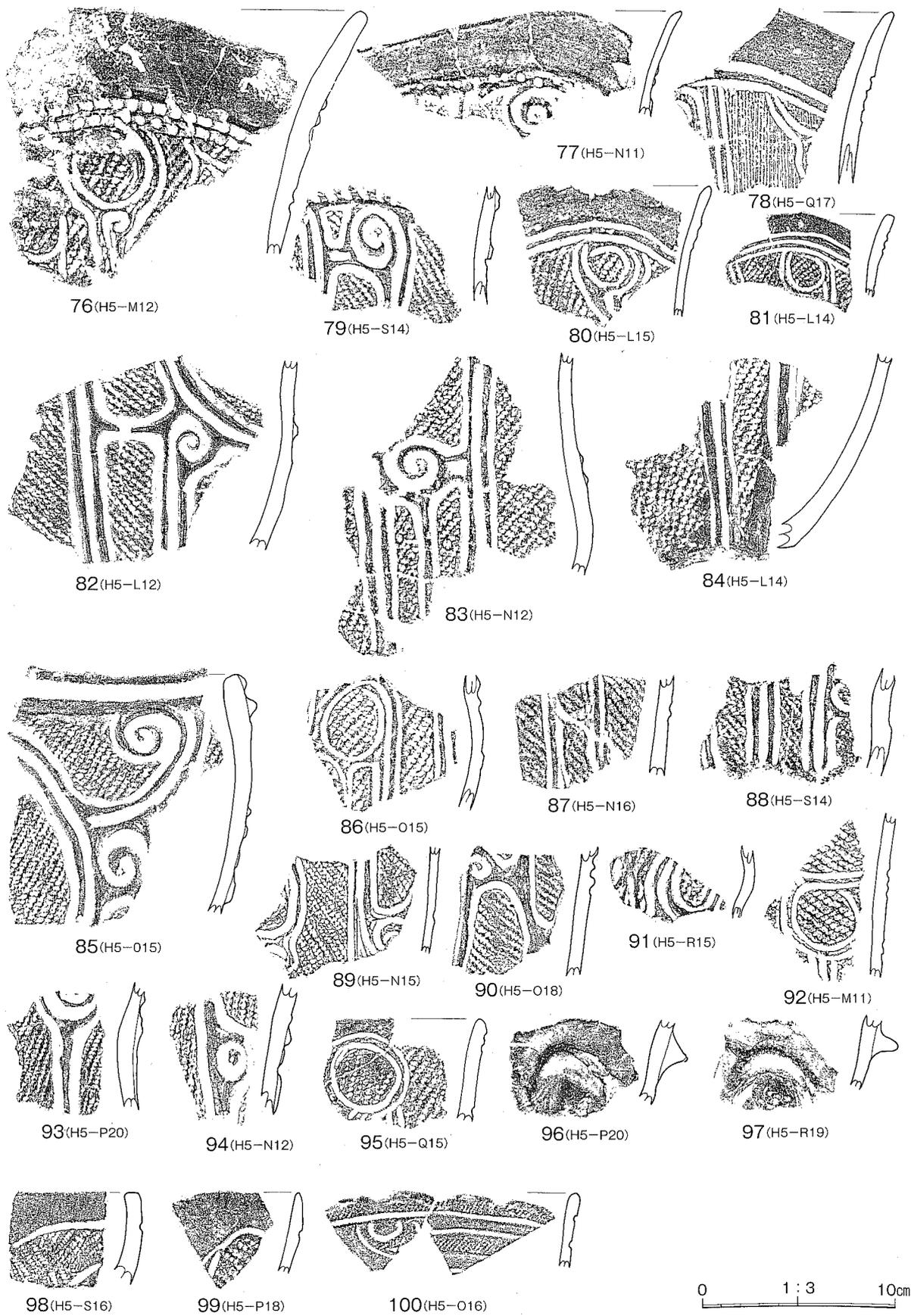
第12図 遺構検出面出土遺物(2)



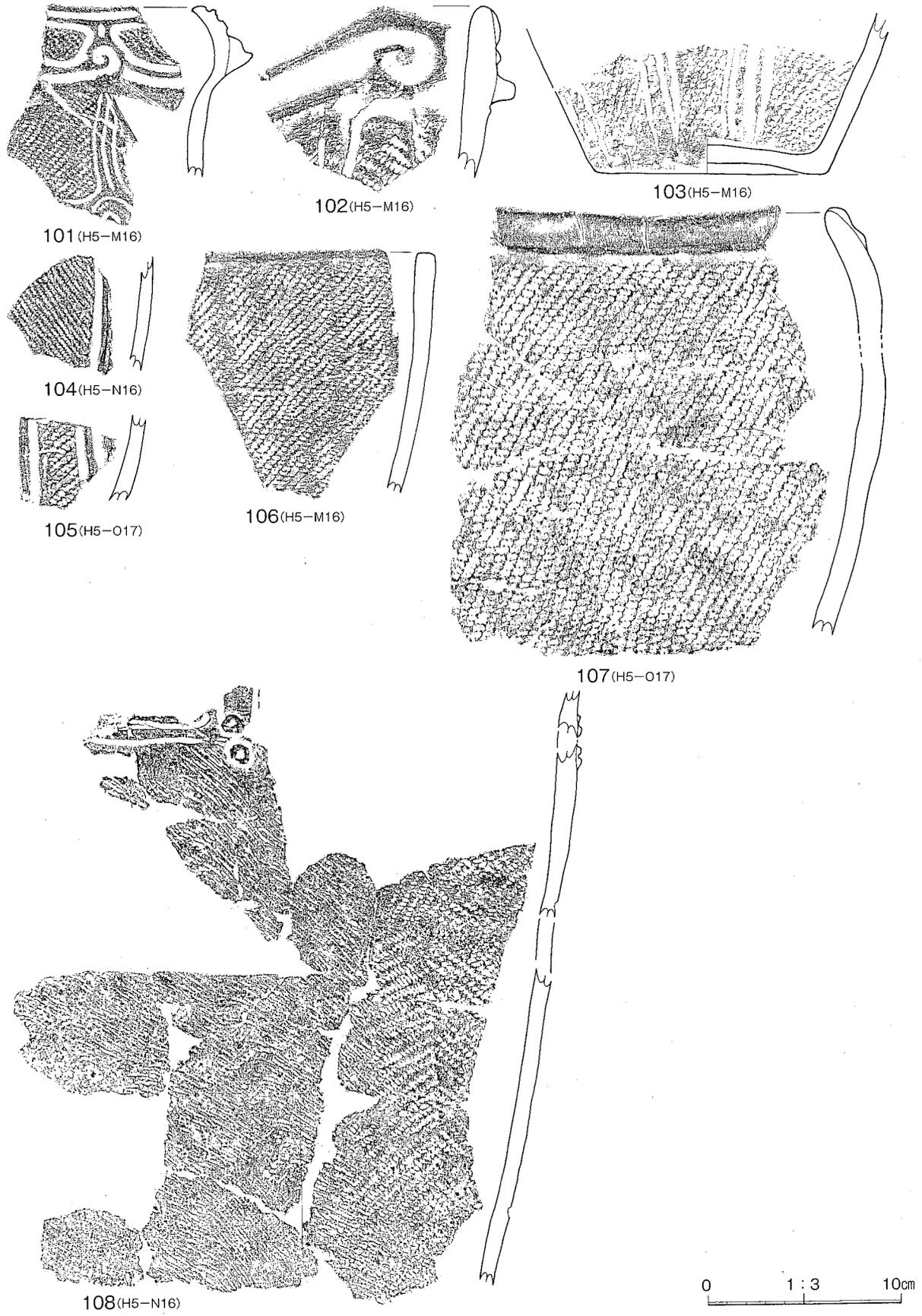
第 13 図 遺構検出面出土遺物 (3)



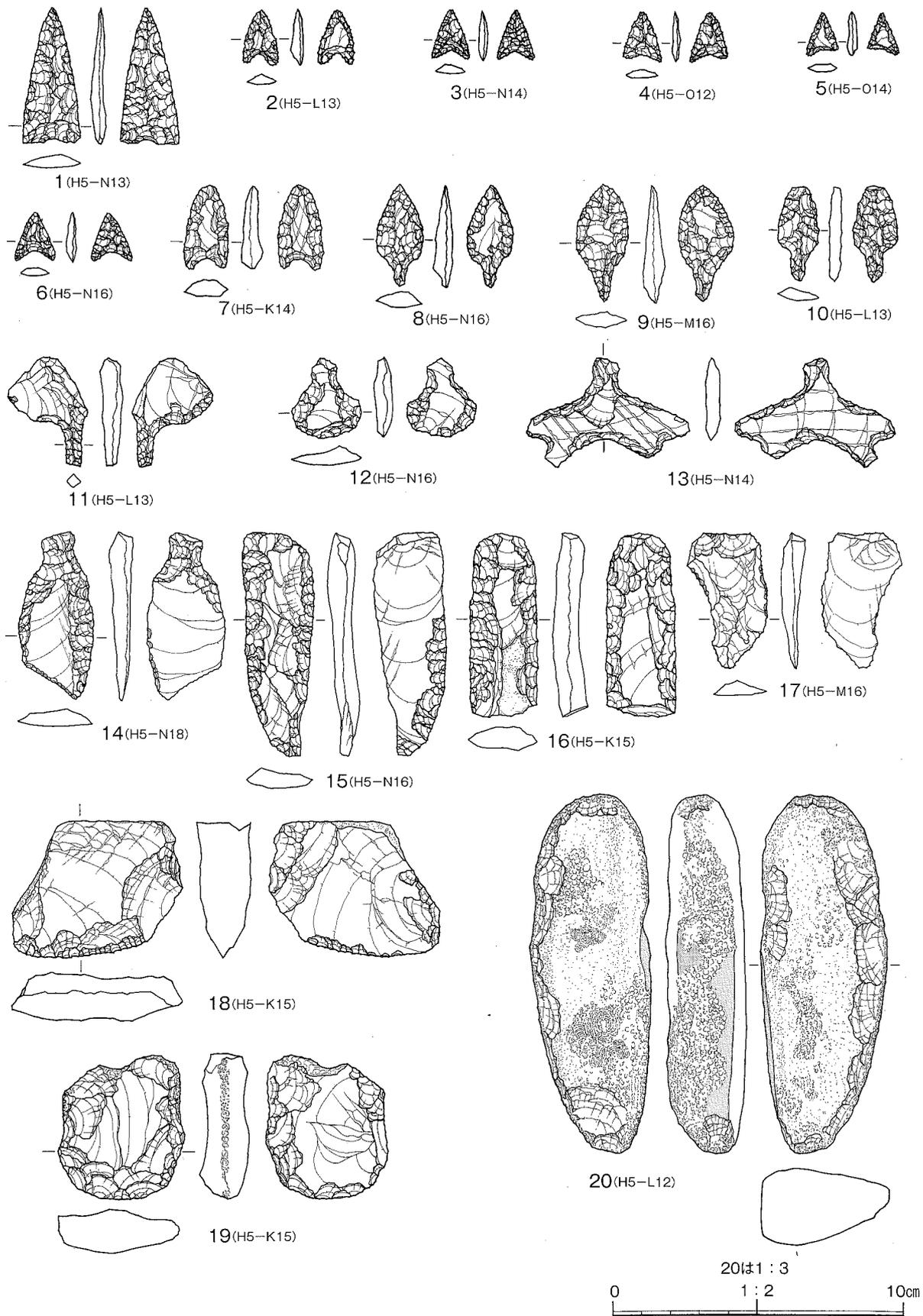
第 14 図 遺構検出面出土遺物 (4)



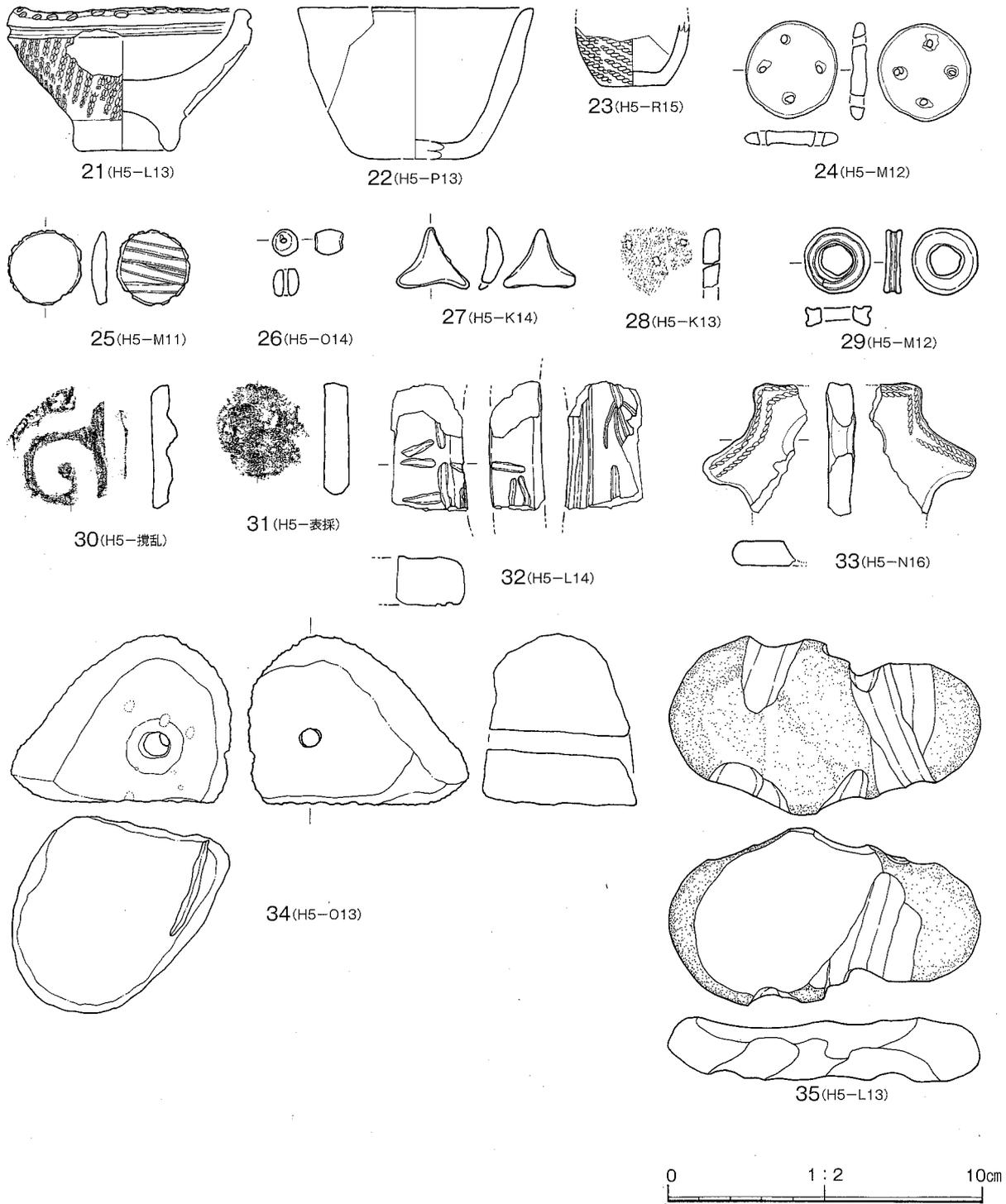
第 15 図 遺構検出面出土遺物 (5)



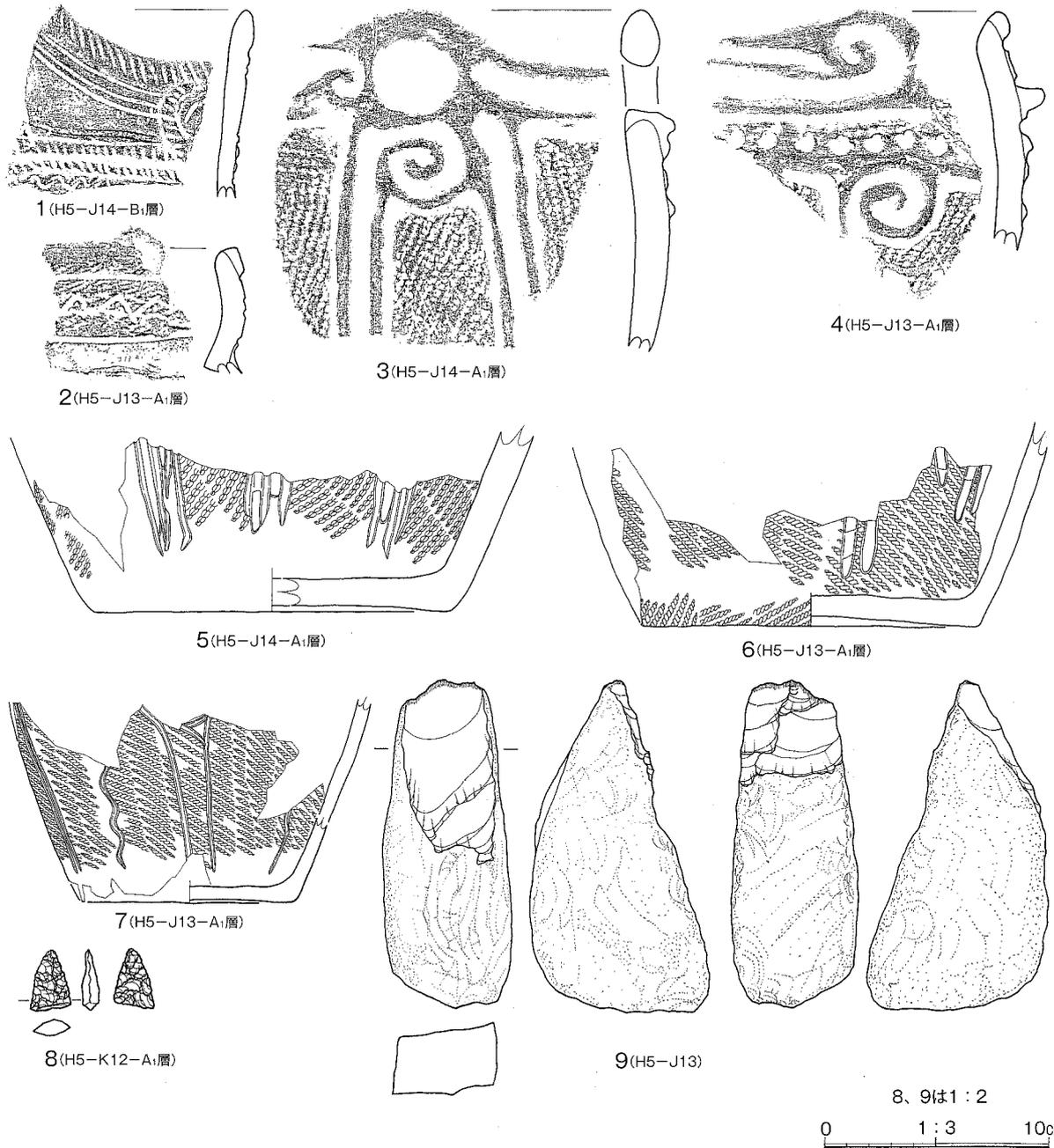
第 16 図 遺構検出面出土遺物 (6)



第 17 図 遺構検出面出土遺物 (7)



第 18 図 遺構検出面出土遺物 (8)



第19図 RG 1001 溝跡壁面出土遺物

4. 第82次調査内容

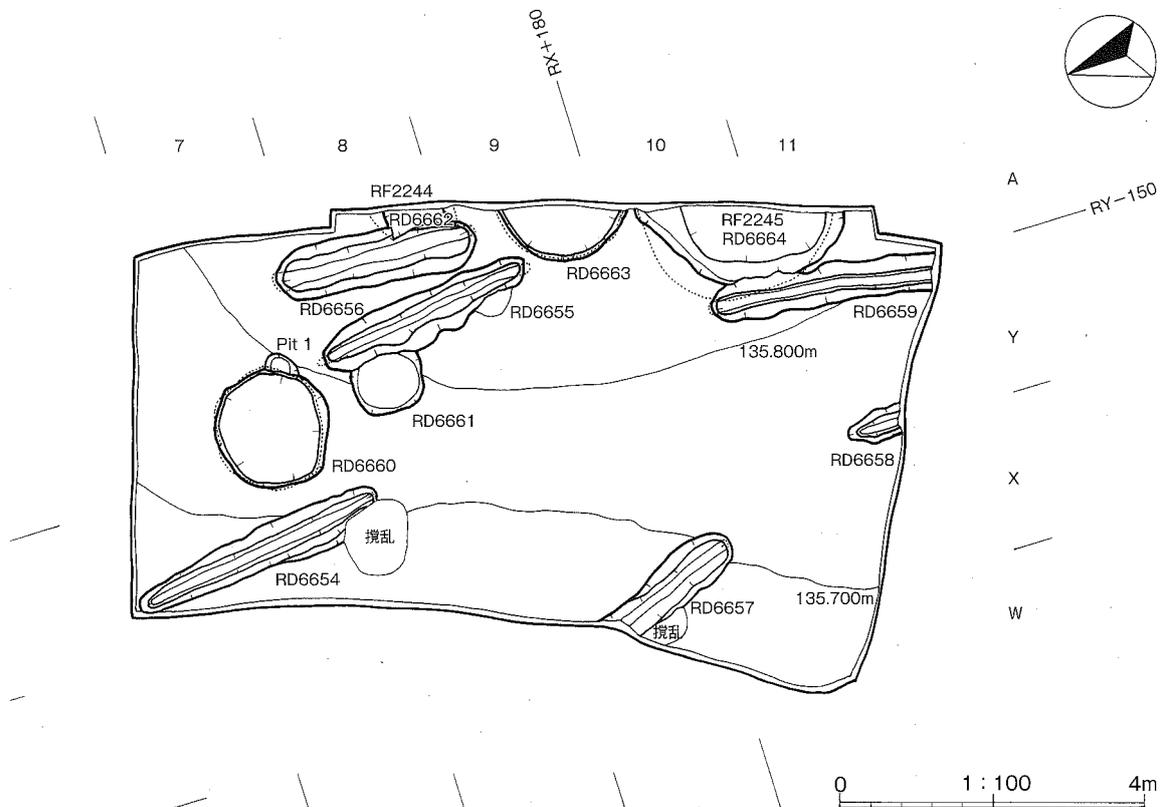
(1) 縄文時代の遺構・遺物

第82次調査は、個人住宅建設の事前調査として実施した。調査区は遺跡北西部の斜面部に位置し、東から西に傾斜しているが、表土直下で小岩井浮石層が確認されたことから、包含層は削平されたものと考えられる。全ての遺構は小岩井浮石層上面で検出した。

土 坑 土坑11基のうち6基は溝状の所謂陥し穴で、残る5基はフラスコ形土坑である。土坑の中には途中まで人為的に埋めたあと、土器を埋設し、火を焚いて炉として使われたものもある。陥し穴は斜面の等高線に対して平行に掘り込まれている。

RF 2244 炉跡 (第21図)

時 期 縄文時代中期 **平面形** 不整形 **重複関係** RD 6656 に切れ、RD 6662 を切る。
掘込面 RD 6662 埋土 (B層) 中。 **検出面** RD 6662 B層上面
炉の状態 直径0.42 mのピットに深鉢を埋設した埋甕炉である。RD 6662 を途中まで人為的に埋めた後にB層上面から掘り込んでいる。熱浸透層の厚さは0.06～0.08 mをはかる。
出土遺物 (第23図1・2) 1は火床面に埋設された深鉢形土器である。口縁部文様帯に原体圧痕による山形文が施され、地文は結節縄文である。2は頁岩製の削器である。背面右側縁部と腹面下端部に調整が施される。



第20図 大館町遺跡第82次調査区全体図

R F 2245 炉跡 (第 21 図)

時 期 縄文時代中期 平面形 不整形 重複関係 R D 6664 を切る。

掘込面 R D 6664 埋土中 検出面 R D 6664 B 層上面

炉の状態 深鉢を斜めに埋設した埋甕炉である。R D 6664 を途中まで人為的に埋めた後に B 層上面から掘り込んでいる。熱浸透層の厚さは 0.10 m をはかる。

出土遺物 (第 23 図 3) 3 は R F 2245 炉跡に埋設された深鉢形土器である。口縁部は波状を呈し、体部に屈曲を持つ。隆沈線による楕円・逆 U 字文と複節縄文が施される。口縁の一部に補修孔が開けられている。

R D 6654 土坑 (第 21 図)

時 期 縄文時代 平面形 溝状 重複関係 なし 掘込面 削平

検出面 小岩井浮石層上面 規 模 長軸上端 3.47 m・下端 3.31 m, 短軸上端 0.47～0.64 m・下端 0.12 m

埋 土 自然堆積によるものである。A 層～C 層に大別され、いずれもスコリア粒を少量含む。

A 層—黒褐色土を主体に、粒状の黒色土と黄褐色土が少量混入する。

B 層—黄褐色土を主体に、粒状の黒褐色土が少量混入する。

C 層—黒褐色土を主体に、塊状の黄褐色土が多く混入する。

壁の状態 ほぼ直壁で中ほどから緩やかに立ち上がる。深さは 1.15 m をはかる。

出土遺物 (23 図 4・5) 4・5 はキャリパー形深鉢の口縁部である。4 は口縁波頂部に S 字状突起を持ち、口縁部文様帯には沈線による波状文が施される。5 は口縁波頂部に隆沈線による渦巻文を持ち、口縁部文様帯にも横位に連結する渦巻文が施される。

R D 6655 土坑 (第 21 図)

時 期 縄文時代 平面形 溝状 重複関係 R D 6661 に切られる。 掘込面 削平

検出面 小岩井浮石層上面 規 模 長軸上端 3.47 m・下端 3.31 m, 短軸上端 0.47～0.64 m・下端 0.12 m

埋 土 自然堆積によるものである。A 層～B 層に大別され、いずれもスコリア粒を少量含む。

A 層—黒褐色土を主体とする層で、粒状の黄褐色土を少量含む。

B 層—黒褐色土を主体とする層で、塊状の黄褐色土を多量に含む。2 層に細分される

壁の状態 ほぼ直壁で中ほどから緩やかに立ち上がる。深さは 1.08 m をはかる。

出土遺物 (23 図 6) 6 は隆沈線による渦巻文を口縁部にもつ深鉢形土器である。

R D 6656 土坑 (第 21 図)

時 期 縄文時代 平面形 溝状 重複関係 R D 6662 を切る。 掘込面 削平

検出面 小岩井浮石層上面 規 模 長軸上端 2.7 m・下端 2.68 m, 短軸上端 0.7 m・下端 0.18 m

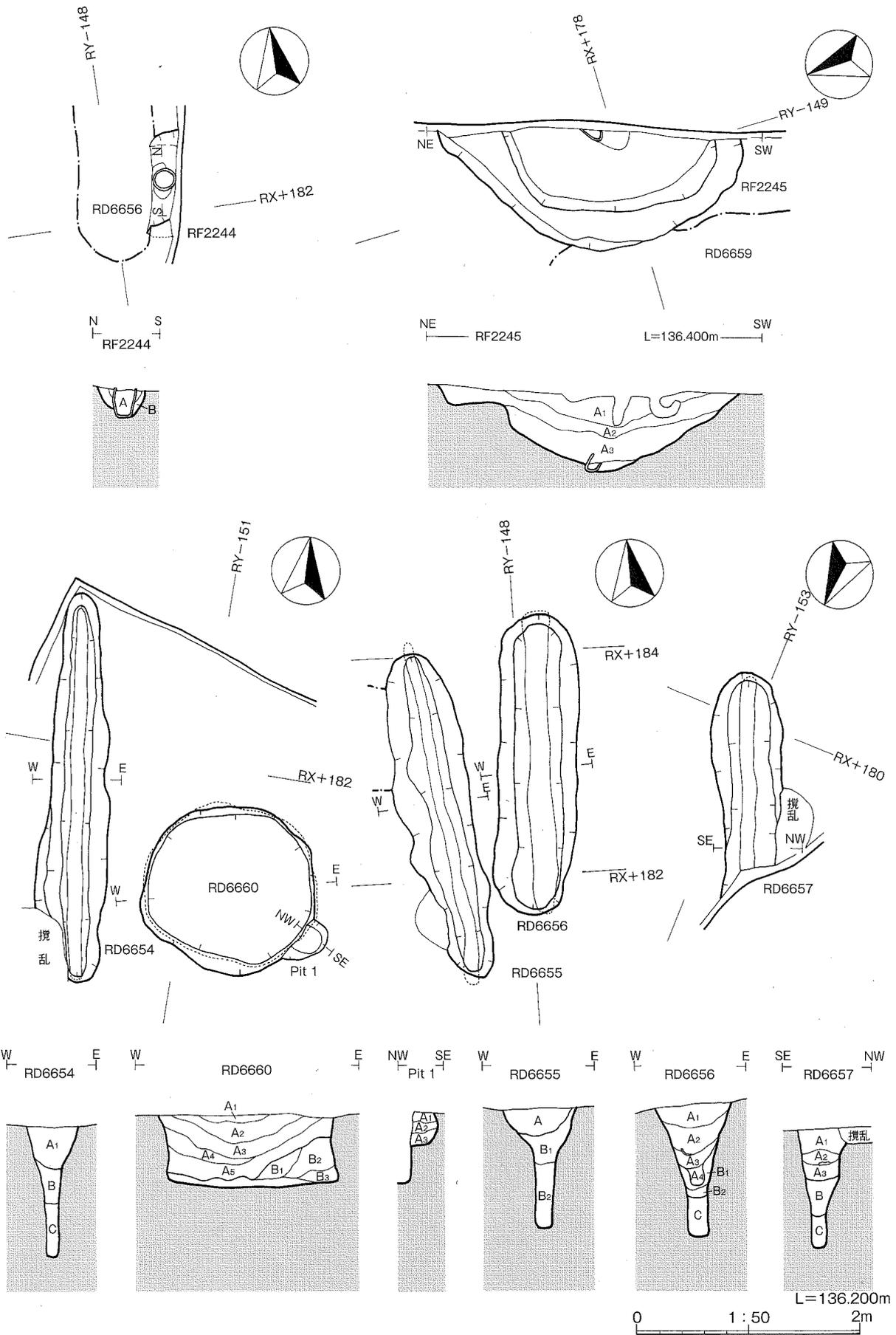
埋 土 自然堆積によるものである。A 層～C 層に大別され、いずれもスコリア粒を少量含む。

A 層—黒褐色土を主体とする層で、粒状の黄褐色土を多量に含む。4 層に細分される。

B 層—黄褐色土を主体とする層で、粒状の黒褐色土を少量含む。2 層に細分される。

C 層—黒褐色土を主体とする層で、塊状の黄褐色土を多量に含む。

壁の状態 外傾して緩やかに立ち上がる。深さは 1.18 m をはかる。



第 21 図 R F 2244・2245 炉跡, R D 6654・6660・6655・6656・6657 土坑, グリットピット

遺物 (第23図7～9) 7は口縁波頂部から垂下する隆沈線と横位の隆沈線が渦巻文で連結される深鉢の口縁部である。8は口縁波頂部に隆沈線による渦巻文を持ち、口縁部文様帯にも横位に連結する渦巻文が施される。9は口縁部文様帯に沈線による波状文と三条の横位沈線文を、体部には垂下する波状沈線文が施される小型深鉢である。

R D 6657 土坑 (第21図)

時期 縄文時代 平面形 溝状 重複関係 なし 掘込面 削平

検出面 小岩井浮石層上面 規模 長軸上端 2.04 m～, 下端 1.72 m～, 短軸上端 0.66 m・下端 0.14 m

埋土 自然堆積によるものである。A層～C層に大別される。

A層—黒褐色土を主体とする層で、粒状の黄褐色土を少量含む。3層に細分される。

B層—黄褐色土を主体とする層で、粒状のスコリア粒を多量に含む。

C層—黄褐色土を主体とする層で、塊状の黒褐色土を多量に含む。

壁の状態 外傾して緩やかに立ち上がる。深さは 1.08 mをはかる。

遺物 (第24図1・2) 1は波状口縁を持つ小型深鉢である。波頂部下には隆沈線による小渦巻文が施され、口縁部文様帯には沈線による渦巻文と横位平行沈線文が施文される。2は口縁部に隆沈線による有棘渦巻文が施されるキャリパー形深鉢である。

R D 6658 土坑 (第22図)

時期 縄文時代 平面形 溝状 重複関係 なし 掘込面 削平

検出面 小岩井浮石層上面 規模 長軸上端 0.75 m～, 下端 0.59 m～, 短軸上端 0.44 m・下端 0.09 m

埋土 自然堆積によるものである。

A層—黒褐色土を主体とする層で、粒状の黄褐色土を少量含む。3層に細分される。

壁の状態 外傾して緩やかに立ち上がる。深さは 1.08 mをはかる。 出土遺物 なし

R D 6659 土坑 (第22図)

時期 縄文時代 平面形 溝状 重複関係 R D 6664 を切る 掘込面 削平

検出面 小岩井浮石層上面 規模 長軸上端 2.95 m～, 下端 2.96 m～, 短軸上端 0.52 m・下端 0.14 m

埋土 自然堆積によるものである。A～B層に大別される。

A層—黒褐色土を主体とする層で、粒状の黄褐色土を少量含む。

B層—スコリア粒を主体とする層で、塊状の黒褐色土を多量に含む。

壁の状態 ほぼ直壁で中ほどから緩やかに立ち上がる。深さは 0.78 mをはかる。 出土遺物 なし

R D 6660 土坑 (第21図)

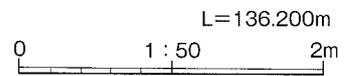
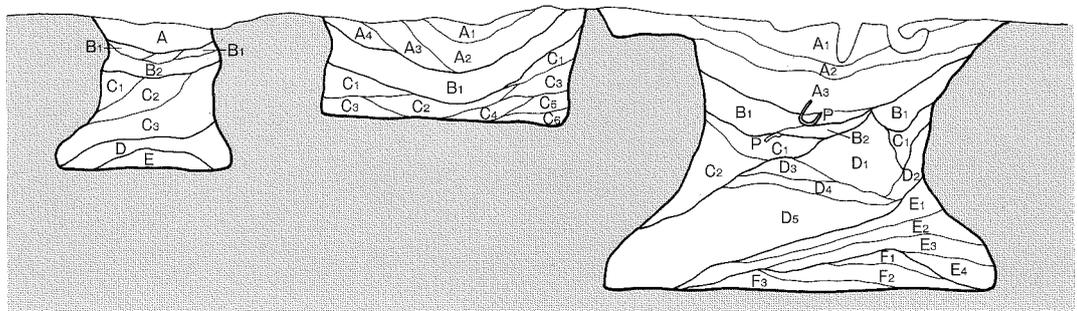
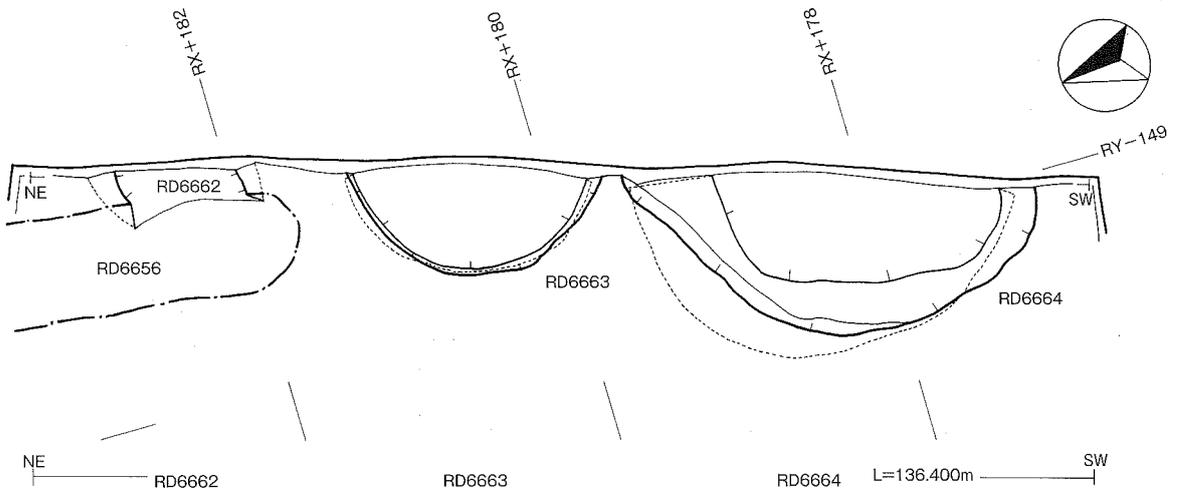
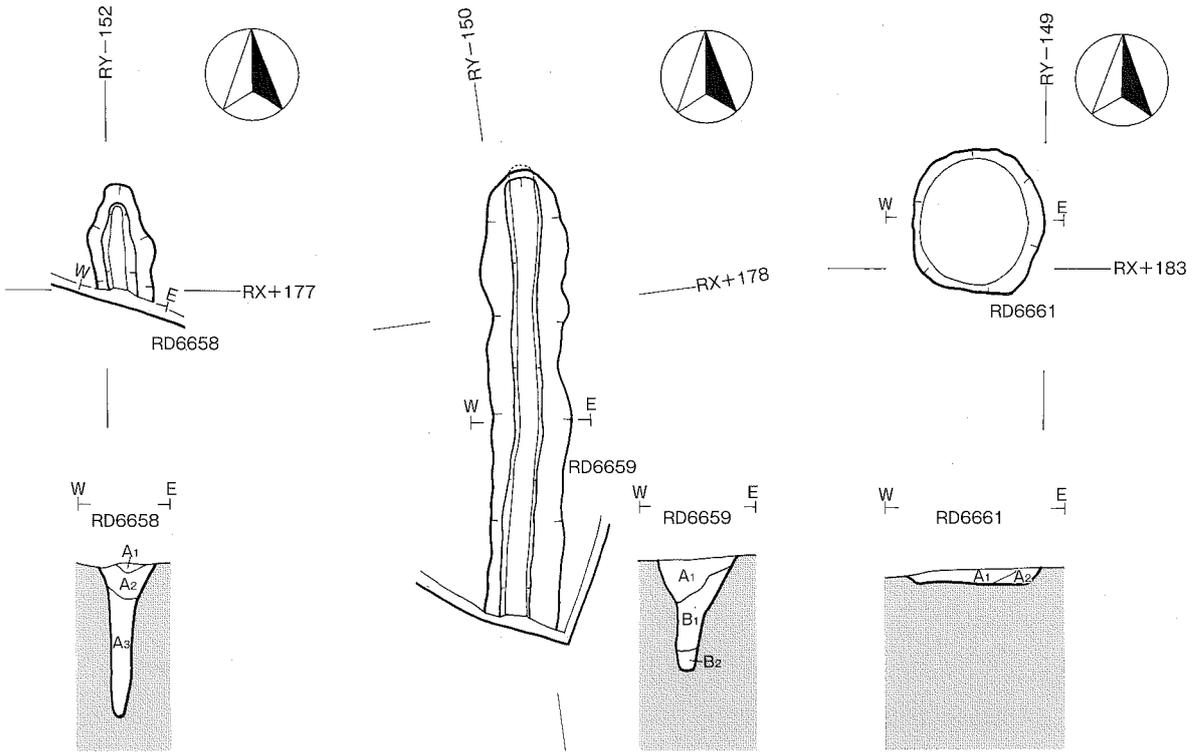
時期 縄文時代 平面形 円形 重複関係 なし 掘込面 削平

検出面 小岩井浮石層上面 規模 上端 1.50～1.55 m, 下端 1.35～1.36 m

埋土 自然堆積によるものである。A層～C層に大別される。

A層—黒褐色土を主体とする層で、少塊状の黄褐色土を多量に含む。5層に細分される。

B層—スコリア粒を主体とする層で、少塊状の黄褐色土を少量含む。しまりのある層である。



第 22 图 R D 6658·6659·6661·6662·6663·6664 土坑

C層—暗褐色土を主体とする層で、灰白色粘土を少量含む層である。

壁の状態 断面フラスコ状を呈する。深さは0.68 mをはかる。

出土遺物 (第24図3・4) 3は口縁部文様帯に横位の原体圧痕を施し、その直下の隆線に連続刺突を巡らす深鉢である。体部には羽状縄文を施す。胎土に繊維を多く含む。4は腹面左側縁部に調整を施す削器である。

R D 6661 土坑 (第22図)

時期 縄文時代 平面形 円形 重複関係 R D 6655 を切る。 掘込面 削平

検出面 小岩井浮石層上面 規模 上端0.90～0.94 m, 下端0.72～0.83 m

埋土 自然堆積によるものである。褐色土を主体とし、粒状の黒褐色土を少量含む。2層に細分される。

壁の状態 外傾して緩やかに立ち上がる。深さは0.10 mをはかる。 出土遺物 なし

R D 6662 土坑 (第22図)

時期 縄文時代 平面形 円形 重複関係 R D 6656 に切られる。 掘込面 削平

検出面 小岩井浮石層上面 規模 上端1.50～1.55 m, 下端1.35～1.36 m

埋土 A層は自然堆積でB層～E層は人為堆積である。

A層—黒褐色土を主体とする層で、粒状の暗褐色土を微量に含む。

B層—黒褐色土を主体とする層で、少塊状の褐色土を多く含む。

C層—黒褐色土を主体とする層で、粒状の黄褐色土を少量含む層である。4層に細分される。

D層—黄褐色土を主体とする層で、粒状の黒色土を少量含む

E層—黒褐色土を主体とする層で、少塊状の黄褐色土を少量含む。

壁の状態 断面フラスコ状を呈する。深さは0.95 mをはかる。 出土遺物 なし

R D 6663 土坑 (第22図)

時期 縄文時代 平面形 円形 重複関係 なし 掘込面 削平

検出面 小岩井浮石層上面 規模 上端1.71 m, 下端1.64 m

埋土 自然堆積による。A～C層に大別される。

A層—黒色土を主体とする層で、粒状の暗褐色土を少量含む。4層に細分される。

B層—黒褐色土を主体とする層で、塊状の褐色土を多く含む。

C層—黒褐色土と黄褐色土が互層に堆積する層で、6層に細分される。

壁の状態 断面ビーカー状を呈する。深さは0.80 mをはかる。

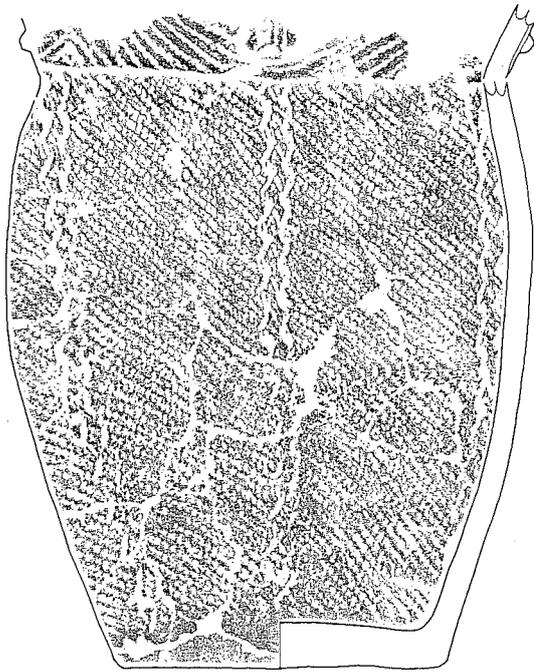
出土遺物 (第24図5・6) 5は口縁部に横位隆沈線文を施す深鉢である。6は波状口縁を呈する小型深鉢である。体部には沈線による渦巻文や垂下波状文が施される。

R D 6664 土坑 (第22図)

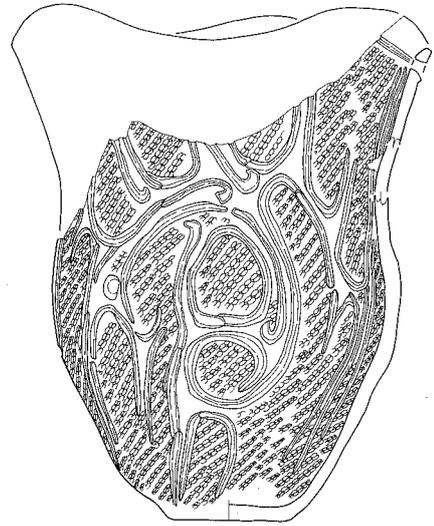
時期 縄文時代 平面形 円形 重複関係 R D 6659 に切られる。 掘込面 削平

検出面 小岩井浮石層上面 規模 上端2.74 m, 下端2.56 m

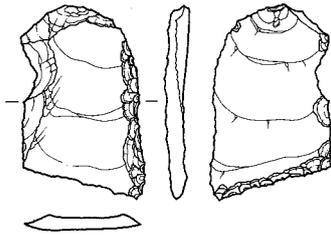
埋土 A層は自然堆積でB層～F層は人為堆積である。



1 (RF2244 J4-B8 埋設土器)



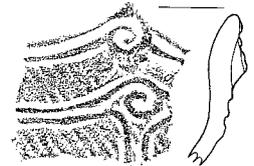
3 (RF2245 J4-A10 埋設土器)



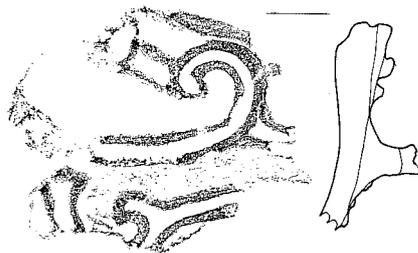
2 (RF2244 J4-B8 B層)



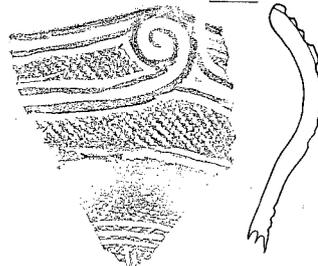
4 (RD6654 I4-Y7 A層)



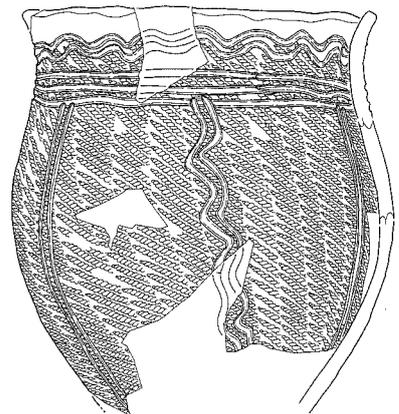
5 (RD6654 I4-Y6 A層)



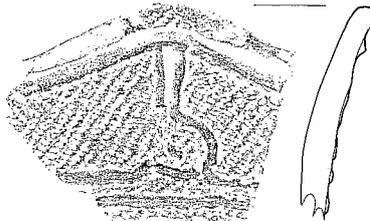
6 (RD6655 J4-A8 A層)



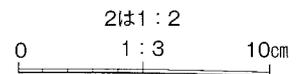
7 (RD6656 J4-B8 A層)



8 (RD6656 J4-B8 A層)



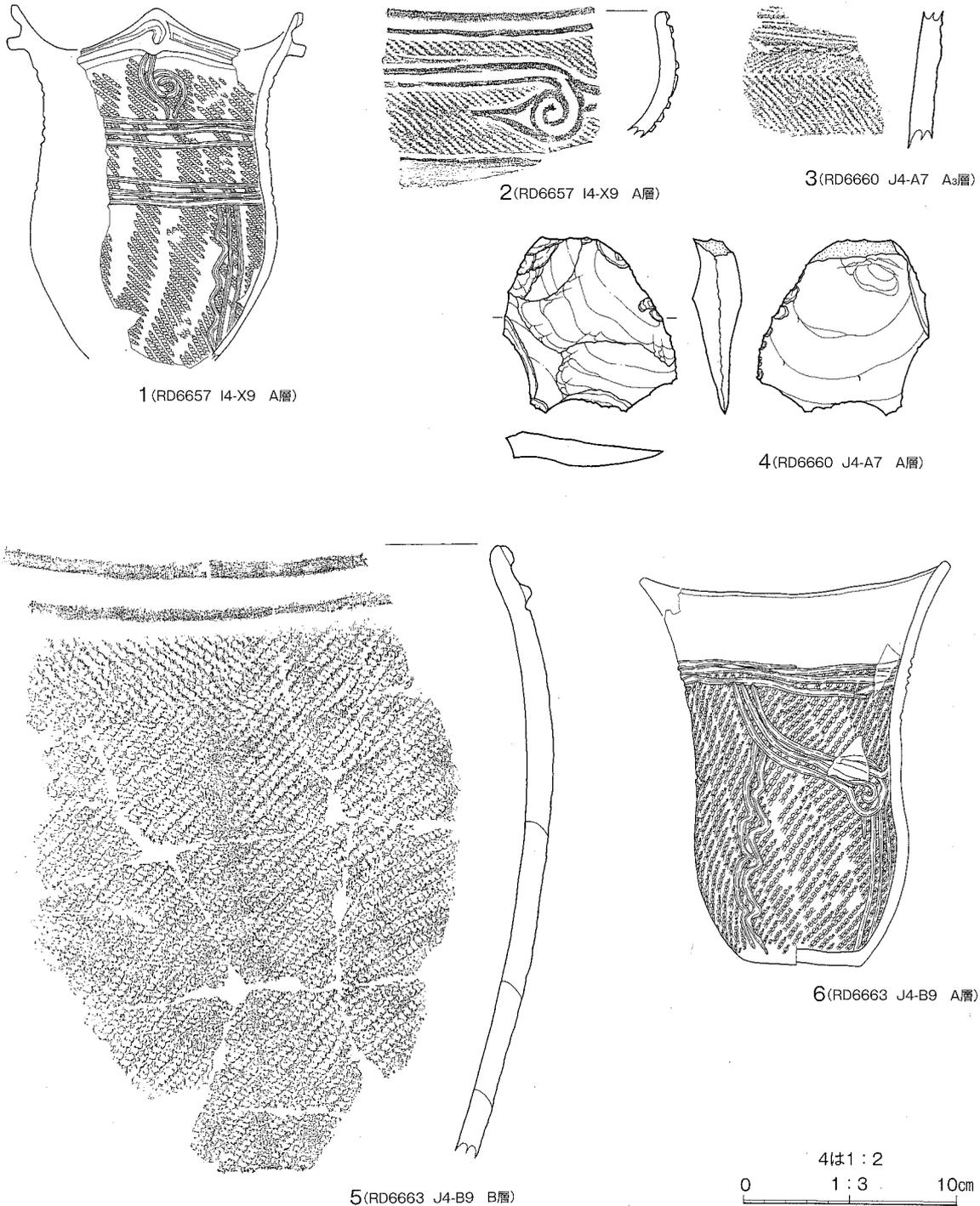
9 (RD6656 J4-B8 A層)



第 23 図 R F 2244・2245 炉跡, R D 6654・6655・6656 土坑出土遺物

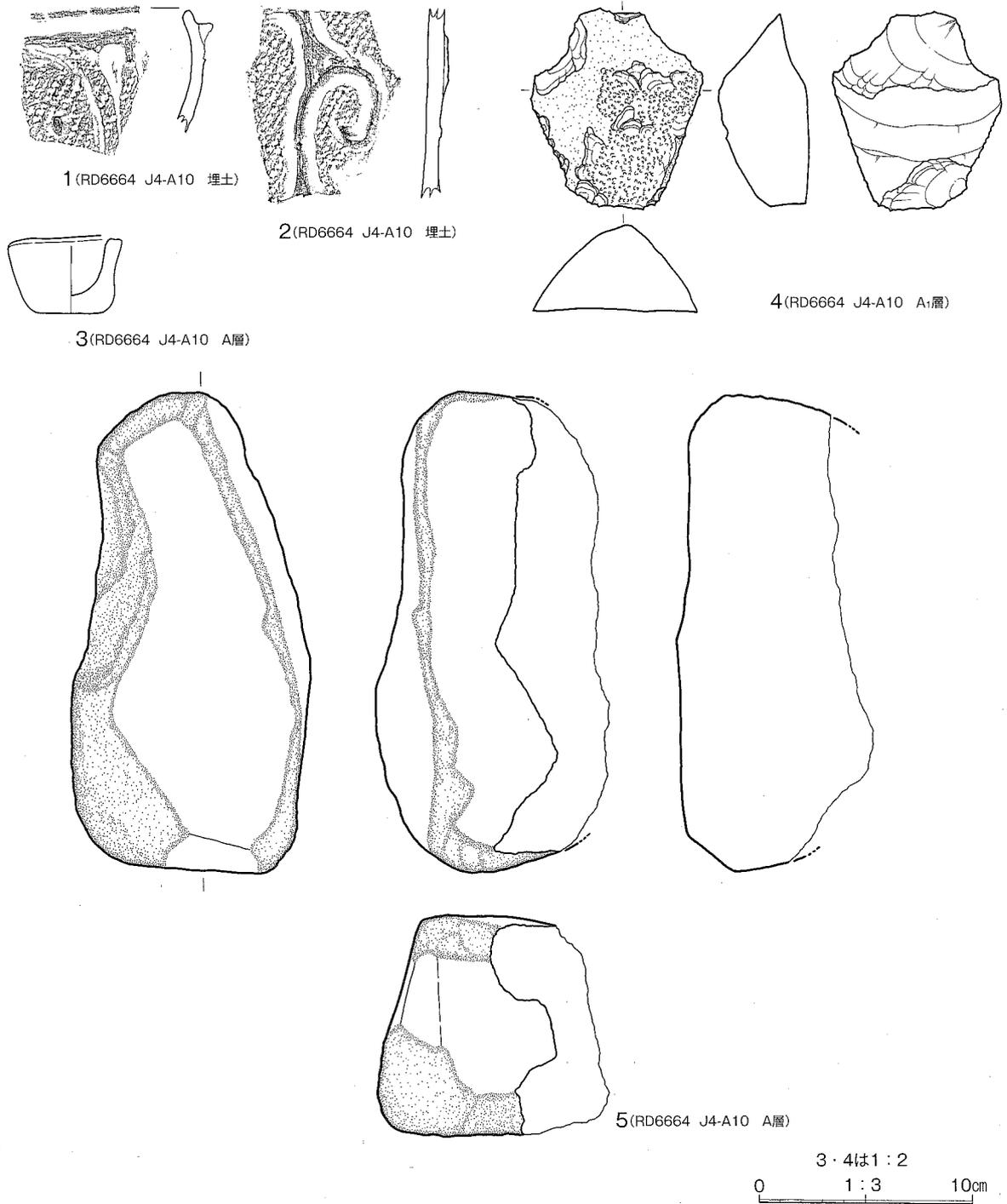
- A層—暗褐色土を主体とする層で、粒状の黒褐色土を少量含む。3層に細分される。
- B層—黒褐色土を主体とする層で、粒状の黄褐色土を少量含む。R F 2245の火床面でもある。
- C層—暗褐色土を主体とする層で、粒状の黄褐色土を少量含む。
- D層—黄褐色土を主体とする層で、粒～塊状の暗褐色土を少量含む。5層に細分される。
- E層—黒褐色土を主体とする層で、粒状の黄褐色土を多量に含む。
- F層—黒褐色土を主体とする層で、粒状の黄褐色土を少量含む。

壁の状態 断面フラスコ状を呈する。深さは1.80 mをはかる。



第24図 R D 6657・6660・6663 土坑出土遺物

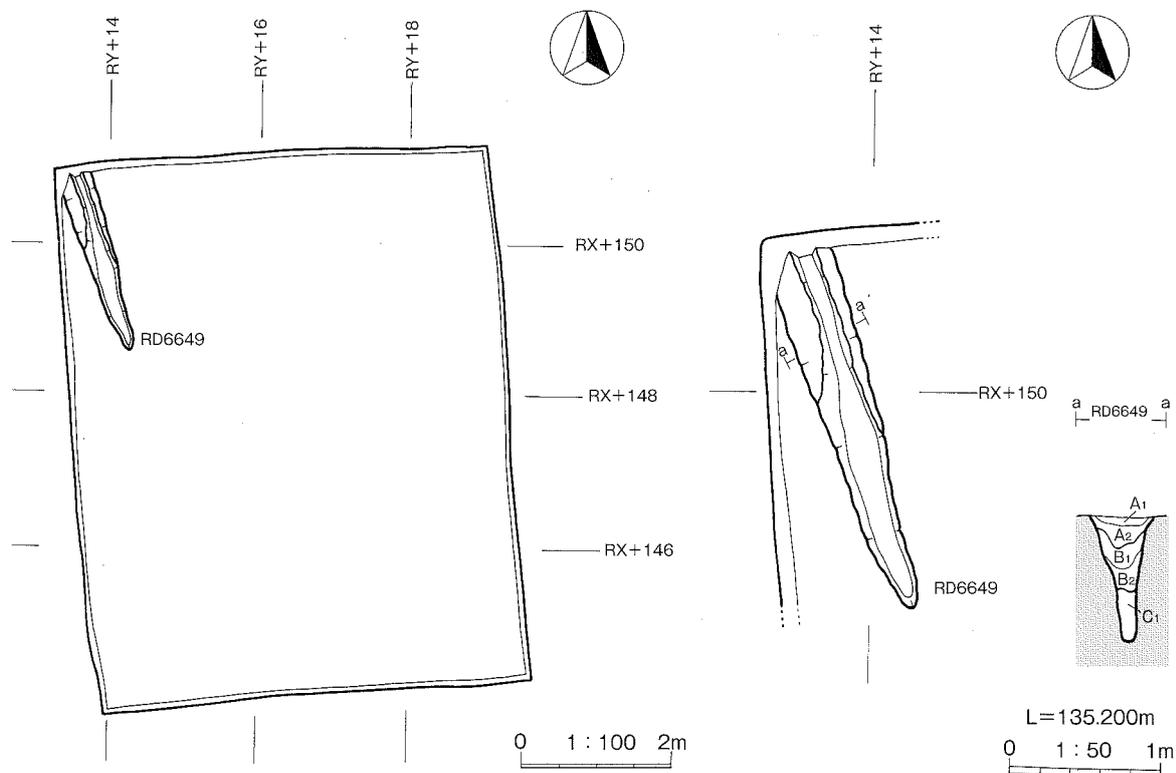
出土遺物（第25図1～4） 1・2は同一個体の深鉢口縁部と体部である。隆沈線によるやや簡略化された渦巻文が施される。3はミニチュア土器である。4は背面左側縁部に調整を施す搔器である。背面頂部には敲打痕が認められる。4は花崗岩製の砥石である。6面のうち3面に使用痕が認められる。



第25図 RD 6664 土坑出土遺物

5. 大新町遺跡第 80 次調査

平成 20 年度は個人住宅建設に伴う発掘調査を第 80 次調査として実施した。調査箇所は大新町遺跡東部、大新町地内で、調査の結果、縄文時代の土坑 1 基が検出され、遺物は表土より土器片が 1 点出土した。調査期間は平成 20 年 6 月 2 日～6 月 4 日、調査面積は 56m²である。



第 26 図 大新町遺跡第 80 次調査区全体図, R D 6649 土坑

R D 6649 土坑 (第 26 図)

時 期	縄文時代	平 面 形	溝状	重複関係	なし	掘 込 面	削平	検 出 面	V a 層上面
規 模		長軸上端	2.39 m 以上	・ 下端	2.34 m 以上	短軸上端	0.42 m	・ 下端	0.18 m
埋 土		自然堆積によるものである。A・B・C 層に大別され、A・B は 2 層に細分される。							
		A 層—A 層は黒褐色土を主体に、各層はスコリア粒を含む褐色土の混入量により細分される。							
		B 層—B 1 層は褐色土を主体に粒～塊状の暗褐色土が混入する層である。B 2 層は黒褐色土を主体とする層である。							
		C 層—C 層は黒褐色土を主体に塊状の白色火山灰を多量に含む。							

6. まとめ

第81次 第81次調査では多数の土坑および竪穴住居跡が確認されたが、今回の調査目的が集落の内容確認であるため、その多くは検出または、一部分の精査のみに留めた。多数検出された土坑群は北側に隣接する第45次調査でも確認されており、土坑墓群が北西～南西に広がっていることが確認できた。また、これらの土坑墓は大部分の竪穴住居跡よりも後に掘り込まれていることが明らかとなった。

RA 2241 竪穴住居跡は複式炉を伴う住居跡で、大館町遺跡内では検出例の少ない竪穴住居跡である。遺構の重複の激しい大館町遺跡の中で、他の遺構の重複を受けていないことから、集落内でも新しい時期に位置づけられる遺構と考えられる。また、出土した土器は渦巻文が鈎状になるなど簡略化され、縦位の文様帯が意識されるようになる。大木8b-3式～大木9式の過渡期に相当するものと考えられる。これらの土器群は遺物包含層の中にも若干含まれており、大館町遺跡の集落の変遷を考える上で貴重な成果である。

第82次 第82次調査では遺跡北西部の位置し、周辺の調査では(第5・12・15次調査)、フラスコ形土坑や陥し穴状遺構が多数確認されている。今回も同様の遺構が検出され、用途の異なる遺構の遺跡内における分布状況について新たな情報を得ることができた。また、2基の貯蔵穴を再利用した埋設土器炉は、これまで報告事例が少なく、用途については今後の調査の蓄積を待つて明らかにしたい。

第80次 第80次調査では陥し穴状遺構が1基確認された。これまでも大新町遺跡では散発的に陥し穴状遺構は確認されており、縄文時代中期以降、この一帯が狩猟場として使われていたことが窺える。

Ⅲ. 繫V遺跡（第35次調査）

1. 遺跡の概要

（1）遺跡の環境

遺跡の位置 繫V遺跡は盛岡市街地から西に約10kmの盛岡市繫字館市地内に所在する（第1図）。

地形・地質 繫地区は、奥羽山脈から東流する雫石川により形成された雫石盆地東端、箱ヶ森（865 m）、南昌山（848 m）が連なる篠木・東根山山地の北麓に位置する。

周辺の地形は雫石川の北岸と南岸で大きく相違し、北岸では火砕流堆積物（小岩井泥流）を基盤とした台地が発達し、南岸では前述した東根山山地が迫り、北岸で見られる平坦面は発達していない。

篠木・東根山山地は主に新第三紀中新世の飯岡層・男助層・舩沢層より構成され、飯岡層は輝石安山岩・緑色凝灰角礫岩、男助・舩沢層は古雫石湖に堆積した緑色凝灰角礫岩や砂岩・泥岩等が含まれる。これらの岩石は雫石川河床に転石として見られ、繫V遺跡を含め雫石川流域の縄文時代遺跡では石器の石材として利用されている。なお、硬質泥岩、珪質泥岩と呼ばれる貝殻状に剥離する硬質の岩石は、考古学上における石器石材の名称で「頁岩」と一括して称される場合が多い。今回の発掘調査においても厳密な石材分類が困難であったため「頁岩」の名称を用いて分類作業を行っている。

（2）過去の調査

繫遺跡は古くから土器や石器の出土があったが、一般に広く知られるようになったのは、昭和26年（1951）8月、繫小中学校（当時、岩手郡御所村大字繫字館市、御所中学校繫分校）校舎増築に伴う敷地造成工事の際に、縄文時代中期の底部穿孔土器が7個体出土したことによる。出土状況は倒立の状態で見られ、全て並列していたといわれる。発見された7個体の土器の内3個体には装飾性に富む文様が器面全体に施され、その文様の美しさから東北地方を代表する縄文土器の一つに数えられ、全国的に紹介される機会の多い土器であった。これらの土器は昭和63年に国重要文化財に指定されている。

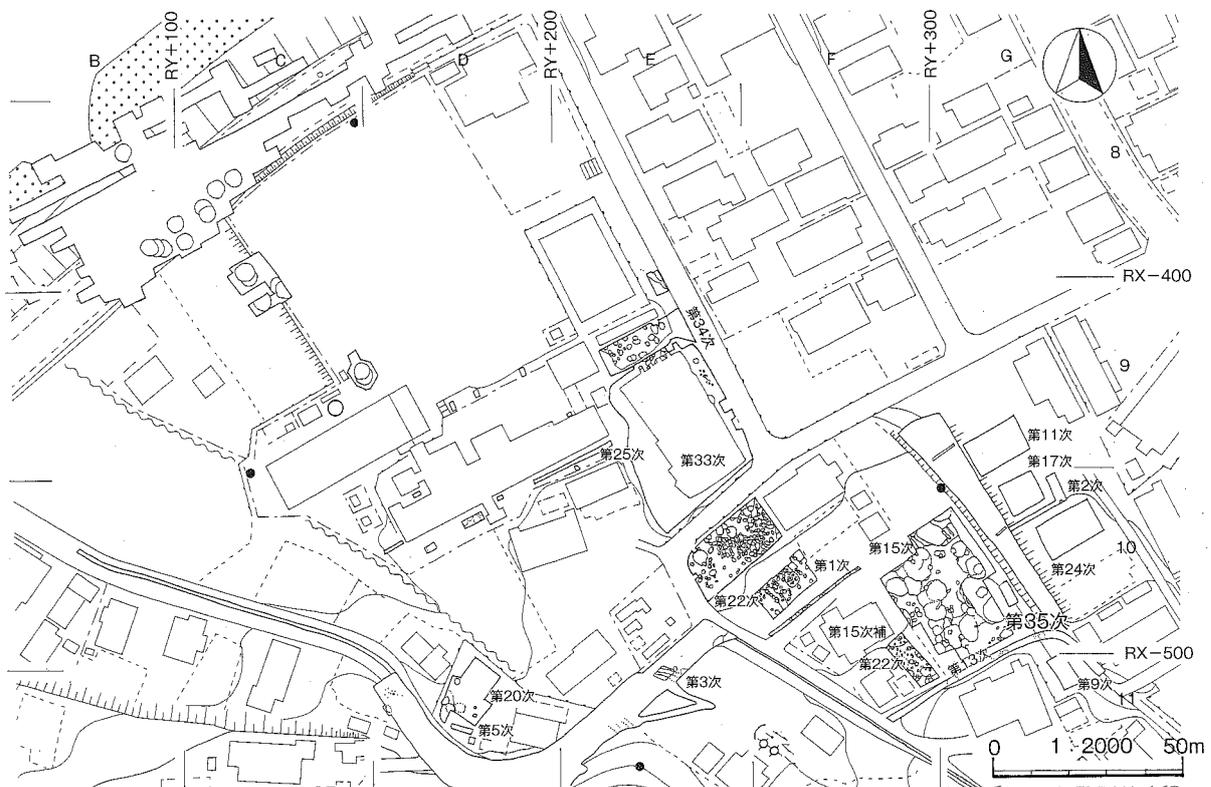
昭和32年の調査 昭和32年（1957）10月、校庭拡張に際して初の発掘調査が実施された。発掘調査は盛岡市教育委員会と岩手大学によって行われ、縄文時代中期の竪穴住居跡7棟と縄文時代中期から後期にかけての遺物が多量に出土した（1960 草間俊一、吉田義昭『岩手県盛岡市繫遺跡』盛岡市公民館）。

昭和39年の調査 昭和39年（1964）4月、岩手大学の学術調査として実施された。詳細は不明であるが、縄文時代の竪穴住居跡が数棟検出されたようである。

御所ダム建設 昭和48年（1973）から昭和55年（1980）に至る8年間に御所ダム建設に伴う事前の緊急発掘調査が実施されたが、これに先立つ分布調査によって盛岡市から雫石町にまたがる700ha

用地内に 37 遺跡が確認された。繫地区においても新たに 8 遺跡（繫Ⅰ～Ⅶ遺跡、南ノ又遺跡）の所在が確認され、これまでの「繫遺跡」は「繫Ⅴ遺跡」と変更されることとなった。御所ダム建設に伴う繫Ⅴ遺跡の発掘調査は昭和 48 年 8 月に行われ、縄文時代中期の竪穴住居跡 11 棟、土坑 58 基が検出された。出土遺物は縄文時代中期から晩期にかけての土器・石器が多量に出土しており、特に中期初頭から中葉の土器が多数であったようである。

第 1～36 次調査（第 27 図）昭和 58 年（1983）より個人住宅など各種開発に伴う事前の緊急発掘調査が盛岡市教育委員会で行われ、繫遺跡群（繫Ⅰ～Ⅶ遺跡）全体で平成 21 年度までに 36 次にあぶ緊急発掘調査が実施されている。発掘調査は主に遺跡南東部の住宅地で行われ、縄文時代中期から後期の竪穴住居跡、土坑が確認されている。特に平成 4～6 年度の第 13・15 次発掘調査、平成 8 年度の第 21 次発掘調査では繫Ⅴ遺跡の集落を知る上で重要な成果が得られた。第 13・15 次発掘調査では縄文時代中期中葉～末葉、後期初頭の竪穴住居跡が重複した状態で 72 棟検出されたことから長期間集落が継続していたことが明らかになり、約 46,000㎡の台地全体が縄文時代中期の大規模集落であることが確認された。遺跡の北東段丘縁辺に調査区がある第 21 次発掘調査では、第 13・15 次調査区と近接していながらも様相が異なり縄文時代中期の土坑が 134 基確認された。土坑の多くは楕円形を呈し、内部よりヒスイ製玉類など特殊な遺物が出土したことから土坑墓であることが考えられる。また、第 34 次調査区においても第 21 次調査と同様に土坑墓と考えられる土坑が 88 基検出されたことから、第 13・15 次調査区より北西に位置する第 21 次調査区付近から第 34 次調査区付近にかけての北東段丘縁辺に墓域が拡がることが明らかにされた。竪穴住居は昭和 48 年度調査区北東部、第 12・13・15・36 次調査区の竪穴住居跡検出状況を見る限り、墓域を中心とした扇状の住居域が展開していることが確認されつつある。



第 27 図 繫Ⅴ遺跡全体図

2. 調査成果

(1) 平成 20 年度の調査

平成 20 年度の繫 V 遺跡の発掘調査は、国庫補助事業として 1 件の個人住宅擁壁建築に係る事前本調査を実施した（第 35 次発掘調査）。

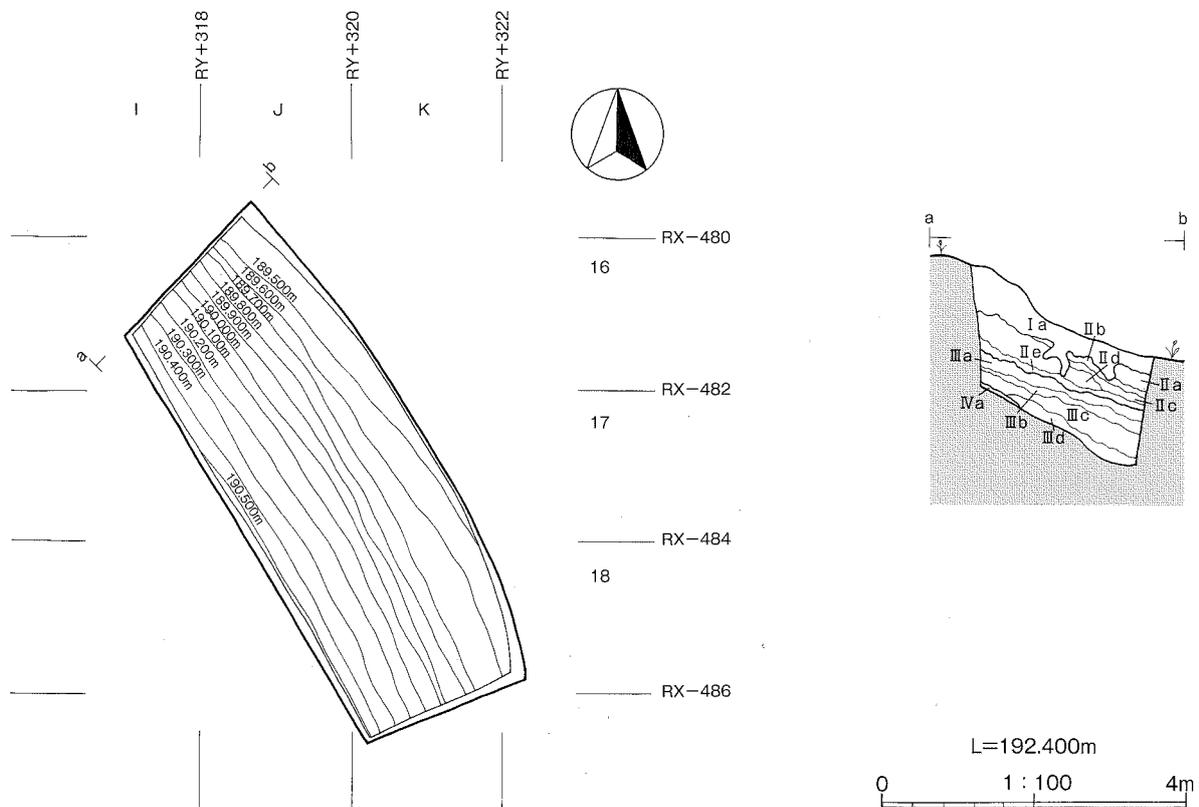
第 35 次調査 第 35 次調査区は遺跡中央部東端に位置し、第 13 次調査区の東側に隣接している。調査地点の標高は 192 m 前後をはかり、段丘斜面中に本調査区がある。調査期間は平成 20 年 5 月 13 日～5 月 28 日で、調査面積は 16m²である（第 28 図）。

調査の結果、調査区全面で縄文時代前～中期の遺物包含層を検出した。遺物包含層は西から東に傾斜する段丘崖に形成されており、本調査区から東側は傾斜が緩くなる。東側斜面については平成 17 年度に発掘調査が実施されており（第 30 次）、深さ 1.5 m 以上の厚い遺物包含層が確認されている。

遺物包含層（第 28 図） 第 35 次発掘調査における調査区の基本土層は I～IV 層に大別される。

I 層－表土・耕作土、II 層－暗褐色土を主体とする層。II b 層は微細な炭化物・焼土粒を多量に含み、II c 層は黒褐色土を多量に含む。III 層－a～d の 4 層に細分される。黒褐色土を主体とする層で、a・b 層は微細な炭化物を含み、c 層はほぼ黒色の層となる。d 層はスコリア粒を少量含む暗褐色土が混入する。IV 層は自然礫（凝灰岩）を含む暗褐色と黄褐色土の混合土層である。

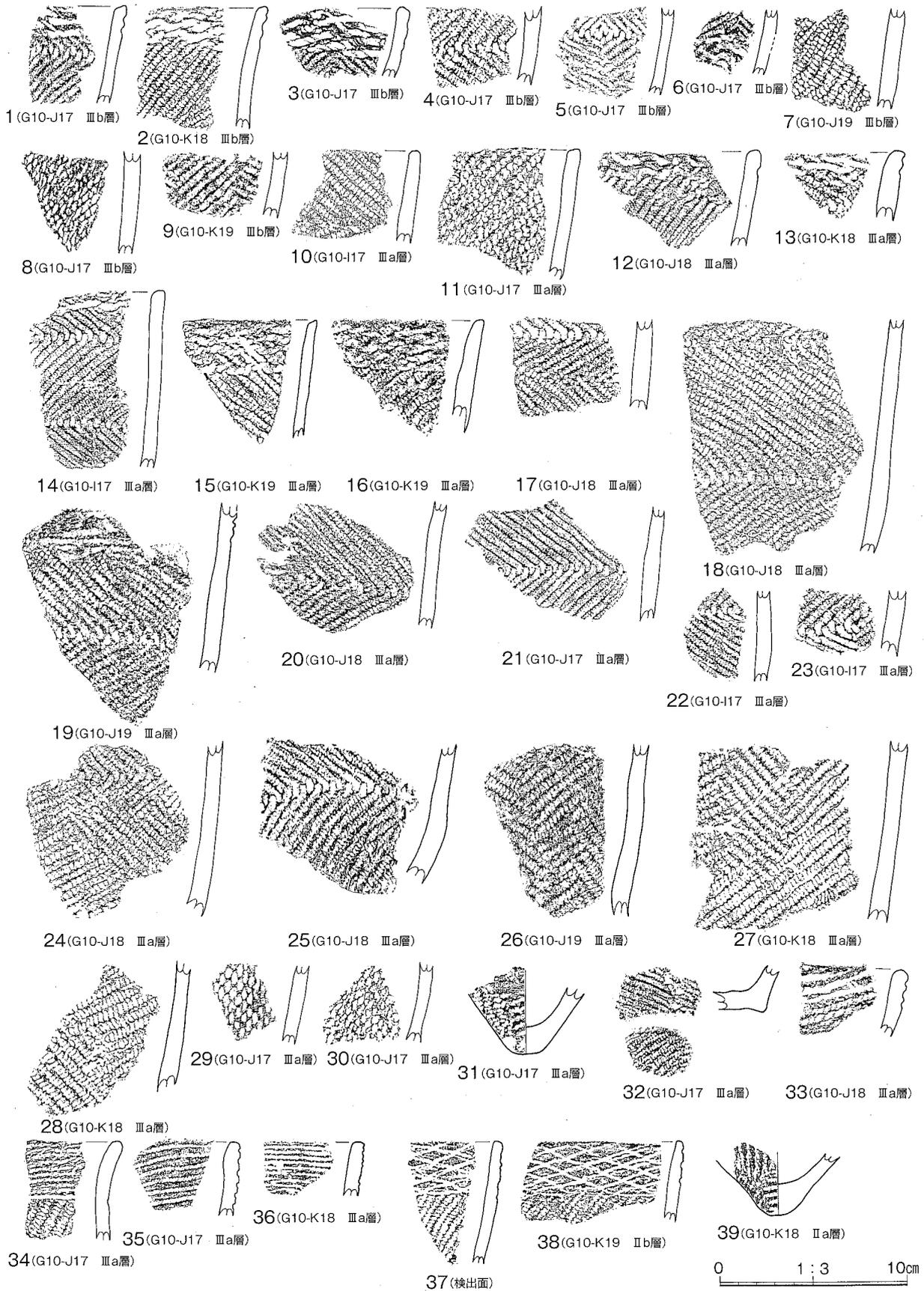
遺物は II a～c 層、III a・b 層より出土しており、III c・d 層、IV 層からは全く出土しなかった。



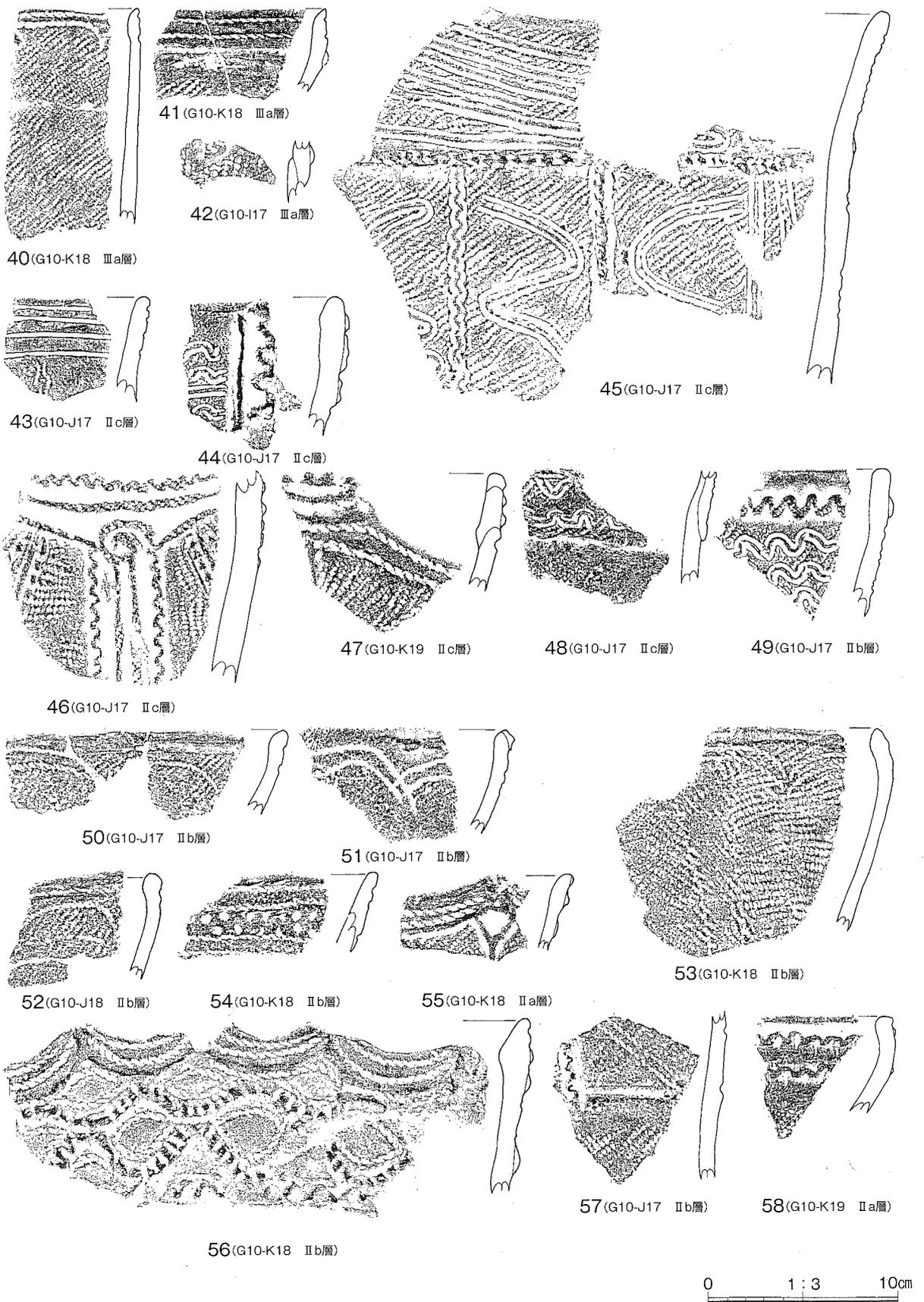
第 28 図 繫 V 遺跡第 35 次調査区全体図

土 器 (第 29・30 図) 1～39 は胎土に多量の繊維を含む土器群である。1～3・12～16 は口縁部にかけて直線的に開く深鉢口縁部片で、口縁部下には不整捺糸文が横位に施される。4～6・9・17～28 は地文に羽状縄文が施される深鉢体部片で、9・24・28 は結束をもたない。8・11・29・30 は地文に組紐文が施される深鉢片で、11 は口縁部片である。31・32・39 は深鉢底部片で、31・39 は尖底、32 は平底を呈する。33～38 は口縁部下に捺糸文が横位に施される深鉢口縁部片で、37・38 は網目状捺糸文である。40 は口縁部下に原体圧痕文が横位に施される深鉢口縁部片である。41 は浅鉢で、原体圧痕文は隆線により区画される。42 は原体圧痕を伴う隆線による文様が描かれる深鉢体部片である。43 は口縁部下に 4 条の平行沈線が施される深鉢口縁部片で、地文には結節縄文が縦位に施文される。44 は口縁部下に 2 条 1 組沈線による波状文・平行沈線が横位に施される深鉢口縁部片で、口唇部より波状隆線文が垂下する。45 は口縁部が外反する深鉢の口縁部～体部片で、波状口縁を呈する。押引文を伴う隆線で区画された口縁部下には、半裁竹管による多条の弧状文が施され、体部には大小の波状文が交互に垂下する。46 は原体圧痕を伴う隆線による渦巻文・波状隆線文・半裁竹管による押引文が連結して描かれる深鉢体部片である。47 は弁状突起をもつ深鉢口縁部片で、頂部には深い刻みが施される。口縁部下には原体圧痕による区画文が展開する。48 は幅広の隆帯上に 2 条 1 組の沈線による連弧文・波状文が横位に施される深鉢体部片である。49 は口縁部下に波状隆線文と 2 条 1 組の沈線による波状文が多段に施される深鉢口縁部片である。50～53 は口縁部が内湾する鉢形土器片で、口縁部下には 2 条 1 組の原体圧痕による連弧文が横位に施される。53 の地文には結節縄文が縦位に施文される。54 は口縁部下に原体圧痕による区画文が横位に展開する深鉢口縁部片である。区画内には交互刺突文が施される。55 は波状口縁を呈する深鉢口縁部片で、頂部は刻みをもち Y 字状隆線文が垂下する。隆線に区画された口縁部下には、波状に沿い 2 条の原体圧痕文が施される。56 は円筒上層式の影響を受けた深鉢の口縁部～体部片で、小波状口縁を呈する。隆線に区画された口縁部下には、波状に沿い 2 条の原体圧痕文が施され、波状隆線文に区画された体部上半には、原体圧痕を伴う隆線と原体圧痕文によるレンズ状文が横位に展開する。57 は波状隆線文・隆線・原体圧痕文による区画文が横位に展開する深鉢体部片である。58 は口縁部下に 2 条の交互刺突文が施される浅鉢口縁部片である。

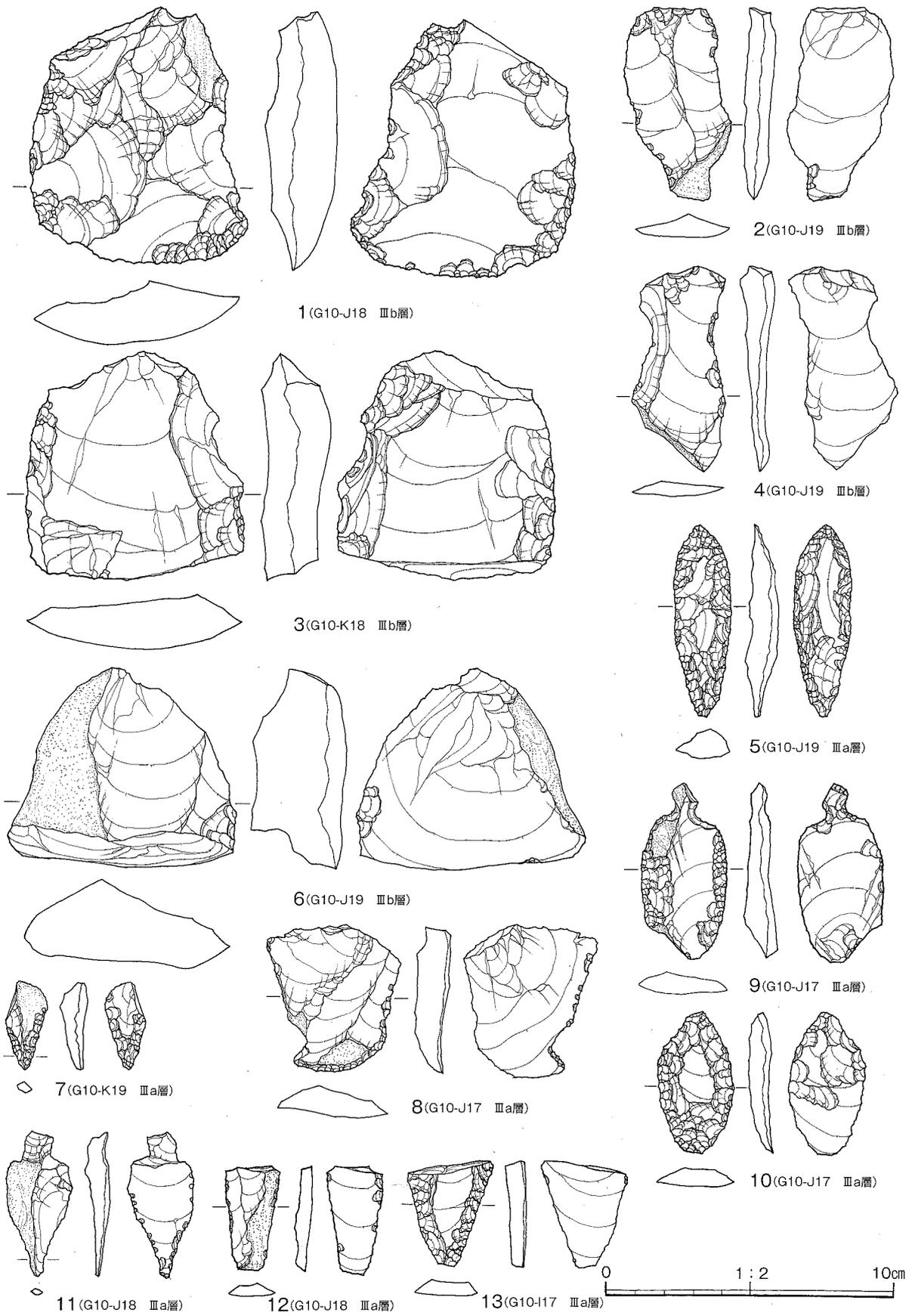
石 器 (第 31・32 図 1～13) 1～4・6・8・12・13 は頁岩製の削器である。1 は両側縁および下端、3 は両側縁、8 は背面右側縁および下端に調整剥離が施される。13 は背面両側縁に刃部調整剥離が施される。5 は柳葉状を呈する頁岩製の石槍で、両面に入念な押圧剥離が施される。7・11 は頁岩製の石錐である。7 は自然面を残した棒状を呈し、錐部にかけて入念な押圧剥離が施される。11 は板状を呈し、腹面両側縁に不連続な調整剥離が施される。9・10 は縦長を呈する頁岩製の石匙で、10 はつまみ部を欠く。9 は背面両側縁、10 は背面全周縁に刃部調整剥離が施される。14～18・26・27 は頁岩製の篋状石器である。14・15 は刃部が直線状を呈し、背面を中心に入念な調整剥離が施される。16・17 は刃部幅広形で刃部は弧状を呈する。16 は背面全周縁、17 は背面基部および腹面周縁に入念な押圧剥離が施される。18・26・27 は基部欠損で、刃部は弧状を呈する。18・27 は両面、26 は背面周縁および腹面左側縁に調整剥離が施される。19 は頁岩製の両面調整石器で、両側縁に入念な押圧剥離が施される。20 は蛇紋岩製の石斧未製品で、両面調整剥離後の敲打による整形過程と思われる。21 は頁岩製の石核で、自然面を残している。22～24



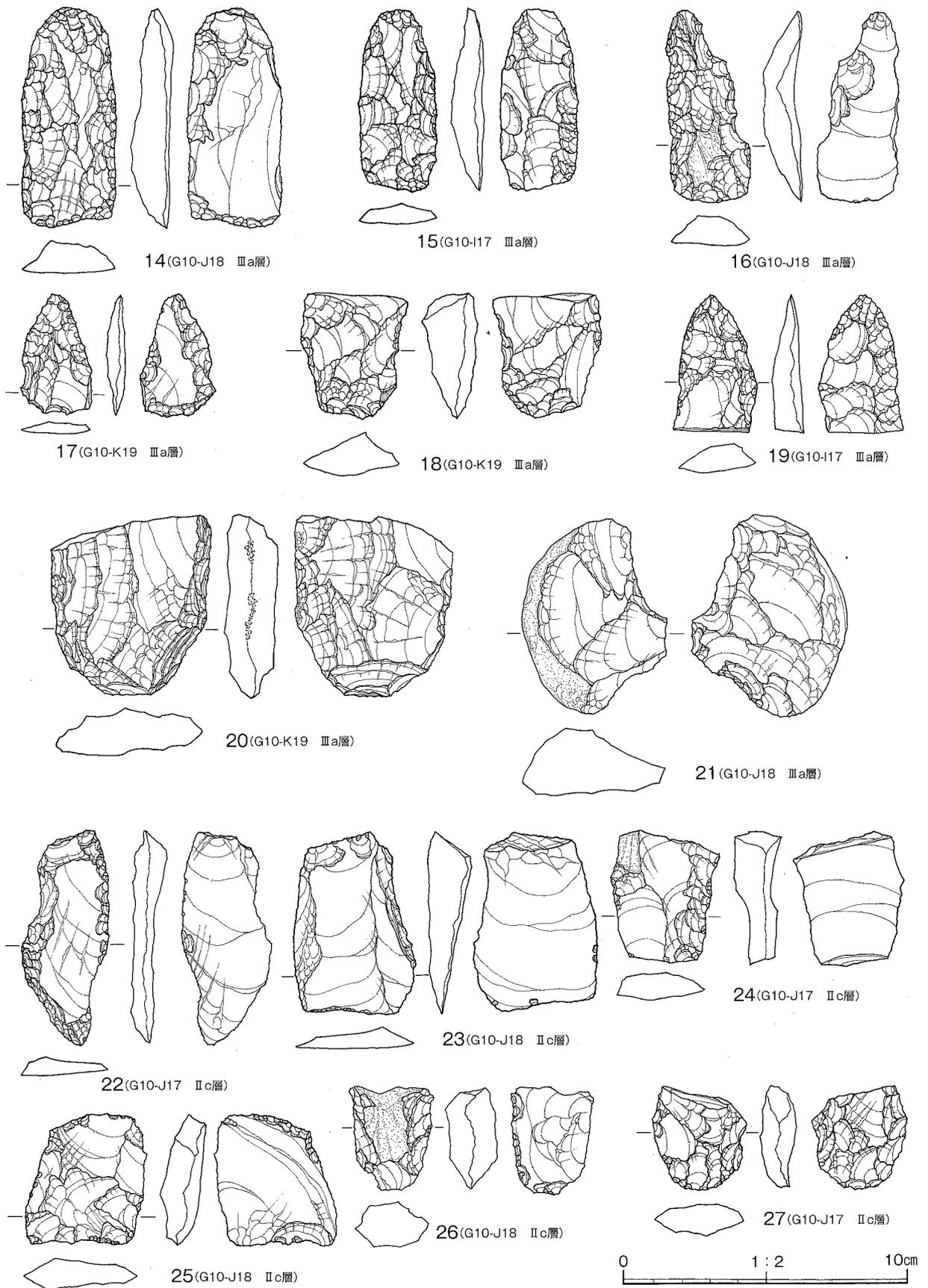
第29図 遺物包含層出土遺物(1)



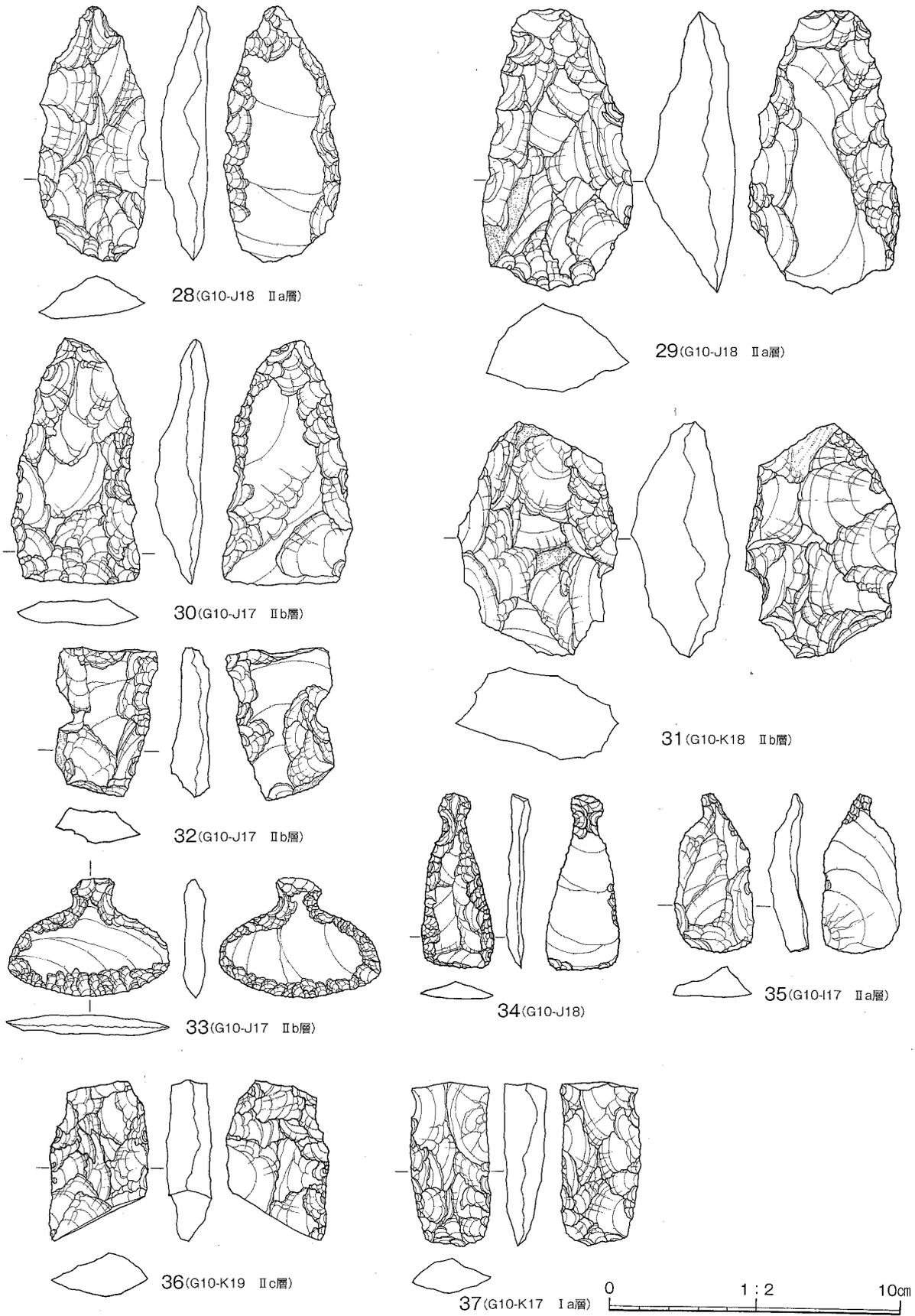
第 30 図 遺物包含層出土遺物 (2)



第31圖 遺物包含層出土遺物(3)



第 32 図 遺物包含層出土遺物 (4)



第33図 遺物包含層出土遺物(5)

は頁岩製の削器で、22・23は背面周縁、24は背面両側縁に調整剥離が施される。25は頁岩製の楔形石器である。28～30・36・37は頁岩製の筥状石器である。28～30は刃部幅広形で、刃部は28・29が弧状、30が直線状、29の断面は肉厚の凸レンズ状を呈する。ともに背面および腹面両側縁に調整剥離が施される。36は刃部欠損、37は基部欠損で、37の刃部は弧状を呈する。ともに両面に調整剥離が施される。31は頁岩製の石核である。32は頁岩製の両面調整石器で、両面周縁に調整剥離が施される。33～35は頁岩製の石匙である。33は横形で、横長剥片を加工したものである。両面全周縁に入念な刃部調整剥離が施される。34・35は縦形で、縦長剥片を加工したものである。34は背面全周縁および腹面つまみ部に入念な刃部調整剥離が施される。35は未発達つまみ部を呈し、石錐の可能性も考えられる。背面および腹面つまみ部に調整剥離が施される。

3. 調査のまとめ

第35次調査および過去の成果を踏まえた結果、繫V遺跡が立地する段丘縁辺の斜面には縄文時代の遺物包含層が形成されていることが明らかになった。特に段丘北縁辺と東縁辺には相当量の遺物が含まれる包含層が形成されていることが判明している。

今回の調査では縄文時代前期初頭と中期初頭の遺物包含層が検出されているが、東に接する第30次調査区では早期中葉から晩期、弥生時代に至る遺物包含層が検出されている。主体となるのは中期初頭（大木7a式併行期）から後葉（大木8b式併行期）にかけての時期で、特に今回の調査でも出土したが、大木7a式併行期の遺物量が最も多い。一方で集落が最も拡大した大木8a・8b、9式併行期になると、段丘斜面からの遺物出土量は極端に少なくなる。この現象の解釈としてひとつ考えられることは、包含層から出土する大木7a式併行期の遺物は、中期中葉以降の集落が拡大する時期（大木8a式併行期）の地面掘削時に現れた遺物を当時の人間が段丘斜面下に廃棄したものではないかということである。統計的な根拠はないが、中期後葉以降の竪穴住居跡埋土には夥しい遺物が廃棄されることから、大木8a式期を境に「捨て場」とする場所の概念が時期により異なることも考えられる。

IV. 山王山遺跡（第12次調査）

1. 遺跡の環境

(1) 遺跡の概要

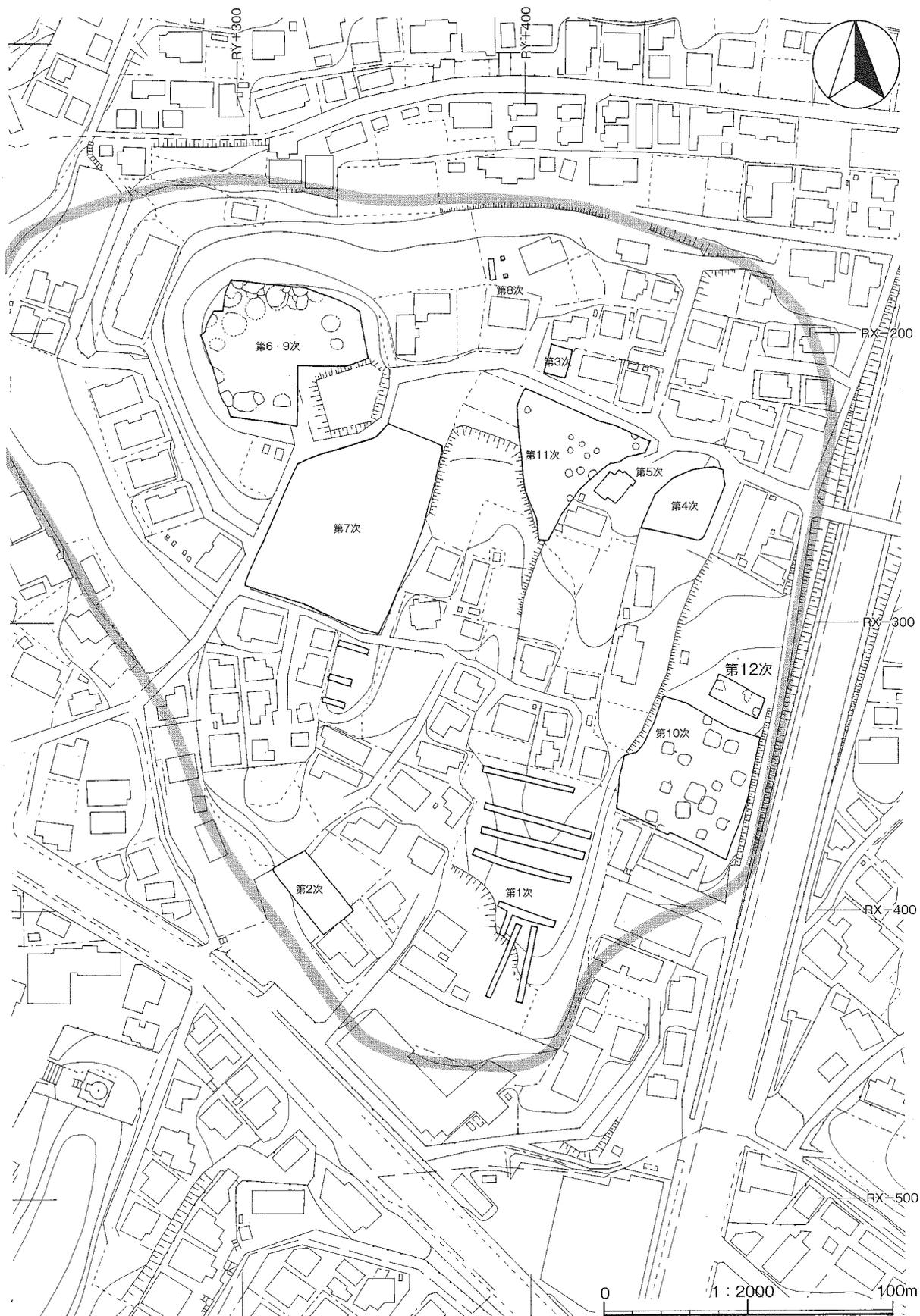
位置 山王山遺跡は市街地から東に約2kmの山王町地内に所在する(第1図)。現状は宅地および畑・果樹園である。遺跡範囲は南北約350m、東西約300mと推定される。標高は135～155m前後である。

地形・地質 本遺跡は、岩山や大森山を含む建石山山地の西端部および縁辺部に発達した丘陵地に立地している。下方には中津川・梁川流域に発達した低位段丘が広がっている。

周辺の遺跡 本遺跡の周辺には、縄文時代の遺跡が多く分布している。東側に広がる中起伏山地である岩山南麓には西より小山遺跡(縄文時代前期～晩期, 平安時代), 砂溜遺跡(縄文時代中期～後期, 平安時代, 近世), 仁反田遺跡(縄文時代早期～後期, 中世城館)が分布している。また、本遺跡が立地する丘陵末端には中野館が、沢状地形を挟んだ北側丘陵地には花垣館など中世城館が分布している。

次数	所在地	調査原因	面積	調査期間	検出遺構・遺物
試1	盛岡市山王町1	宅地造成	425㎡	92.11.24 92.12.21	縄文時代土坑3
2	盛岡市山王町1-2	個人住宅建築	80㎡	94.11.28	遺構・遺物なし
試3	盛岡市山王町49-7	駐車場造成	32㎡	94.11.29	遺構・遺物なし
試4	盛岡市山王町	共同住宅建築	120㎡	96.06.26	遺構・遺物なし
5	盛岡市山王町4-42	個人住宅建築	53㎡	96.07.10 96.07.18	縄文時代早～中期土坑2 貝殻文土器・石器
試6	盛岡市山王町7-60	气象台建設	131㎡	97.09.18 97.09.30	縄文時代中期遺構・遺物 多数
試7	盛岡市山王町1-1	宅地造成	47㎡	98.03.24	遺構・遺物なし
試8	盛岡市山王町42-4	個人住宅建築	17㎡	98.08.20	遺構・遺物なし
9	盛岡市山王町7-60	气象台建設	2,000㎡	98.04.08 98.08.06	縄文時代中期竪穴住居跡30 土坑119 土器・石器
10	盛岡市山王町64-1	宅地造成	1,623㎡	99.09.02 99.11.13	平安時代竪穴住居跡15 土師 器・須恵器 縄文時代早期土器
11	盛岡市山王町56-1	宅地造成	1,400㎡	06.11.06 06.12.15	縄文時代中期土坑12 遺物包含層 土器・石器
12	盛岡市山王町64-1	個人住宅建築	163㎡	08.07.15 08.09.03	平安時代竪穴住居跡3 土師器・須恵器

第3表 山王山遺跡調査成果



第 34 図 山王山遺跡全体図

(2) 過去の調査

本遺跡は、平成4年から20年度まで12次にわたる調査が実施されている。これまでに個人住宅の建設、公共施設建設、共同住宅建設、宅地造成などともなう発掘調査が実施されている（第34図）。

第9次調査は盛岡地方気象台建設ともなう事前調査として実施された。調査区は遺跡中央の最も標高の高い場所に位置し、縄文時代中期の竪穴住居跡やフラスコ形土坑が多数発見されている。竪穴住居跡の一部からは、底部穿孔された深鉢を倒立の状態に住居の床面に埋める「伏甕」と呼ばれる土器が数点出土している。

第10次調査区は遺跡東部の緩斜面に位置し、共同住宅建設ともない実施された。平安時代の竪穴住居跡や縄文時代早期の遺物包含層が発見されている。10次調査では、9次調査のような中期の竪穴住居跡やフラスコ形土坑は確認されておらず、時代によって集落の立地に相違があることが窺える。

第11次調査は宅地造成ともなう事前調査として実施し、縄文時代中期のフラスコ形土坑や早期の遺物包含層が発見されている。

2. 調査成果

(1) 平成20年度の調査

平成20年度の山王山遺跡の発掘調査は、個人住宅建築に伴い第12次調査を実施した(第35図)。

第12次 第12次調査区は遺跡南東部の北西から南東に下がる斜面に位置する。確認した遺構は、平安時代の竪穴住居跡3棟と縄文時代の遺物包含層である。調査期間は平成20年7月15日～9月3日、調査面積は163㎡である。

(2) 古代の遺構・遺物

R A 501 竪穴住居跡 (第36図)

位 置 調査区北西端側 平 面 形 方形 主軸方向 N 79° E 重複関係 なし

規 模 東西壁 6.0 m以上×南北壁 6.25 m以上 (南半部は攪乱で削平, 西半部は調査区外)

掘 込 面 削平 検 出 面 II a層上面

埋 土 自然堆積で層相の違いにより、A層～D層に大別される。

A層—黒褐色土を主体とし、粒状の褐色土を微量に含む。2層に細分される。

B層—黒色土を主体とし、粒状の褐色土を少量含む。4層に細分される。

C層—暗褐色土を主体とする。

D層—黒褐色土を主体とし、粒状の暗褐色土を微量に含む。2層に細分される。

壁の状態 検出面から床面までの深さは0.30～0.36mで、やや外傾して立ち上がる。

床の状態 床面は北から南に向かって0.10mほど下がる。壁際には幅0.12～0.18m、深さ0.06～0.10mの周

溝が壁北辺側と壁東側にめぐる。構築土(L層)は黄褐色土を主体に、粒~塊状の黒褐色土を含み、厚さは0.04~0.22 mをはかる。

カマド カマドは東壁中央付近に構築されている。煙道の平面形は溝状で煙出部や燃焼部よりも一段高い構造を呈する。途中削平されており、煙出部までは繋がっていない。煙道の規模は、長さ0.56 m、幅0.12~0.26 m。煙出部の規模は直径0.76 m、深さ0.34 mをはかる。

燃焼部 カマドの基底部分は残存しておらず、火床面も攪乱によってそのほとんどが削平されている。カマド崩壊土(J層)は褐色土を主体とし、粒状~塊状の黒褐色土と焼土を多く含む。

柱穴 床面から6口のピットを検出した。主柱穴はP1・2で、柱痕跡が認められる。各ピットの深さは、P1-0.38 m・P2-0.54 m・P3-0.13 m・P4-0.20 m・P5-0.10 m・P6-0.11 m。

出土遺物(第39図1~14, 第40図15) 1~3は底部の切り離しが回転糸切無調整の須恵器坏である。2は体部外面に墨書文字が認められ、「千」と判読できる。4~7はあかやき土器の坏である。8は内面黒色処理を施した、土師器坏である。9は体部外面に墨書文字が認められる土師器坏である。文字の判読は不明である。10はあかやきの甕である。11は内面が黒色処理とヘラミガキが施された土師器甕である。12~14は須恵器甕である。12・13は内外の調整痕が平行タタキ目である。14は内面の調整痕が青海波を呈する。15は多孔質安山岩製の砥石である。両面使用されている。

R A 502 竪穴住居跡(第37図)

位置 調査区中央 **平面形** 方形と考えられる **主軸方向** 不明 **重複関係** なし

規模 東西壁2.65 m以上×南北壁4.36 m以上(南半部は攪乱で削平, 東半部は調査区外)

掘込面 削平 **検出面** II a層上面

埋土 自然堆積で層相の違いにより、A層~C層に大別される。

A層—黒褐色土を主体とし、粒状の褐色土を微量に含む。

B層—黒褐色土を主体とし、粒状の褐色土と灰白色火山灰を少量含む。

C層—黒褐色土を主体とし、粒~塊状の褐色土を多く含む。硬くしめる層である。

壁の状態 検出面から床面までの深さは0.20~0.26 mで、外傾して立ち上がる。北~西壁は斜面の流水による攪乱を受け、不整形を呈する。

床の状態 床面はほぼ平坦である。構築土(L層)は黒褐色土を主体に、粒~塊状の褐色土を含み、厚さは0.04~0.15 mをはかる。

カマド 調査区外あるいは削平。

柱穴 床面から3口のピットを検出した。主柱穴はP2・3で、柱痕跡が認められる。各ピットの深さは、P1-0.14 m・P2-0.36 m・P3-0.34 m。

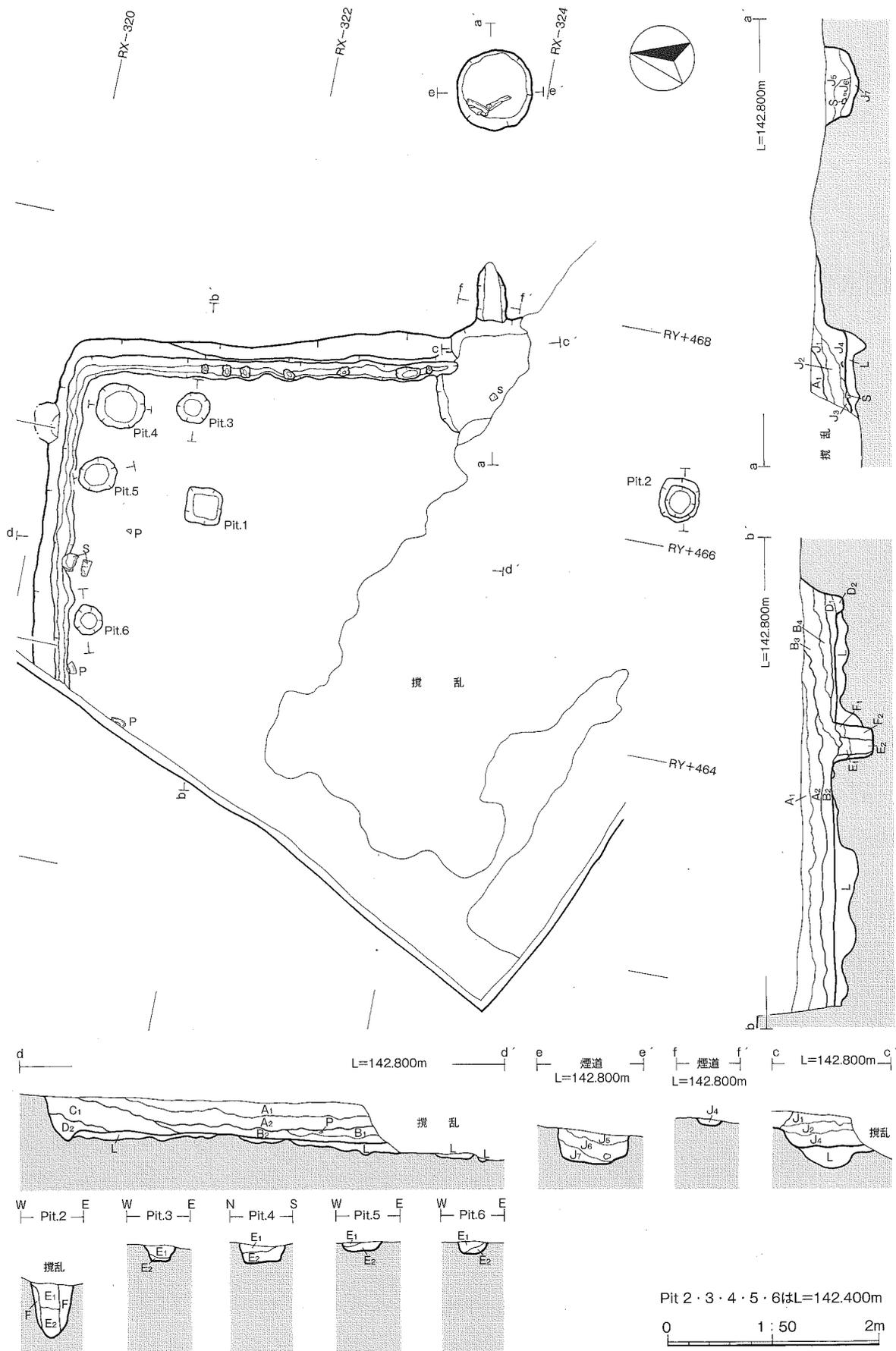
出土遺物(第40図16・17) 16はあかやきの坏である。17は内外平行タタキ目が施された須恵器甕である。

R A 503 竪穴住居跡(第38図)

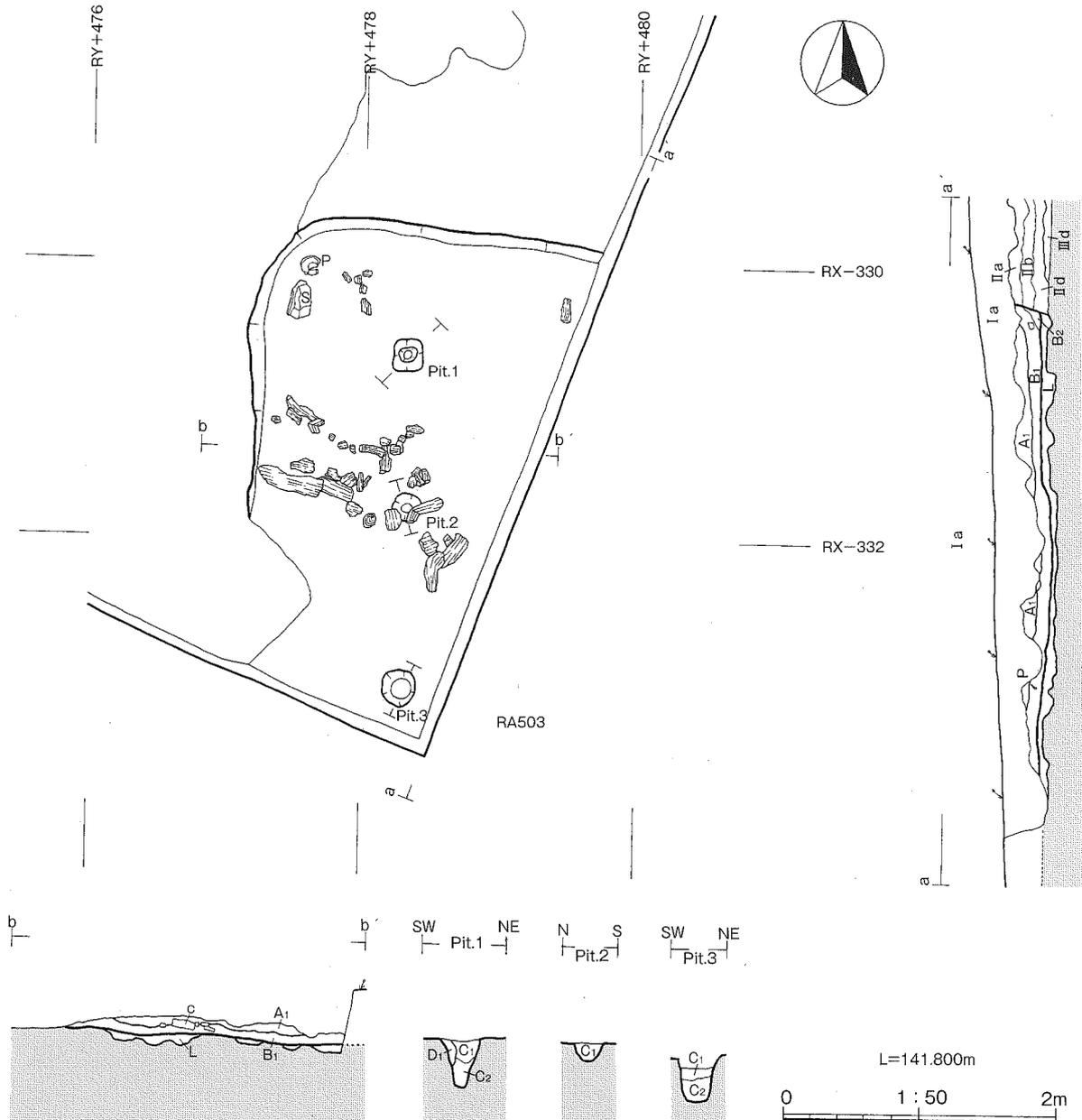
位置 調査区南東 **平面形** 方形と考えられる **主軸方向** 不明 **重複関係** なし

規模 東西壁2.32 m以上×南北壁3.71 m以上(南一東半部は調査区外)

掘込面 削平 **検出面** II a層上面



第 36 図 R A 501 竪穴住居跡



第 38 図 R A 503 竪穴住居跡

埋 土 自然堆積で層相の違いにより、A層～B層に大別される。

A層—黒色土を主体とし、粒状の褐色土を微量に含む。

B層—黒褐色土を主体とし、粒状の黄褐色土と炭化物を多量に含む。

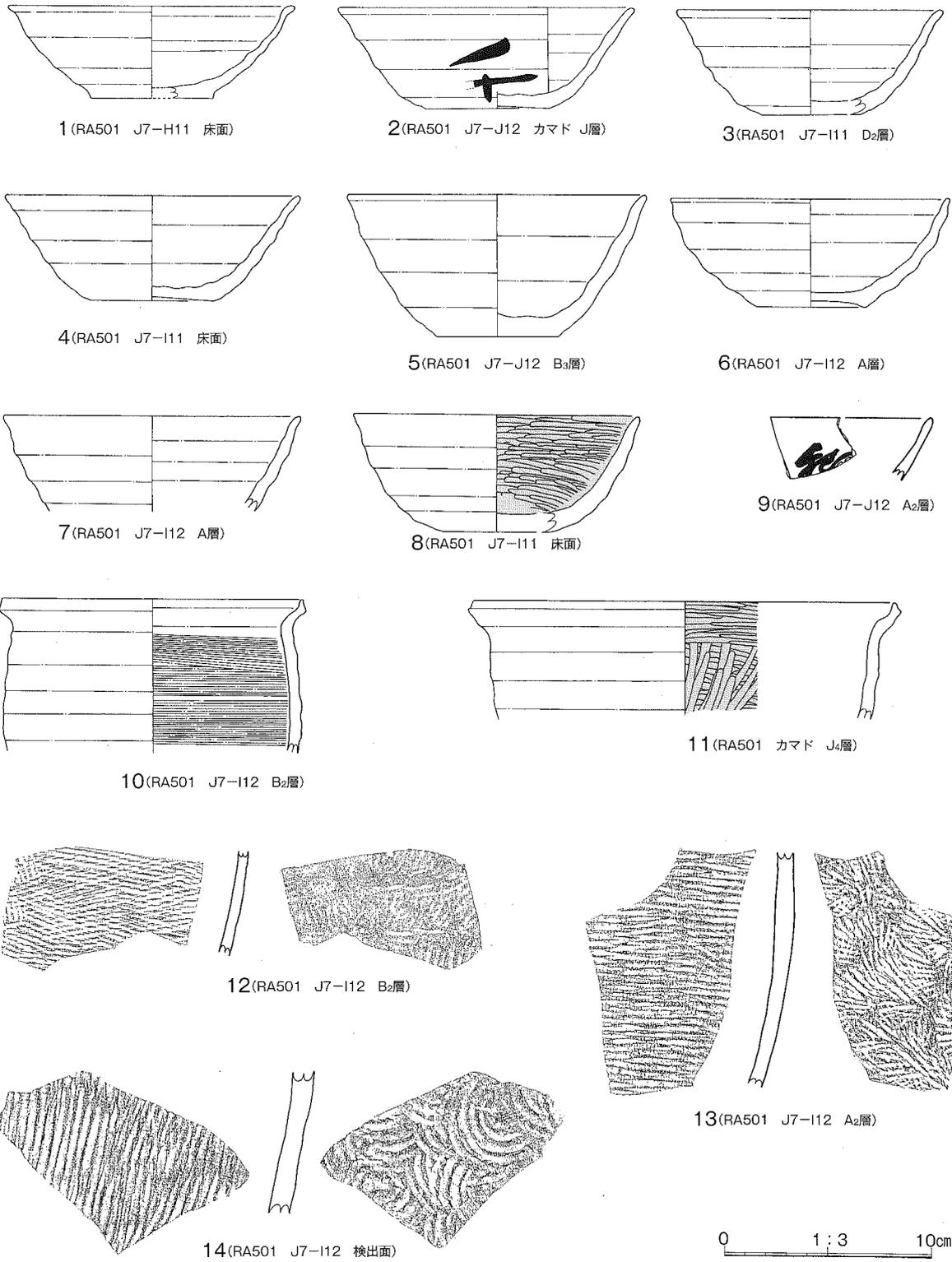
壁の状態 検出面から床面までの深さは0.05～0.20mで、外傾して立ち上がる。

床の状態 床面は中央付近で0.05 mほど下がる。構築土（L層）は黒褐色土を主体に、粒～塊状の黄褐色土を多く含み、厚さは0.02～0.08 mをはかる。

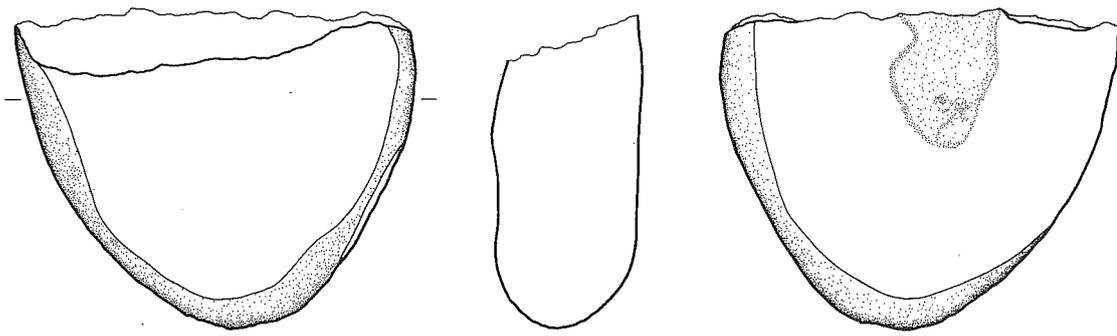
カ マ ド 調査区外にあると考えられる。

柱 穴 床面から3口のピットを検出した。各ピットの深さは、P 1-0.34 m・P 2-0.13 m・P 3-0.31 m。

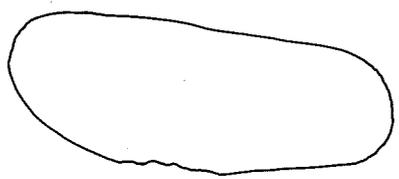
出土遺物（第 40 図 18） 18は内面に黒色処理とヘラミガキが施された土師器坏である。



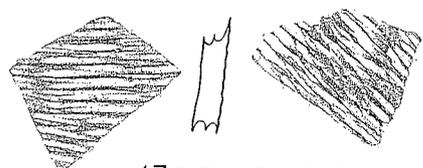
第 39 図 R A 501 竪穴住居跡出土遺物



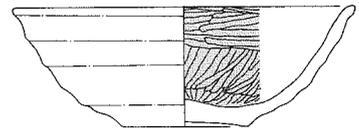
15(RA501 J7-I11 床面)



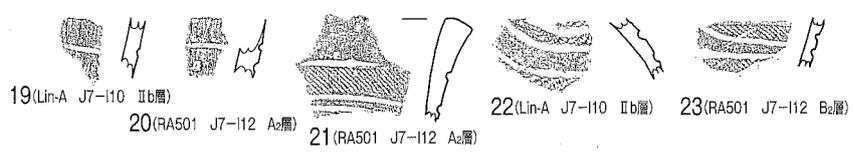
16(RA502 J7-N13 B₁層)



17(RA502 J7-N13 B₁層)



18(RA503 J7-P17 B層)



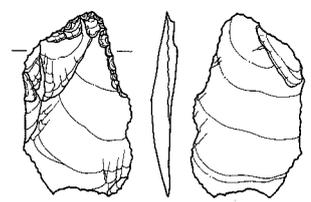
19(Lin-A J7-I10 IIb層)

20(RA501 J7-I12 A₂層)

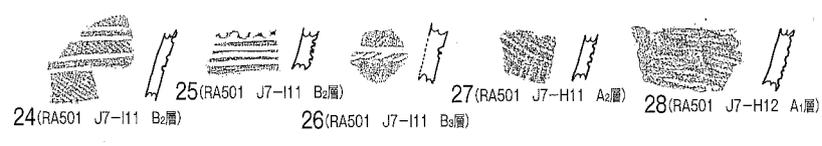
21(RA501 J7-I12 A₂層)

22(Lin-A J7-I10 IIb層)

23(RA501 J7-I12 B₂層)



29(Lin-A J7-I11 検出面)



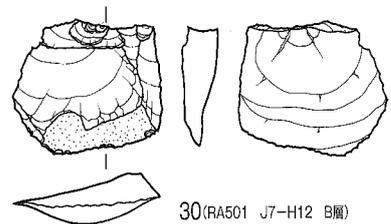
24(RA501 J7-I11 B₂層)

25(RA501 J7-I11 B₂層)

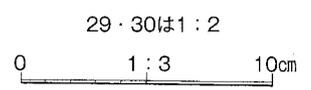
26(RA501 J7-I11 B₃層)

27(RA501 J7-H11 A₂層)

28(RA501 J7-H12 A₁層)



30(RA501 J7-H12 B層)



第40図 R A 501・502・503 竪穴住居跡，遺物包含層出土遺物

(2) 遺物包含層・遺構外出土遺物

今回の調査区では包含層からの出土遺物は僅かであり、その殆どは古代の遺構の埋土から出土したものである。

層位 I層は表土・耕作土である。II層は黒色・黒褐色土主体とし、縄文時代後期の遺物が出土している。

III層は暗褐色土主体で、スコリア粒を少量含む。IV層は褐色土主体でスコリア粒を多く含む。V層は褐色～黄褐色粘土層で礫を多く含む。

土器 (第40図 19～28) 19・20は縄文時代早期の沈線文土器である。外面は縦位のミガキが施され若干の光沢を帯びる。21は山形突起のある深鉢口縁部で体部には横位沈線と地文が施される。22は横位沈線文が施される壺の肩部である。23・24は横位沈線文と地文が施される深鉢の体部である。沈線間の地文は磨り消されている。25は交互刺突文と横位平行沈線文が施される甕形土器片である。26は横位沈線文とそれに沿って列点文が施される甕形土器片である。

石器 (第40図 29・30) 29・30は頁岩製の削器である。29は背面右側縁と上端部に調整を施す。30は背面下端部に調整を施す。

3. 調査のまとめ

山王山遺跡はこれまでの調査で縄文時代早期の遺物包含層、縄文時代中期の集落、平安時代の集落が確認されている。今回の調査で確認した竪穴住居跡は、南に隣接する第10次調査で確認された平安時代の竪穴住居群と一連のものと考えられる。

これまでの調査で遺跡内の遺構の分布は、時代によって異なっていることが判明している。縄文時代中期の竪穴住居跡は主に丘陵頂部付近に多く分布し、フラスコ形土坑は丘陵頂部から斜面に分布する。早期の遺物包含層はその斜面部に形成される。また、平安時代の竪穴住居跡は遺跡東側、さらに標高の低い緩斜面に分布する。

V. 新堰端遺跡 (第11次調査)

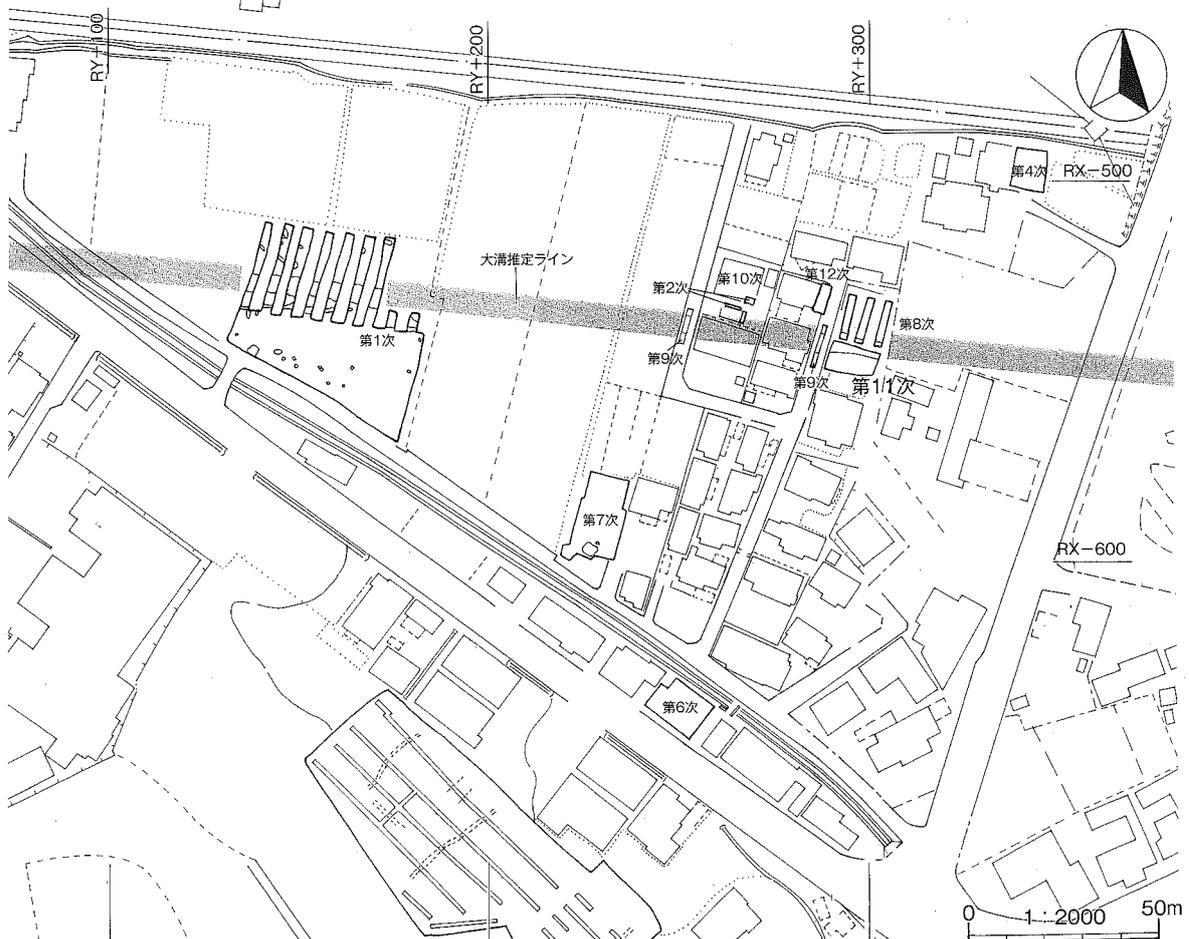
1. 遺跡の環境

(1) 遺跡の概要

位置 新堰端遺跡は、盛岡市中心部から南西へ約3.5 kmの盛岡市下太田新堰端に所在する(第1図)。国指定史跡志波城跡外郭南辺の南東部に隣接し、現況は宅地や水田・畑・果樹園などの農地が主体となっている。遺跡の範囲は東西約400 m、南北100～150mと推定され、標高は130～131 mである。

地形・地質 志波城跡を含む太田地区の遺跡は、雫石川の流路転換によって形成された沖積段丘上に立地している。この沖積面には雫石川の下刻により大きく4本の旧河道が確認されており、これら旧河道の両岸には自然堤防や微高地(沖積段丘)が形成されている。新堰端遺跡もこの沖積段丘上に立地している。

周辺の遺跡 太田地区には、志波城をはじめとし、古墳時代末～古代の遺跡が数多く分布する。北側には志波城跡、西側に田貝遺跡、南側に石仏遺跡があり、それぞれ主に平安時代の遺構が確認されている。また、数は少ないが縄文時代後期～弥生時代の遺構・遺物も確認されている。石仏遺跡では焼土遺構とそれに伴う多量の縄文時代後期の土器が出土している。



第41図 新堰端遺跡全体図

(2) 過去の調査

新堰端遺跡は昭和 62 年以降、現在までに 12 次に渡って調査が実施されている。第 1 次調査で確認された S D 001 大溝跡は志波城外郭築地線と並走していることから、志波城付属の区画施設と想定されている。その他の調査で確認されている大溝も同一のものと考えられる。

2. 調査成果

(1) 平成 21 年度の調査

平成 21 年度は国庫補助事業として個人住宅建築にともない第 11 次調査を行った。調査区は、遺跡のほぼ中央に位置する。調査期間は平成 21 年 8 月 19 日～ 30 日で、調査面積は 233m²である。
遺構・遺物 検出した遺構は S D 001 大溝跡 1 条で、埋土上層から朱塗りの球胴甕が出土している。

回数	所在地	調査原因	面積 (m ²)	期間	検出遺構・遺物
1	下太田新堰端 4-3	病院建設	914	87.09.01 87.09.12	縄文時代土坑 27, 埋設土器 1 平安時代大溝跡 1, 竪穴住居跡 1
2	下太田新堰端 2-23	擁壁工事	4	89.11.08	遺構・遺物なし
3	下太田新堰端地内	水道工事	400	92.12.01 92.12.15	平安時代溝跡, 土坑検出のみ
4	下太田新堰端 1-2	住宅新築	91	93.04.12 93.04.15	遺構・遺物なし
5	下太田新堰端 1-1	店舗建設	300	96.04.19 96.04.30	平安時代溝跡 3, 土坑 3
6	下太田新堰端 7-9	住宅新築	75	96.08.26	遺構・遺物なし
7	下太田新堰端 2-5	住宅新築	258	97.04.07 97.04.11	平安時代竪穴住居跡 1
8	下太田新堰端 2-10	住宅新築	78	99.07.27 99.07.28	平安時代大溝跡 1
9	下太田新堰端地内	下水工事	180	06.08.07 06.10.29	平安時代大溝跡 1
10	下太田新堰端 2-23	住宅改築	3	90.10.15 90.10.29	遺構・遺物なし
11	下太田新堰端 2-9	住宅新築	70	09.08.19 09.08.31	平安時代大溝跡 1
12	下太田新堰端 2-13	住宅増築	3	09.09.18	遺構・遺物なし

第 4 表 新堰端遺跡調査成果一覧

(2) 古代の遺構・遺物

SD 001 大溝跡 (第 42 図)

位置 調査区北側 平面形 直線状に東西に延びる 断面形 台形
 規模 検出された長さは 11.35 m, 幅は上端 1.65 ~ 2.85 m, 下端 0.68 ~ 1.90 mをはかる。
 掘込面 削平 検出面 表土直下黄褐色シルト層上面
 埋土 埋土は自然堆積で A ~ G 層に大別され, 各層はさらに細分される。

A 層 - 黒 ~ 黒褐色土を主体とし, 粒状の褐色土, 黄褐色土を微量に含む。

B 層 - 黄褐色シルトを主体とし, 粒状の黒褐色土を少量含む。

C 層 - 黒褐色土を主体とし, 粒状の黄褐色シルトを微量に含む。

D 層 - 黒色土を主体とし, 粒状の褐色シルトを多量に含む。

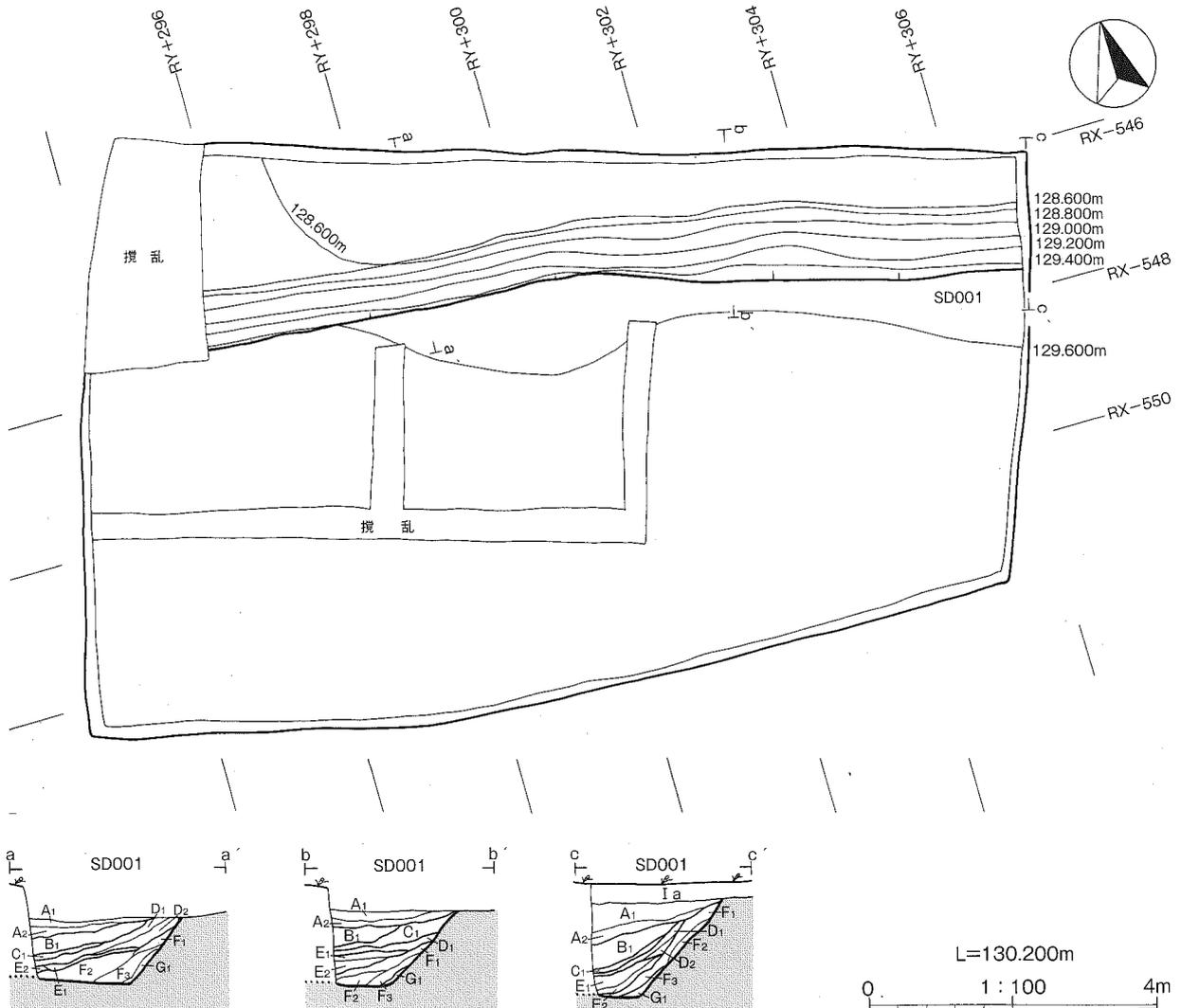
E 層 - 灰白色火山灰を主体とし, 塊状の褐色 ~ 黄褐色土を少量含む。

F 層 - 褐色シルトを主体とし, 塊状の黒褐色土を多量に含む。

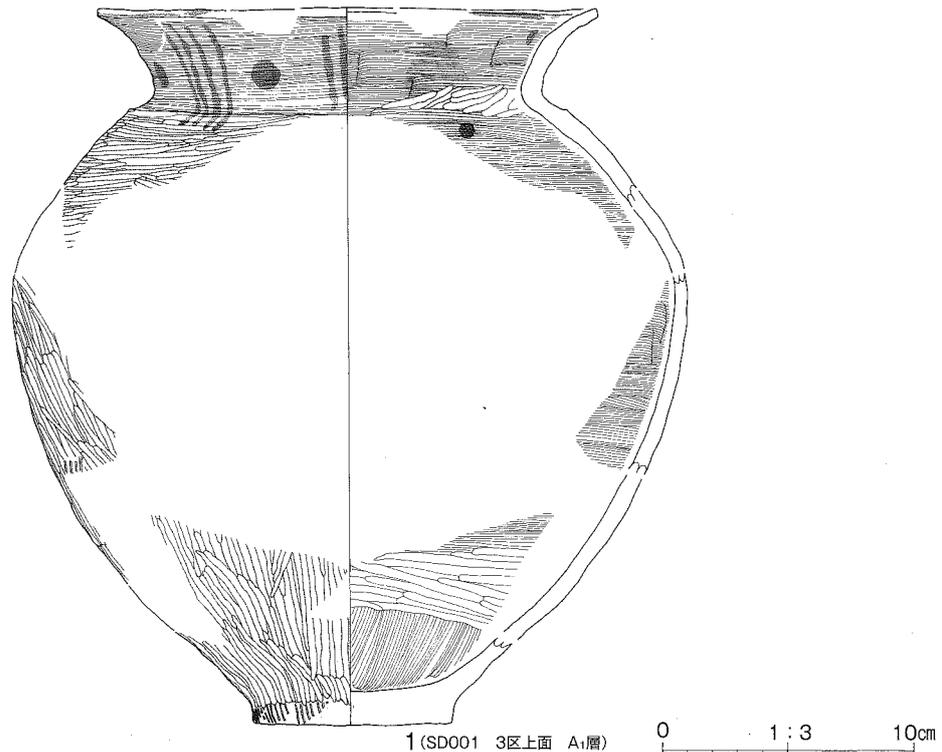
G 層 - 褐色シルトを主体とし, 黄褐色シルトを微量に含む。

壁の状態 検出面からの深さは 1.00 ~ 1.10 m で, 壁は緩やかに外傾して立ち上がる

底面の状態 ほぼ平坦



第 42 図 新堰端遺跡第 11 次調査区全体図、SD001 大溝跡



第43図 SD 001 大溝跡出土遺物

出土遺物(第43図) A1層より、朱塗りの球胴甕が出土している。朱の文様構成は、口縁部外面は4条の縦線の中に丸文が配置され、内面にも丸文が等間隔で塗布されている。体部外面は全面朱塗りが施されている。調整は口縁部内外ともにヨコナデ、体部は外面がミガキ、内面はナデとミガキが施される。

3. 調査のまとめ

SD 001 大溝跡 今回の調査では平安時代のもと考えられる大溝跡1条を確認した。埋土中(E層)に灰白色火山灰を含み、東西に走行することから第1次調査(志波城跡第39次調査)で確認されているSD 001大溝跡と同一のもと考えられる。このSD 001大溝跡は志波城跡の外郭南辺築地線より約108m(1町)、SD 010外郭南辺外大溝跡より約62m南に位置し、出土遺物や埋土状況がSD 010外郭南辺外大溝と酷似する点や、外郭築地線と並走していることから志波城跡付属の区画施設の可能性が指摘されている。

朱塗り球胴甕 SD 001大溝跡からは、口縁部に朱を用いて数条単位の縦線を施し、体部外面を朱で塗りつぶした球胴甕が出土している。同様の土器は、志波城跡第16次調査(盛岡市教育委員会 1981『志波城跡』)のSI 371 竪穴住居跡から出土している。また、盛南開発区域内の台太郎遺跡(岩埋文 2002『台太郎遺跡第26次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団発掘調査報告第416集)や、県南では北上市八幡遺跡(北上市教育委員会 2009『八幡遺跡』北上市埋蔵文化財調査報告第98集)からも出土している。いずれの土器も朱塗り部位や器形が酷似しており、年代は8世紀後半に比定されるとある。しかし、今回出土した土器の層位は、灰白色火山灰(粉状パミス)より上の志波城廃絶後に堆積した層であり、前述の土器群とは時期差がある。この時期差については、今後さらなる調査の蓄積とそれぞれの出土土器や遺構の詳細な比較検討によって明らかにしたい。

VI. 西鹿渡遺跡（第23次調査）

1. 遺跡の環境

（1）遺跡の概要

位置 西鹿渡遺跡は、盛岡市街地から南東約3.5kmの三本柳2地割内に位置する（第1図）。遺跡の東側には北上川が流れ、四方は旧河道によって画されている。遺跡範囲は約300m四方と推定される。以前は畑や果樹園などが多く見られたが、現在は宅地化が著しい地域である。

地形・地質 本遺跡の東を南流する北上川と本遺跡の北約3.6kmを東流し北上川と合流する雫石川は流路の転換が著しく、北上川西岸と雫石川南岸には細かい旧河道が網状に確認されている。本遺跡はその旧河道によって画された低位沖積段丘上に立地する。

周辺の遺跡 本遺跡をはじめとして、市内太田から盛南地区（市内本宮・飯岡周辺）、さらに南に隣接する矢巾町域まで広がる低位沖積段丘上には、古代から中世にかけての遺跡が多く分布している。本遺跡の北には碓堰遺跡、南には百目木遺跡・下永林遺跡・三本柳幅遺跡・高槽A遺跡などが立地する。各遺跡では、8世紀後半から9世紀後半を中心とした集落が確認されている。百目木遺跡では、8世紀後半および9世紀後半を中心とした竪穴住居跡が80棟あまり検出され、墨書土器や鉄製農耕具、粉痕のついた土器などが出土している。下永林遺跡からは蕨手刀（市指定文化財）が耕作中に出土しており、古墳群の存在がうかがわれるが、詳細は不明である。また、高槽A遺跡では8世紀後半から末頃を主体とした竪穴住居跡が調査され、土製紡錘車が多数出土している。上記のような古代集落のほか古代城柵志波城跡（市内下太田）や徳丹城跡（矢巾町西徳田）も分布し、河川に隣接する平野部に農耕を基盤とした集落が営まれた地域であったことが分かっている。

（2）過去の調査

本遺跡は、昭和55年の旧都南村教育委員会が実施した宅地造成にともなう調査（第1次調査）以降、宅地造成、個人住宅の新築、建替え、アパート建設などにともない、今年度まで22次にわたる調査が実施されている。畑の天地返しによって大きく攪乱され遺構や遺物が残存しない地点もあるが、奈良・平安時代の竪穴住居跡、溝跡、土坑、およびそれ以降の溝跡や土坑が確認されている。遺物は8世紀半ばから9世紀後半と考えられる奈良・平安時代の土師器・あかやき土器・須恵器、鉄製品、近世以降の陶磁器片などが出土している。

次数	所在地	調査原因	面積	期間	検出遺構・遺物
1	盛岡市三本柳2割地	宅地造成	1,000㎡	80.07.20 80.08.14	奈良・平安時代竪穴住居跡各1棟, 時期不明の溝跡1条。
試掘 2	盛岡市三本柳2割地 28-1, 2	宅地造成	652㎡	93.08.18 93.08.19	平安時代の竪穴住居跡12棟, 土坑4基, 古代以降の溝跡4条。
試掘 3	盛岡市三本柳2割地	宅地造成	100㎡	93.06.16 93.06.16	なし(地山)。
試掘 4	盛岡市三本柳2割地 内	宅地造成	172㎡	93.12.20 93.12.20	なし。
5	盛岡市三本柳2割地 36-2	防火水槽建設	62㎡	94.09.01 94.09.03	奈良時代の竪穴住居跡1棟・土坑2基。
6	盛岡市三本柳2割地 22-7	個人住宅新築	291㎡	95.07.04 95.07.11	奈良時代の竪穴住居跡1棟・土坑1基, 時期不明の溝跡1条。
7	盛岡市三本柳2割地 16-6	個人住宅新築	393㎡	95.08.18 95.09.05	縄文時代の土坑1基, 奈良時代の竪穴住居跡2棟・土坑。
試掘 8	盛岡市三本柳2割地 39-1	共同住宅新築	54㎡	97.11.11 97.11.11	なし。
試掘 9	盛岡市三本柳2割地 47-5	共同住宅新築	268㎡	97.11.28 97.11.28	なし。
試掘 10	盛岡市三本柳2割地 47-6	共同住宅新築	269㎡	98.02.12 98.02.12	なし。
試掘 11	盛岡市三本柳2割地 内	共同住宅新築	196㎡	98.08.17 98.08.17	平安時代の竪穴住居跡2棟。
12	盛岡市三本柳2割地	宅地造成	970㎡	02.10.01 02.12.02	奈良時代の竪穴住居跡5棟・土坑3基, 近代の溝跡・土坑。
試掘 13	盛岡市三本柳2割地 25-1	共同住宅新築	820㎡	02.07.23 02.07.25	奈良時代の竪穴住居跡5棟, 時期不明の溝跡3条。
試掘 14	盛岡市三本柳2割地 内	宅地造成	555㎡	02.07.29 03.07.31	奈良時代の竪穴住居跡13棟, 時期不明の溝跡1条。
試掘 15	盛岡市三本柳2割地 内	宅地造成・共同住宅新築	501㎡	02.11.25 02.11.28	平安時代の土坑2基・溝跡4条。
試掘 16	盛岡市三本柳2割地 39-43	共同住宅に伴う擁壁設置	68㎡	03.04.16 03.04.16	なし。
試掘 17	盛岡市三本柳2割地 42-1	共同住宅新築	146㎡	03.04.16 03.04.16	なし。
18	盛岡市三本柳2割地 36-1～4	宅地造成	2,226㎡	03.06.02 03.08.02	奈良時代の竪穴住居跡13棟, 平安時代の住居跡4棟, 奈良・平安時代の土坑17基, 古代以降の溝跡5条, 時期不明の溝跡3条
19	盛岡市三本柳2割地 内	擁壁設置	102㎡	06.04.13 06.04.15	時期不明の溝跡2条。
20	盛岡市三本柳2割地 49-50～66	下水道・進入路	320㎡	06.07.31 06.08.11	奈良時代の竪穴住居跡2棟・竪穴状跡1棟。
21	盛岡市三本柳2割地 49-50～66	個人住宅改築	62㎡	07.04.16 07.04.27	奈良時代の竪穴住居跡1棟。
試掘 22	盛岡市三本柳2割地 16-35	個人住宅新築	77㎡	09.03.18	奈良時代の竪穴住居跡3棟・土坑1基
23	盛岡市三本柳2割地 16-35	個人住宅新築	80㎡	09.06.01 09.06.12	奈良時代の竪穴状遺構1棟・土坑3基

第5表 西鹿渡遺跡調査成果一覧



第 44 図 西鹿渡遺跡全体図

2. 調査成果

(1) 平成 21 年度の調査

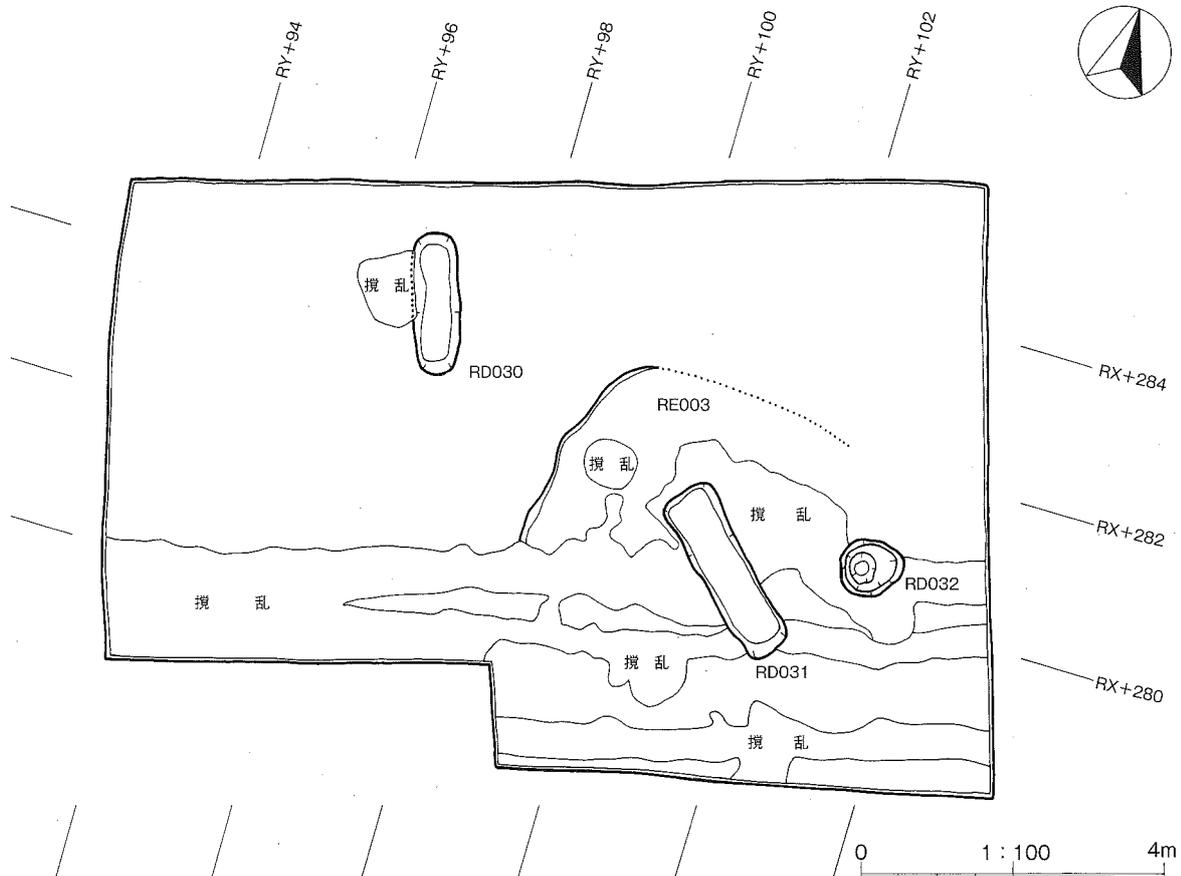
位置 第 23 次調査区は西鹿渡遺跡の北部, 第 7 次調査区の北側に隣接する。事前に試掘調査(第 22 次)を行い, 建物部分に関してのみ本調査を行った。調査期間は平成 21 年 6 月 1 日～ 12 日, 調査面積は 80㎡である。標高値は, 116 m 前後である。

遺構・遺物 検出された遺構は, 竪穴跡 1 棟 (RE 003)・土坑 3 基 (RD 030～032) である。出土遺物は土師器・須恵器片のみである。

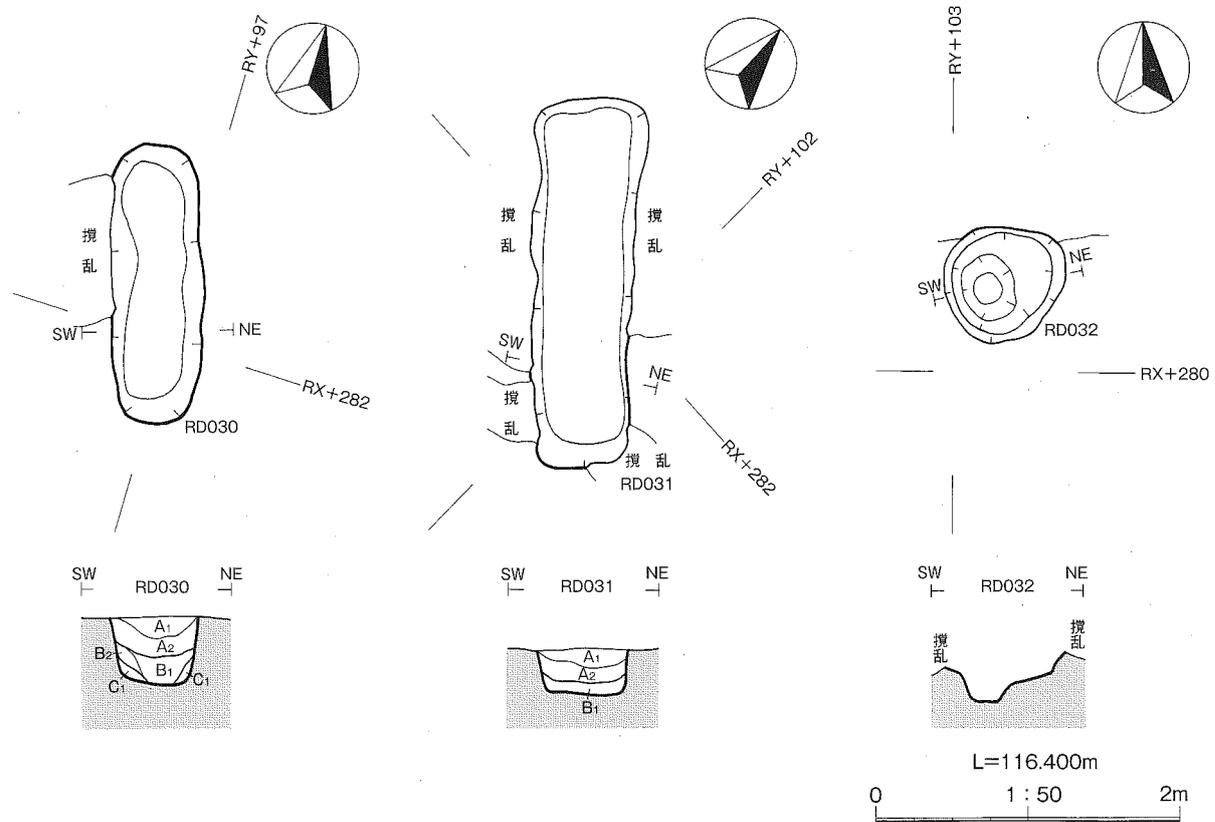
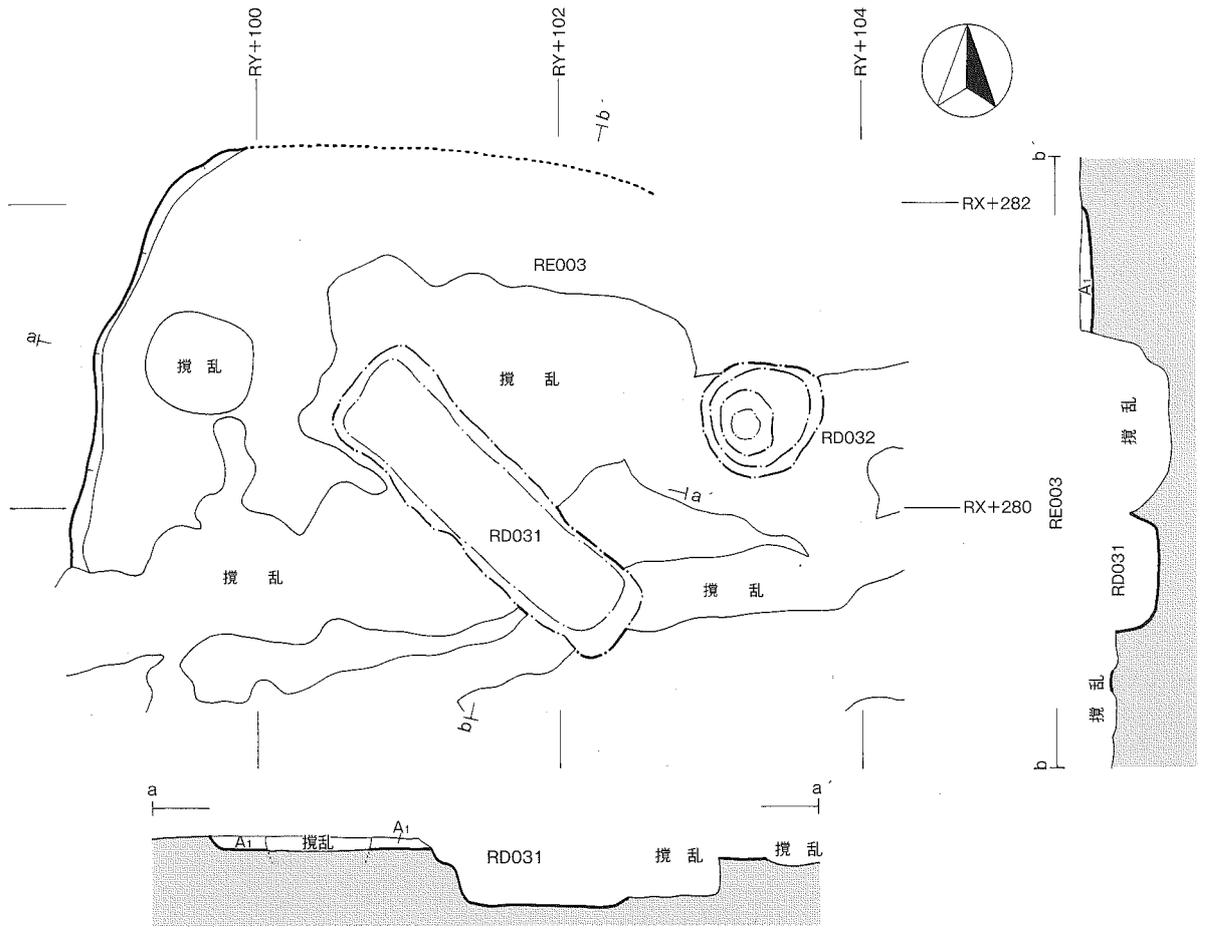
(2) 古代の遺構・遺物

RE 003 竪穴跡 (第 46 図)

位置 調査区西端側 平面形 隅丸方形 重複関係 RD 031・032 に切られる。
 規模 2.9 m 以上× 3.5 m 以上 掘込面 削平 検出面 黄褐色シルト層上面
 埋土 耕作等の攪乱によりほとんど削平されている。わずかに残った A 層は暗褐色土を主体とし, 粒状の黒褐色土と褐色土を多く含む。
 壁の状態 検出面から床面までの深さは 0.08～0.09m で, 外傾して立ち上がる。
 床の状態 床面はほぼ平坦である。出土遺物 土師器片が出土している。



第 45 図 西鹿渡遺跡第 23 次調査区全体図



第 46 图 RE 003 竖穴迹, RD 030·031·032 土坑

R D 030 土坑 (第 46 図)

位 置 調査区北西 平面形 長方形 重複関係 なし 掘込面 削平
検出面 黄褐色シルト層 規 模 長軸上端 1.85 m, 下端 0.64 m 短軸上端 1.60 m, 下端 0.39 m
埋 土 自然堆積による。A～C層に大別される。
A層—黒褐色土を主体とする層で、粒状の明黄褐色土を少量含む。
B層—暗褐色土を主体とする層で、粒～塊状の明黄褐色土を多く含む。
C層—明黄褐色土を主体とする層で、壁の崩壊土と考えられる。
壁の状態 ほぼ垂直に立ち上がり、深さは 0.45 mをはかる。 出土遺物 なし

R D 031 土坑 (第 46 図)

位 置 調査区中央 平面形 長方形 重複関係 なし 掘込面 削平
検出面 黄褐色シルト層 規 模 長軸上端 2.43 m, 下端 2.21 m 短軸上端 0.68 m, 下端 0.54 m
埋 土 自然堆積による。A～B層に大別される。
A層—暗褐色土を主体とする層で、塊状の黄褐色土をやや多く含む。
B層—黄褐色土を主体とする層で、塊状の暗褐色土を少量含む。
壁の状態 ほぼ垂直に立ち上がり、深さは 0.28 mをはかる。
出土遺物 須恵器坏, あかやき土器坏の破片が少量出土している。

R D 032 土坑 (第 46 図)

位 置 調査区西 平面形 円形 重複関係 なし 掘込面 削平
検出面 黄褐色シルト層 規 模 上端 0.82 m, 下端 0.68 m
埋 土 自然堆積による。A～B層に大別される。
A層—黒色土を主体とする層で、粒状の暗褐色土を少量含む。4層に細分される。
B層—黒褐色土を主体とする層で、塊状の褐色土を多く含む。
壁の状態 深さは 0.48 mをはかる。
出土遺物 須恵器坏, あかやき土器坏の破片が少量出土している。

3. 調査のまとめ

これまで西鹿渡遺跡は南東部を中心に調査が行われ、徐々に南東集落の様相が明らかになりつつある。今回の調査を実施した北東部は遺跡の縁辺部にあたるが調査件数が少なく、北東集落の様相を考える上ではまだまだ情報不足である。しかし、散見的に竪穴住居跡は確認されており(第 6・7次調査)、遺跡縁辺部まで集落が広がっていたことが窺える。

今回の調査では奈良時代の竪穴跡 1 棟、土坑 3 基が確認されたが、耕作等の攪乱によって削平されており、残存状況は良くなかった。北東集落の様相を考えるためには、今後の調査例の蓄積が必要である。今後の調査に期待したい。

写真図版



大館町遺跡第 81 次調査 検出前全景（東から）



大館町遺跡第 81 次調査 検出状況全景（東から）



大館町遺跡第81次調査 RA2241 竪穴住居跡



大館町遺跡第81次調査 RD 6652 土坑



大館町遺跡第81次調査 RD 6650 土坑上面 土器出土状況



大館町遺跡第81次調査 RD 6651 土坑上面 石棒出土状況



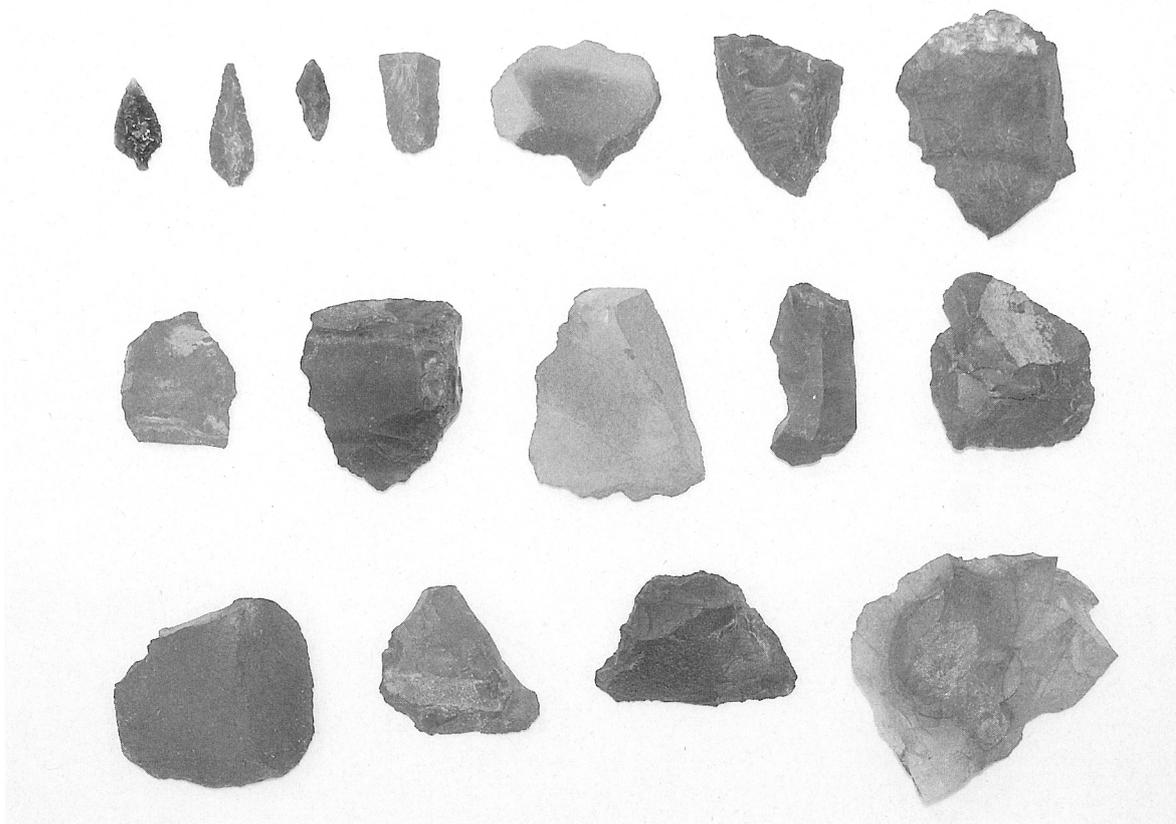
大館町遺跡第81次調査 RA 2241 竪穴住居跡出土遺物(1)



大館町遺跡第81次調査 RA 2241 竪穴住居跡出土遺物(2)



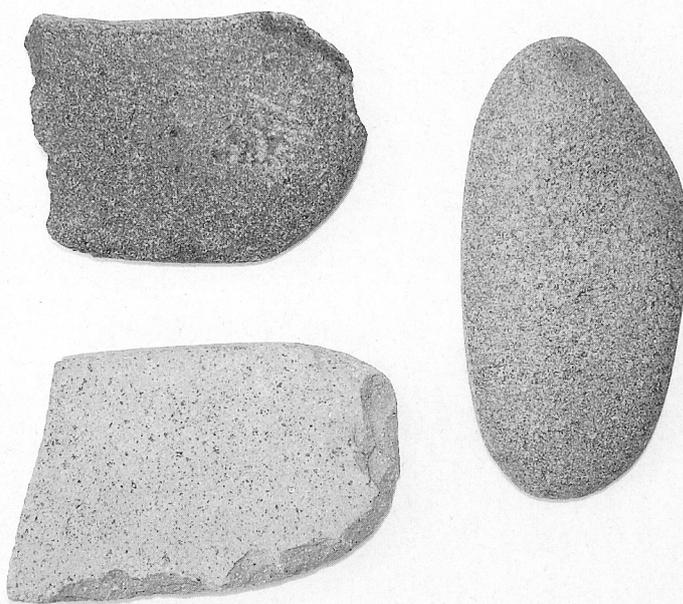
大館町遺跡第81次調査 RA 2241 竪穴住居跡出土遺物(3)



大館町遺跡第81次調査 RA 2241 竪穴住居跡出土遺物(4)



大館町遺跡第81次調査 RA 2241 竪穴住居跡出土遺物(5)



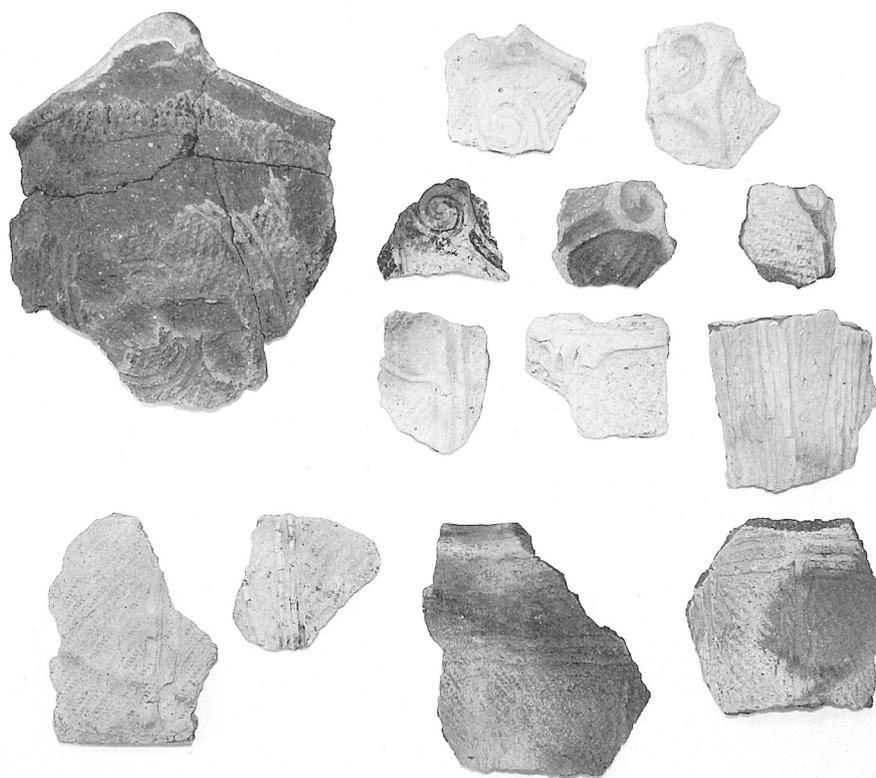
大館町遺跡第81次調査 RA 2241 竪穴住居跡出土遺物(6)



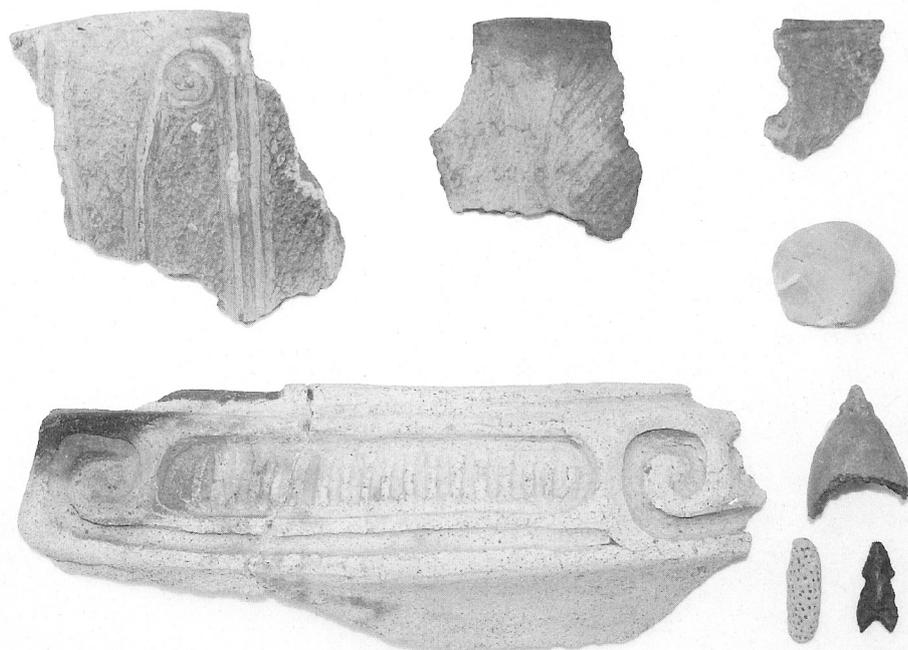
大館町遺跡第81次調査 RA 2241 竪穴住居跡出土遺物(7)



大館町遺跡第81次調査 RA 2242 竪穴住居跡出土遺物(1)



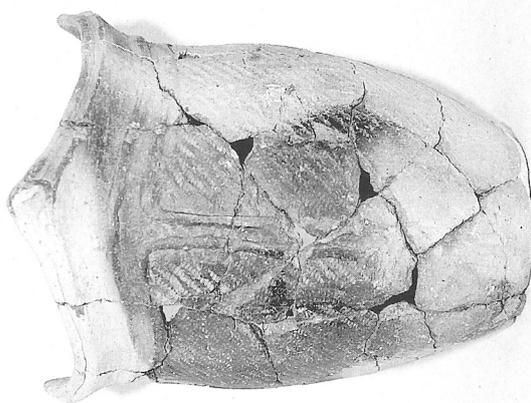
大館町遺跡第81次調査 RA 2242 竪穴住居跡出土遺物(2)



大館町遺跡第81次調査 RA 2242 竪穴住居跡出土遺物(3)



大館町遺跡第81次調査 RD 6650 土坑出土遺物



大館町遺跡第81次調査 RD 6652 土坑出土遺物



大館町遺跡第82次調査区 全景（北から）



大館町遺跡第81次調査 R F 2245 炉跡



大館町遺跡第82次調査 R F 2244・2245炉跡出土遺物



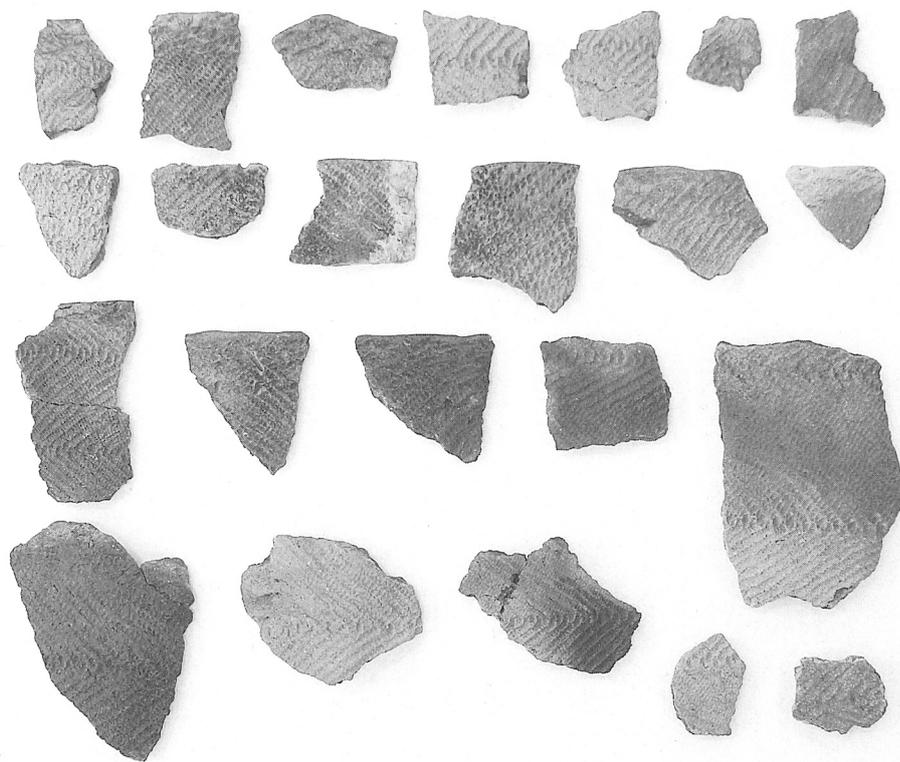
大新町遺跡第80次調査区 全景（南から）



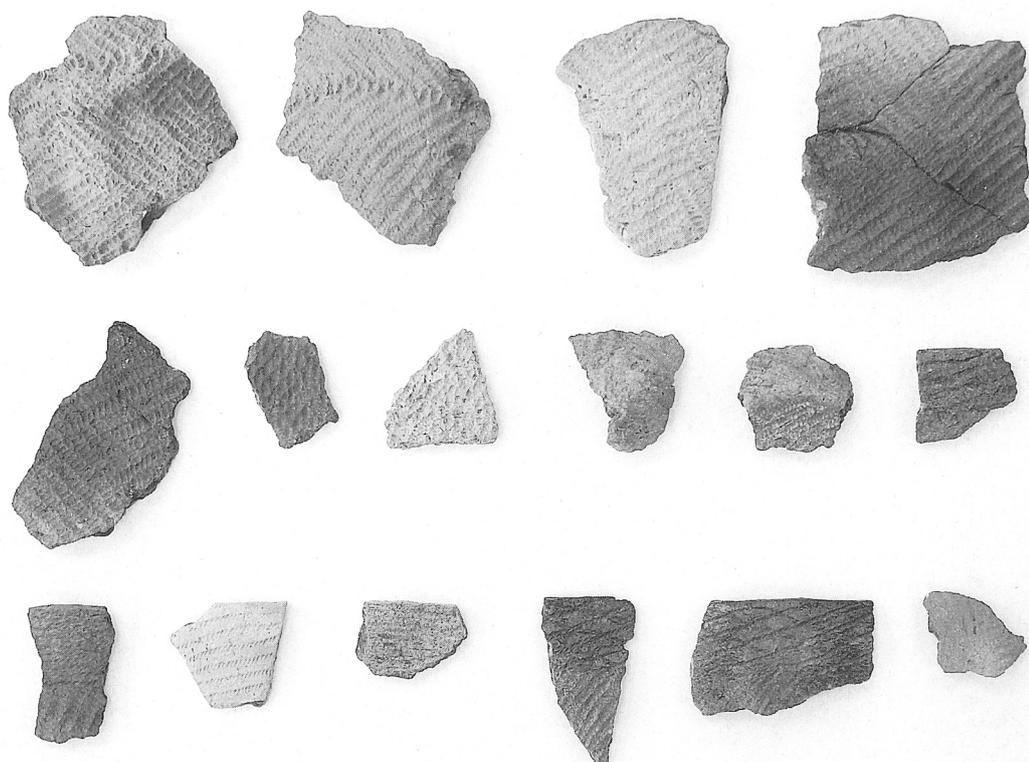
繫V第35次調査区 全景（左：南から 右：北から）



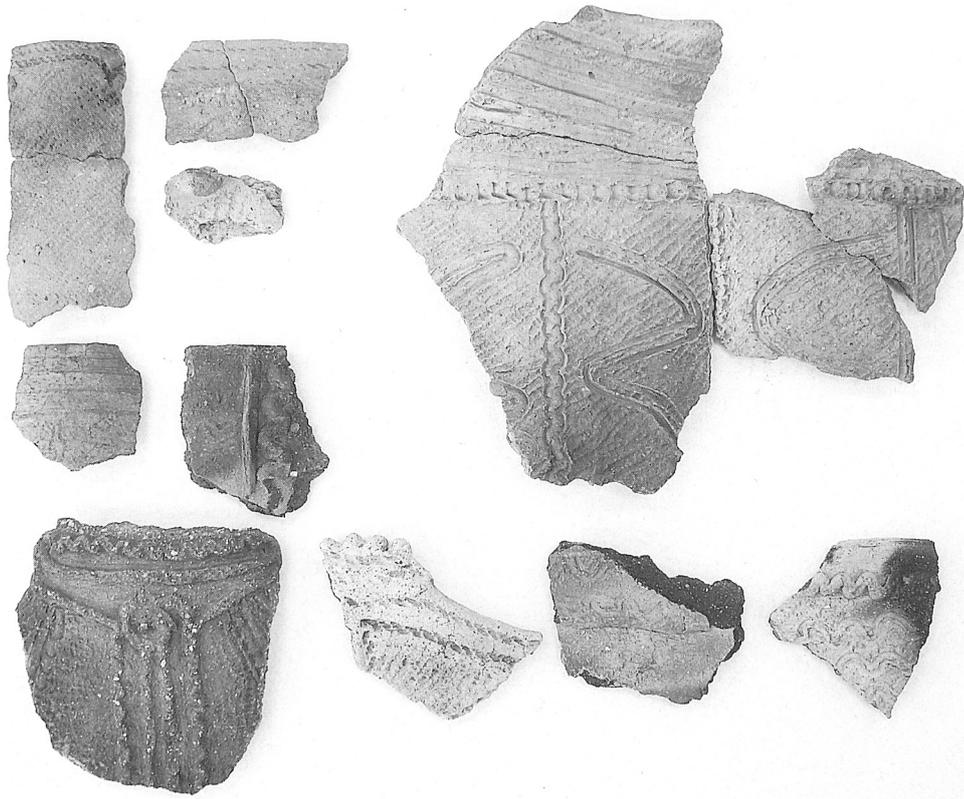
繫V第35次調査区 遺物包含層断面



繫V第35次調査区 遺物包含層出土遺物（1）



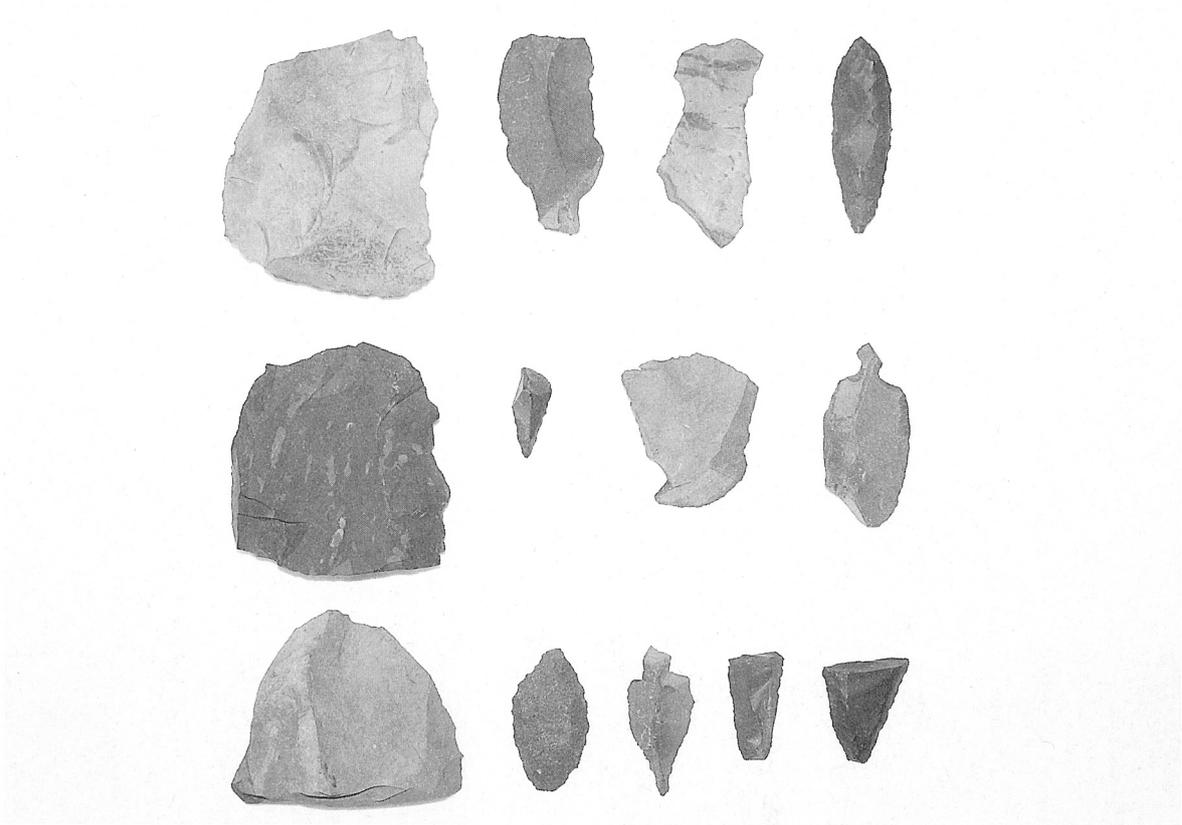
繫V第35次調査区 遺物包含層出土遺物（2）



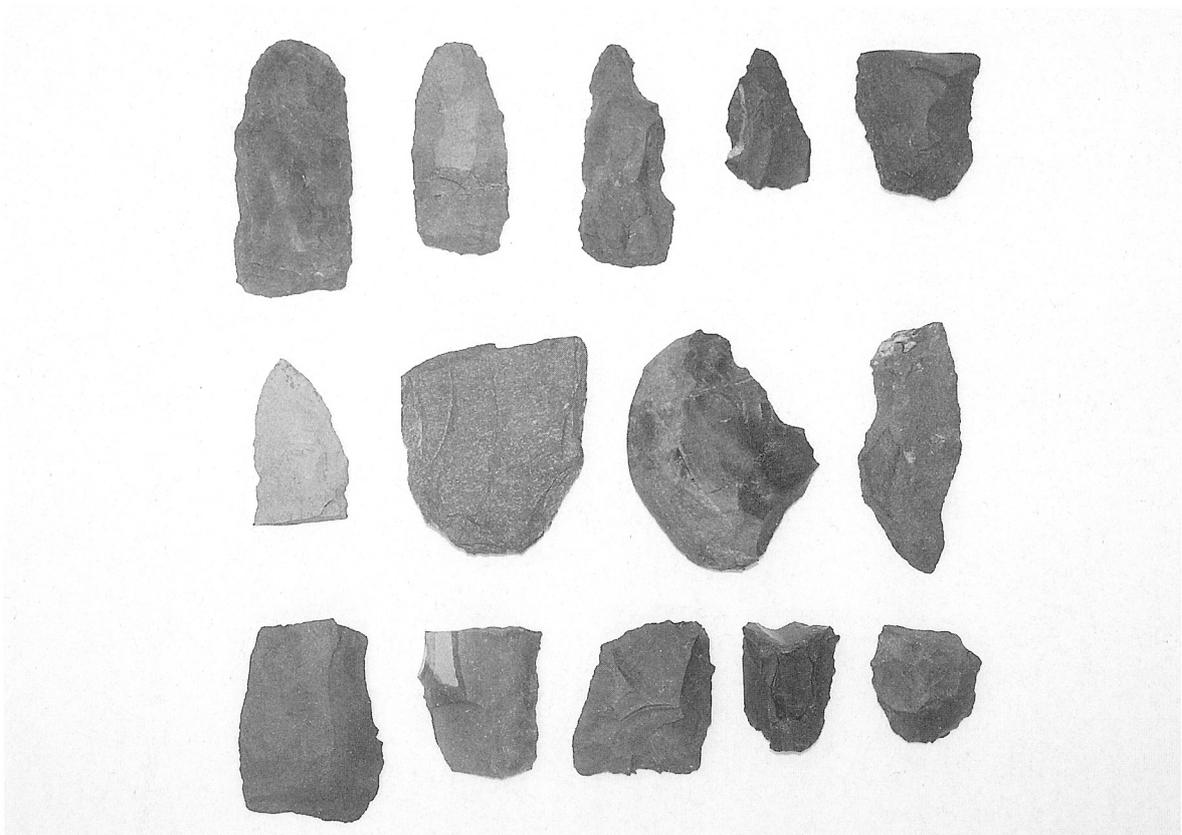
繫V第35次調査区 遺物包含層出土遺物（3）



繫V第35次調査区 遺物包含層出土遺物（4）



繫V第35次調査区 遺物包含層出土遺物 (5)



繫V第35次調査区 遺物包含層出土遺物 (6)



山王山遺跡第12次調査区 北西側全景（南東より）



山王山遺跡第12次調査 RA501 竪穴住居跡



新堰端遺跡第11次調査区 全景（東から）



新堰端遺跡第11次調査 SD001大溝跡出土遺物



西鹿渡遺跡第23次調査区 全景（東から）



西鹿渡遺跡第23次調査 RD030土坑

報告書抄録

ふりがな	もりおかしないいせきぐん							
書名	「盛岡市内遺跡群」							
副書名	平成 20・21 年度発掘調査報告書							
編著者名	佐々木亮二 神原雄一郎 佐々木紀子							
編集機関	盛岡市 遺跡の学び館							
所在地	〒 020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋 13 番地 1 TEL.019-635-6605							
発行年月日	2011 年 3 月 18 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おあなてちよういせき 大館町遺跡	いわてけんもりおかしだい 岩手県盛岡市大 新 町 212, 10 - 13, 10 - 12 の一 部	3201		39°	141°	第 81 次 2008.06.10 ~ 2008.11.28	330	範囲確認調査
				42'	07'	第 82 次 2008.10.15 ~ 2008.10.31	62	個人住宅建設
48"	03"							
39°	141°			第 80 次 2008.06.02 ~ 2008.06.04	32	個人住宅建設		
42'	07'							
48"	04"							
つなぎこいせき 繫 V 遺跡	いわてけんもりおかしつなぎ 岩手県盛岡市繫 あぎなていち 字館市 75 - 1			39°	141°	第 35 次 2008.05.13 ~ 2008.05.28	16	個人住宅擁壁工事
				40'	01'			
				26"	08"			
さんのうやまいせき 山王山遺跡	いわてけんもりおかしさん 岩手県盛岡市山 のうちよう 王町 64 - 1			39°	141°	第 12 次 2008.07.15 ~ 2008.09.03	164	個人住宅建設
				41'	09'			
				54"	59"			
しんせきばたいせき 新堰端遺跡	いわてけんもりおかししも 岩手県盛岡市下 おおたしんせきばた 太田新堰端 2 - 9			39°	141°	第 11 次 2009.08.19 ~ 2009.08.31	233	個人住宅建設
				40'	06'			
				54"	15"			
にしかどいせき 西鹿渡遺跡	いわてけんもりおかしさんほん 岩手県盛岡市三本 がなぎ 柳 2 地割 16 - 35			39°	141°	第 20 次 2009.06.01 ~ 2009.06.12	79	個人住宅建設
				39'	09'			
				52"	49"			
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
大館町遺跡 第 81 次	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡	3	縄文中期土器, 石器	集落内の中央広場西側の土坑 墓群の広がりを確認した。		
			土 坑	4				
近世以降		溝 跡	1					
大館町遺跡 第 82 次		縄文時代	炉 跡	2	縄文中期土器, 石器	遺跡縁辺部の遺構分布状況を 確認した。		
			土 坑	10				
大新町遺跡 第 80 次	集落跡	縄文時代	土 坑	1	なし			
繫 V 遺跡 第 35 次	集落跡	縄文時代	遺物包含層		縄文前・中期土器, 石器	縄文時代前期～中期の遺物包 含層を確認した。		
山王山遺跡 第 12 次	集落跡	縄文時代	遺物包含層		縄文時代後期土器, 石器	遺跡内の古代集落の広がりを 確認した。		
		平安時代	竪穴住居跡	3	土師器・須恵器			
新堰端遺跡 第 11 次	集落跡	平安時代	大 溝 跡	1	土師器	大溝埋土中より朱塗りの土師 器球胴甕が出土した。		
西鹿渡遺跡 第 23 次	集落跡	奈良時代	竪 穴 跡	1	土師器			
			土 坑	3				

盛岡市内遺跡群

—平成20・21年度発掘調査報告書—

2011年3月18日 発行

編 集 盛岡市遺跡の学び館
〒020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋13番地1
電話 019-635-6600 FAX 019-635-6605

発 行 盛岡市教育委員会
〒020-8532 岩手県盛岡市津志田14地割37番2

印 刷 株式会社 光文社
〒020-0106 岩手県盛岡市東松園三丁目12番地1